ISSN 2433-2151

未来の図書館 研究所
調査・研究レポート

2020

The libraries of the future research, Inc. Annual Report. Vol.4 (2020)

未来の図書館 研究所

The libraries of the future research, Inc.

調査・研究レポート　Vol.4（2020） 目次

■ ごあいさつ ―――― 1

■ 未来の図書館 研究所　第４回シンポジウム　記録 ―――― 3

図書館とランドスケープ

伊藤麻理，森山光良，永田治樹

■ 未来の図書館 研究所　第５回シンポジウム　記録 ―――― 33

図書館とレジリエンス

柴崎悦子，三田祐子，永田治樹

■ ワークショップ「図書館員の未来準備」講演レポート

「ツナガル。」から生まれる図書館の可能性　豊山　希巳江 ―――― 63

ごあいさつ

エピデミックとパンデミックは，前者は地域で感染が広がっている状況を，後者は世界的な感染状況に至った状況を表すといいます。コロナ感染が昨年来急速に進展して，現段階では，わが国を含め米英などの報道機関ではパンデミックという言葉で状況を説明しています。

ところが先日，朝の「NHK BS ニュース」をみていて，妙なことに気がつきました。アメリカの ABC や英国 BBC の放送では pandemic といっているのに，フランスの France 2 では épidémique あるいは épidémie という言葉が使われているのです。それで，フランス人になぜ pandémique あるいは pandémie といわないのかと尋ねてみました。pandémie という意味では universel（全世界的）な視野の話になるから，国内の感染についての報道には使わないのだろうとの答えでした。

そういわれてなんとなく納得できましたが，エピデミックとパンデミックの段階的な違いは，フランス語では時間段階よりも空間的な意味合いに重点があるようです。全世界的に通用する言葉とはいえ，一筋縄ではくくれません。言葉は表象であり，話者がどこに焦点をあてているかにより，異なった含意となります。ときにややこしいが，詳しい説明により冷静に理解が可能となります。

今号には，二つのシンポジウム記録を掲載しました。この 2 回ともテーマは，上に述べたようにその焦点のあて方は少し広く，言葉を膨らませて受け止めていただきたいと思います。

第 4 回は「図書館とランドスケープ」，第 5 回は「図書館とレジリエンス」です。耳慣れない言葉であえて皆さまの注意を喚起しました。ランドスケープにおいては，図書館の光景を含めて，図書館のつくり出す，内外（あるいは実空間だけでなく仮想空間）のさまざまな景観がその使い勝手を決めることについて，またレジリエンスにおいては，図書館自体のレジリエンスもさることながら，コミュニティがレジリエンスを獲得するのに図書館がどのように貢献するかを考えようというものです。

そして，ワークショップ「図書館員の未来準備」講演レポートとしては，「ツナガル」という作用を表す言葉に注目した，千葉県山武市立図書館の豊山希巳江さんの執筆です。

ぜひともご一読いただき，お楽しみいただきたいと思います。

2021 年 3 月

未来の図書館 研究所
所長　永田　治樹

教科書の中の知識
テキストの計量情報学的分析　浅石卓真 著
A5判・上製　191頁　4,400円　ISBN978-4-88367-322-3

公立図書館における指定管理者制度
導入館と非導入館が提供するサービスの比較
A5判・上製　188頁　4,180円　ISBN978-4-88367-336-0　水沼友宏 著

論考 図書館とレファレンスサービス
齋藤泰則 著　A5判・上製　284頁　3,960円　ISBN978-4-88367-283-7

書物史研究の日仏交流
日仏図書館情報学会 編　A5判・上製　234頁　3,740円　ISBN978-4-88367-348-3

図書館のアクセシビリティ
「合理的配慮」の提供へ向けて　野口武悟・植村八潮 編著
A5判　219頁　2,200円　ISBN978-4-88367-262-2

日本の文化をデジタル世界に伝える
京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」編
永﨑研宣 著　A5判　238頁　2,530円　ISBN978-4-88367-327-8

発表倫理
公正な社会の礎として　山崎茂明 著
四六判・上製　206頁　2,860円　ISBN978-4-88367-344-5

主題検索の現状理解と今後の方向性について
1957年のドーキング会議に参加した分類学者たちが指示したこと　川村敬一 著
A5判　84頁　1,100円　ISBN978-4-88367-345-2　主題文献精読会 編集

現代図書館情報学シリーズ［全12巻］
高山正也・植松貞夫 監修　各巻A5判　平均210頁　2,200円（三訂：2,310円）

1 改訂 図書館概論　高山正也・岸田和明／編集
2 図書館制度・経営論　糸賀雅児・薬袋秀樹／編集
3 図書館情報技術論　杉本重雄／編集
4 改訂 図書館サービス概論　高山正也・村上篤太郎／編集
5 改訂 情報サービス論　山﨑久道・原田智子／編集
6 児童サービス論　植松貞夫・鈴木佳苗／編集
7 三訂 情報サービス演習　原田智子／編集
8 改訂 図書館情報資源概論　岸田和明／編集
9 三訂 情報資源組織論　田窪直規／編集
10 改訂 情報資源組織演習　小西和信・田窪直規／編集
11 図書・図書館史　佃　一可／編集
12 図書館施設論　植松貞夫／著

日本十進分類法の成立と展開
―日本の「標準」への道程1928-1949―
藤倉恵一 著　A5判・上製　310頁　4,180円　ISBN978-4-88367-310-0

プロの検索テクニック 第2版
―検索技術者検定2級 公式推奨参考書―
一般社団法人 情報科学技術協会 監修　原田智子 編著
小河邦雄・清水美都子・丹 一信・藤井昭子 著
B5判　181頁　2,420円　ISBN978-4-88367-341-4

情報革命の世界史と図書館
―粘土板文書庫から「見えざる図書館」の出現へ―
山口広文 著　四六判・上製　402頁　3,740円　ISBN978-4-88367-324-7

検索スキルをみがく 第2版
―検索技術者検定3級 公式テキスト―
一般社団法人 情報科学技術協会 監修　原田智子 編著
吉井隆明・森 美由紀 著
B5判　147頁　1,980円　ISBN978-4-88367-340-7

図書館のための 和漢古書目録法入門
伊藤洪二 著　四六判　262頁　2,310円　ISBN978-4-88367-329-2

学校図書館の基礎と実際
A5判　156頁　1,980円　ISBN978-4-88367-291-2　後藤敏行 著

健康医学情報の伝達におけるリーダビリティ
酒井由紀子 著
A5判・上製　242頁　3,960円　ISBN978-4-88367-303-2

学校図書館サービス論
―現場からの報告―
A5判　164頁　1,980円　ISBN978-4-88367-299-8　後藤敏行 著

図書館情報学における統計的方法
岸田和明 著　A5判・上製　252頁　3,300円　ISBN978-4-88367-249-3

IFLA図書館参照モデル
書誌情報の概念モデル
Pat Riva, Patrick Le Bœuf, Maja Žumer 著
訳者代表 和中幹雄・古川 肇
A4判　104頁　2,420円　ISBN978-4-88367-330-8

〒112-0002　東京都文京区小石川5-11-7　樹村房　TEL：03-3868-7321　FAX：03-6801-5202
http://www.jusonbo.co.jp/　webinfo@jusonbo.co.jp　＊価格は税込

――― 未来の図書館 研究所　第 4 回シンポジウム 記録 ―――

図書館とランドスケープ

日時　：　2019 年 11 月 11 日（月）13：30～16：30

会場　：　日比谷図書文化館内（地下 1 階）日比谷コンベンション大ホール

プログラム

13：30～13：50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

永田 治樹（未来の図書館 研究所　所長）

13：50～14：30【講演】「図書館から広がる地域おこし　那須塩原市の未来を考える」

伊藤　麻理 氏（UAo 株式会社　代表取締役）

14：30～15：10【講演】「デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープ」

森山　光良 氏（日本図書館協会認定司書第 1029 号）

15：10～15：30　休憩

15：30～16：30 ディスカッション

●パ　ネ　リ　ス　ト　伊藤 麻理 氏

森山 光良 氏

●コーディネーター　永田 治樹

登壇者プロフィール

■ 伊藤 麻理（いとう・まり）氏　／ UAo 株式会社 代表取締役

1974 年栃木県出身。東洋大学大学院工学科建築学専攻修士課程修了。スタジオ建築計画に勤務後，2001 年オランダに渡り，ATELIER KEMPE THILL ARCHITECTS ANDPLANNERS にて設計士として活躍。帰国後の 2006 年，アトリエインクとして設立後，一級建築士事務所 URBAN ARCHITECTURE OFFICE.合同会社を経て，2013 年に UAo 株式会社へ改称。代表作に，サイエンスヒルズこまつ（石川建築賞優秀賞，いしかわ景観賞，第 56 回 BCS 賞ほか受賞），那須塩原市図書館 みるる（2020 年 9 月開館）。

■ 森山 光良（もりやま・みつよし）氏 ／ 日本図書館協会認定司書第 1029 号

1960 年岡山県出身。岡山大学大学院文化科学研究科博士課程単位取得退学。国立国会図書館総務部情報処理課参事，岡山県公立学校教諭，岡山県総合文化センター司書，岡山県生涯学習センター指導主事，岡山県立図書館メディア・協力課長，資料情報課長等を経て，2019 年 3 月退職。2002 年より，国立国会図書館『カレントアウェアネス』編集企画員を 12 年間務める。共著に『図書館概論』（樹村房）など。

■ 永田 治樹（ながた・はるき）／株式会社 未来の図書館 研究所 所長

名古屋大学附属図書館を振り出しに，国文学研究資料館，東京大学・金沢大学・北海道大学の図書館などに勤務後，1994 年から図書館情報大学，筑波大学図書館情報メディア研究科，立教大学文学部等で教育・研究に携わる。専門領域は図書館経営。ISO TC46 / SC8 の国内委員。
近著：永田治樹編著『図書館制度・経営論』日本図書館協会，2016.

==========

シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

（永田）

こんにちは。未来の図書館 研究所の永田治樹と申します。一言ご挨拶を申し上げます。おかげさまでこのシンポジウムも今年で第 4 回目を迎えました。ひとえに皆さまのご協力，ご支援の賜物だと存じております。早いもので，本研究所も一つの節目となる 3 年が過ぎてしまい，今年 4 年目となっております。日々のあれこれに忙殺されているばかりでなかなか思うようにはことは運ばないのですけれども，これからもこのようなシンポジウムを皆さまと共に開催してゆきたいと思っています。今後ともどうかご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。簡単ではございますがご挨拶にかえさせていただき，私はこの会合のコーディネーターでもありますので，ここからその役割を務めます。

少しスライドを使い説明いたしますので，座らせていただきます。本シンポジウムの構成は，まずは私から 20 分足らず，その趣旨についてお話をいたしまして，そのあと，こちらのお二方のパネリストからお話を頂戴します。そして，間に 20 分程度休憩いたしまして，その後ディスカッションを 1 時間という構成にいたしたいと考えております。

本日のテーマは，スライド（図 1）に映しているように「図書館とランドスケープ」というテーマでございます。タイトル画面の画像は，ご存じの方も多いと思いますが，福島県白河市の図書館の外観です。JR 白河駅の近くにありまして，小峰城という城郭を臨む見晴らしのいいところにあります。設計者の説明には，「地域のコンテクストを意識して開口部を定め，季節・時間の変化を感じられる滞在型の図書館となること，開放的なランドスケープとして市民に開かれた活動・交流の場となることを目指した」とありました。この図書館では，外も内もなかなか良質なランドスケープを味わうことができます。

そこで今回のシンポジウムが，なぜこのテーマであるか，そしてこのテーマでなにをみるかという点を少し説明させていただきます。スライドの写真（図 2）は 2018 年 12 月 4 日に開館しましたフィンランド，ヘルシンキの中央図書館 Oodi です。今年（2019 年）の IFLA，世界図書館連盟の大会で Public Library of the Year を受賞しました。全体は 1 万平米ほどの大きな建物です。この写真の部分は 3 階，最上層階の光景であります。図書館の基盤エリアといってもいいですが，それを右端からと，左端から撮ったものです。右側の写真が成人のエリアから撮ったもので，左側の写真が子どものエリアから撮ったものなので，両方合わせると 3 階の空間がつながるのですが，真ん中にカフェがあって，また外にはテラスがあります。とても優れたアコースティックで，子どものエリアがあったりカフェがあったりするのですが，ざわつきもなく，人々が思い思いに自分の素敵な時間を過ごすことができる図書館です。

さて，ランドスケープとはなにかという問いにまずは答えていきましょう。日本では当初植物学とか地理学とかいった領域で導入された概念です。同じ意義のドイツ語 landschaft という言葉がありますが，それを景観と訳したようですね。その後建築学とか，あるいは造園とか都市計画などの分野で広く使われるようになりました。ランドス

図 1　白河市立図書館

図 2　ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

ケープとは,「土地や地形といった自然的な要素と，人工の要素の部分をあわせて全体として目にみえる特徴」をいっていると思います。景観という日本語でもいいのですけれども，日本語の場合，言葉が少しスタティックになってしまうといいますか，静止したイメージになってしまいますので，そのもっている機能的な意味を失わないためにカタカナを使っています。ランドスケープとはなにかというと自然と人工物が合わさった全体としてみたときに，みえてくるものということです。スライドの写真は，一つのランドスケープ写真です。フランスのアルビというまちの，タルム川という河畔につくられた庭の写真です。

さて図書館にとってのランドスケープを文献で少したどってみますと，実に古い歴史があるようで，これは建築家のピーター・ジソルフィー（Peter Gisolfi）という人が書いたペーパーで拾ったものですが，ローマ時代のキケロ（Marcus Tullius Cicero）の手紙のなかにこんな文句があるといいます。「もしあなたの図書館のなかに庭があるなら，なにも欠けたところはない」。図書館では読書だとか思索だとかあるいは執筆だとか，さらにその過程のなかで同僚と会話することもある。そのためには庭といったランドスケープが不可欠であるとキケロはいっているのだとジソルフィーは指摘しています。

中庭をもっているような図書館は，いろんなところにあるとは思うのですが，彼は典型的な庭がある図書館として，ニューヨーク公共図書館を挙げていました。「えっ，図書館のなかじゃないよ」と思われる方も多いでしょうが，スライドの地図のように図書館の裏にブライアント公園というのがあります（実はこの庭の地下は書庫になっています)。かなり大きな公園で，そこには花壇もありますし，レストランやカフェもありますので，人々がくつろげるということで，図書館の閲覧室を抜け出して公園へ行けば，公園のランドスケープを楽しめるというわけです。

庭によって人は安らいだり会話を弾ませたりすることができる。つまり庭というランドスケープが，視覚を通して人々に働きかけてくるというわけですね。ランドスケープから「いい眺望だ」と，人々は感動を受けたりします。あるいはそのランドスケープがもつ意味や価値をくみ取ることができ，それを自分の行動に結びつけるというようなことにもなります。

ちょっと話が違うのですが，アメリカの心理学者でジェームズ・ジェローム・ギブソン（James Jerome Gibson）という人が，アフォーダンスという言葉をとりあげています。アフォーダンスというのは，環境が動物あるいは人に働きかけるということです。人を取り巻くランドスケープもそのように私たちに作用するのです。図書館のランドスケープは，一つに図書館の景観として，自然景観，地域の景観，そして建築家の設計による側面からみてとれます。それともう一つに，図書館が情報を提供するという役割に注目すると，図書館のランドスケープでは情報の景観という観点が取り出せます。したがって私は，図書館のランドスケープという議論は二つの観点でできるかなと考えました。

スライドは，またこれも有名なストックホルムの市立図書館の写真です。圧倒的なこの壁面の蔵書，この様相に対峙して私たちはどんな気持ちになるか，どんな感情をひき起こすでしょうか。通常は，蔵書のもつ知的な活動に誘われるかと思います。

さて，なぜいまランドスケープなんかを問題にするのかを少し説明させてください。これをとりあげることになった理由は，近年わが国の公共図書館でも，1970 年代につくられた座席の少ない貸出図書館から，ちょっと表現は古いけれども滞在型の図書館に変更され，安らいだスペースが望まれるようになりました。改めてこの側面を強く意識し始めています。図書館により快適な空間が求められ，また人々が集える要素が求められている。これが第一の理由です。

もう一つは，先ほども少し申し上げましたが，情報の景観が資料のデジタル化によって，実は物理的には捉えられなくなっていますね。電子的な資料はこれまでのように書架には並べられません。本と同じようにはランドスケープを構成しません。だから新たな図書館のなかの情報景観をどのようにつくっていくかということも，留意しなければならないというのが第二の理由であります。

図書館のランドスケープをどう設定するかが，今回のシンポジウムのポイントです。本日みつめたいところは 3 点あります。図書館のランドスケープをどうつくるかは，図

書館がどのような役割を果たすのか，ということによって決まるのですが，図書館は単なる公共貸本屋のような役割ではなくて，人々の学びや交流や，あるいは気晴らしの場でもあります。そのような図書館のあり方を踏まえて，設計のランドスケープを構想します。その部分について今日は建築家の伊藤麻理さんに，どのようにランドスケープを構成されたかの実際を語っていただけることになっています。

スライド（図 3）は，デンマークのオーフスの市立図書館の写真です。全体が斜面の空間，2 階から 3 階にかけてランプがつくられています。ここに，5 面のイベントスペースがあります。左右にジグザグになっているスロープは，ベビーカーを通すためです。で，5 面それぞれでもイベントができるし，全体を一緒にしてもイベントができるようになっています。私もこの画像をみてなんだろうと思っていました。こういうイベントスペースが，図書館の中央部分にあるのです。一体この図書館はなにをしているのだろうと思いまして，この夏に調査にいってみました。

これは，市民がさまざまな活動，イベントを開くためのものでした。それが図書館の中心部分で行われる。そのように人々のイベントを位置づけているということでもあります。実はこのような市民活動を支える設計と，コミュニケーションセンターとしての機能が評価されまして，ヘルシンキ中央図書館に先立つ 2016 年の IFLA の Public Library of the Year をこの図書館が受賞しています。

図 3　オーフス公共図書館 Dokk1 のランプ

先ほどは，図書館のランドスケープを二つに分けて説明したのですが，二つの区分ですと両方にまたがる部分がある。単に居心地のいい空間というのではなく，読書や活動をするのに適合している空間，つまり図書館の機能を果たすのに居心地のいい空間であり，同時に図書館の情報を提供するのによい空間，つまりコレクションそのものを利用しやすく並べるかといった問題があります。そういう中間領域があります。サービスやコレクションのためのしつらえですね。

これは最初の伊藤さんのところにも関わるし，次の森山さんのところにも関わるのです。図書館としては，サービスとコレクションのしつらえという局面も考えなければならない。資料をどう展示するか，資料をどのように発見させるかというところを考えなければならないというところです。スライドは，高知県の梼原町立図書館（雲の上の図書館）の写真です。この梼原図書館はとてもすばらしい図書館です。隈研吾さんの設計でこの内部のコレクションのしつらえをプロデュースしたのは，一昨年私どものシンポジウムにご登壇いただいた太田剛さんです。今日は太田さんにいらっしゃっていただいておりますので，あとでちょっとご発言をお願いするつもりです。

三つ目は，先ほど説明しましたように，ランドスケープは物理的な景観だけでは不十分になってきました。インフォメーションランドスケープという言葉が 20 世紀の終わりくらいに使われ始めました。どういうコンテクストかというと，物理的な資料とデジタル資料が混じった図書館，ハイブリッドライブラリーという概念はご存じかと思いますが，そういう図書館になってゆきますと，ある領域は本当に電子化してしまうのですね。日本の公共図書館ではまだそうなってはいませんが，大学などの学術図書館に行きますと，雑誌の棚がガラガラになっています。電子図書もかなり増えて，電子図書，電子ジャーナル，電子マガジンが多くなってくると図書館の様相が変わってくるのです。わが国の公共図書館はそういう意味ではかなり出遅れている状況ですけれども，そういうことが予想されます。そうなった場合，情報をどのように可視化するかという問題が出てきているわけです。

それに関して，日本では珍しく公共図書館でもこのあたりのことを先進的に取り組まれた岡山県立図書館があります。その岡山県立図書館でこの 3 月まで働いていらっしゃった，森山さんにこのあたりのお話をしていただこうと思います。

以上が本日のシンポジウムの趣旨であります。早速お二方にお話をお願いしたいと思いますが，伊藤さんと森山さんについて少しご紹介をいたします。

伊藤さんは大学で建築学を修めた後，オランダに渡って経験を積まれ，その後 UAo という会社を設立され，その代表をなさっていまして，建築とランドスケープの融合を目指して活躍されていらっしゃいます。図書館についても大変深い理解をもって取り組まれておりますし，昨今では，Web で拝見したのですが，民間資金を活用した官民連携による社会解決の仕組みとして，SIB（Social Impact Bond）というものにも取り組まれていると聞きました。大変楽しみな若い世代の方です。

一方森山さんは，国立国会図書館に勤務された後，岡山県立図書館で長らくお仕事をなさっておられた方で，岡山のデジタル図書館「デジタル岡山大百科」というものがあるのですが，その事業を立ち上げられて，その発展にご尽力なさいました。岡山県立図書館は，実は県立図書館ではとても活動が活発な図書館で，県立図書館としては全国一貸出が多いとかいろいろあるのですが，こうした先進的な取り組みをなさっている図書館です。

それでは，伊藤さんのご発表をお願いしたいと思います。

==========

【講演】「図書館から広がる地域おこし　那須塩原市の未来を考える」

（伊藤）

UAo 株式会社代表の伊藤麻理です。私は建築家です。今日はですね，栃木県の那須塩原市で図書館の設計をしておりまして，その話をメインとして図書館とランドスケープをどうよくしていくのかというところを中心にお話ししたいと思います。

簡単に自己紹介させていただきます。私は，栃木県の那須塩原市出身なんですね。その後に東洋大学を出て，オランダの設計事務所で働いて，日本に帰ってきて独立して自分の会社をつくっています。5 年前に石川県小松市の「サイエンスヒルズこまつ」という建物を建てたのですが，これがまさに建築とランドスケープを融合させた建築なのですね。とても見た目にわかりやすく，コンクリートと緑というものを融合させて，あたかも公園のなかに建築があるかのような，そんな建築をつくりました。おかげさまで BCS 賞とか内外からたくさんの賞をいただいて，融合がとても美しいということで評価をされました。ただ，この設計をやっているときにすごく思ったのが，建築はいい，ただそのあとに訪れる人たちにとって，まちの人たちにとって，本当に使える施設や活動的な場所になっているのか，というところがちょっと疑問になったのですね。建築ってモノは建てられるけれど，そのあとは運営者次第なので，どこまでそこを一緒に議論をしながらいいものをつくっていくのかというところが重要だなって，このときにものすごく思いました。実際は運営も頑張ってやっているのですが，やっぱりどこか建築家が意図した，想定したとおりにはなっていないところも多々あるんですね。まあそれは勿論いいんですが，改善して使いやすいようにしていってもらっていいんですけれども，やっぱり腑に落ちないところがすごくありました。そこで，今回の那須塩原市の図書館では，その辺を改善して市民と一体となってよりよい建築をつくっていきたいなという思いがだんだん強くなりました。

那須塩原市の図書館は，公共施設なので建築はコンペだったのですね。3 年前に栃木県の黒磯の駅前の場所が，いわゆる商店街のシャッター街だったのですね。それを地方復興の補助金を使って再生させようというプロジェクトが立ち上がりました。市民の皆さんから多く挙がったのが，交流する場所がないから交流する場所が欲しい，じゃあ交流する場所があって，本当にそれで交流するかという話もあったので，市民の皆さんが出した答えというのが，図書館が欲しいということになったんですね。交流センターと図書館を二つ別の敷地でつくりましょうというのが，那須塩原市で決定されました。

黒磯の駅前を復興させよう。（スライド：黒磯駅前の地図）

これが黒磯の駅前で，この緑が商店街で割と 30 年前と変わらないような，そんなトラディショナルな雰囲気があるのですね。そんな駅前のここがちょうど図書館になって，ここが交流センターになると。この二つをメインとして復興してゆこうという計画になっていました。われわれはコンペに参加して，提案した会社が 156 社，そのなかから一番を取らせてもらいました。もちろん，地元だったのですごい力が入って，もちろん名前も伏せられている状態だったので，そこで審査に対しては公平はありました。われわれが提案したのは，ただそこに建築をつくるだけじゃなくて，市民が本当に使える施設とするためにはどうしたらいいのか，また図書館なので，ある世代だけが使う，ヘビーユーザーだけが集まる場所ではなくて，小さなお子さんから高齢者まで，あらゆる世代がそこで交流しないと交流エリアにならないと思ったので，いろんな世代がちゃんと使える図書館をつくりたいっていうのをすごくコンペでいいました。というのも，いまある黒磯図書館を訪れたときに思ったのが，昼間誰もいなくてがらがらなんですね。朝は年配の方が新聞を読んでいると。昼になるとお母さま達がいらっしゃると。夕方になると勉強する学生だけなんですね。簡単にいってしまうと，年間何人の人がここを使ってくれるのだろうというような第一印象だったのです。これをどう活性化させて，誰もが，普段図書館に来ていない人たちを呼び込むか，というのがすごく一番の課題かなというふうになりました。私は黒磯で生まれ育ったのですが，正直黒磯図書館に行ったことが，1 回か 2 回くらいしかないんですね。それなんでかっていうと，すごく単純な理由で，読みたい本がないし，私勉強がすごく嫌いだったので勉強するためにも使わないし，誰がなんのために図書館って使ってるんだろうって，正直小さい頃から思っていました。このコンペがきっかけで，世界中の図書館から日本の図書館もだいたい 50 近くまわらせていただきました。そのなかで一つの答えに辿り着いたのが，わかりやすくいうと，実際使っている人がヘビーユーザーだけで，使ってない人が結構多いんだなということをすごく感じました。じゃあその使ってない人たちがここへ来て，活動的になって，なにかを学んで，自分の将来のために活かしてもらえるようになりたい，そんな施設にするためにはどうしたらいいのかということをすごく考えるようになりました。

那須塩原市がですね，基本計画としてこういったことを打ち出しました。「『人が集まり新しいことが生まれる図書館』をここにつくります」と。これ上位計画なんですけども，コンペのときにもこの情報が出ていて，これを満たすような建築をつくってくださいという要綱でした。これをみて，すごくすばらしいなと思いました。ちゃんと地域の特徴，大谷石だったり。実は黒磯駅前はカフェが結構有名で，割と地元の人が地域の環境とか素材とかを使って建築しているカフェが多くて，ショウゾウカフェ（NASU SHOZO CAFE）とか。あとは市民の皆さんが結構活動的で，夜市も駅前でやっていたりとか，朝市やっていたりとか，夏はキャンドルナイトとか，年間の駅前の活動計画をみると毎月なにかをやっているのですね。だから活動する市民はすごくたくさんいるということを，すごく感じました。なので，こういうことをもし本当に実現したら，実際使う市民も多いし，なにかきっかけが与えられれば，駅前がすごく活性化するのじゃないかっていうことを思いました。

そのなかでじゃあ建築でなにを提案しようかと思ったときに，「サイエンスヒルズこまつ」で気づいたのですが，建築つくっただけじゃいけないんだ。そのあとどう使われてゆくのか，どうあるべきなのかちゃんと考えなきゃいけないと思いました。そのなかで私が提案したのは，公園って人が集まるじゃないですか，なんかふらっと来て。公園のいいところは，無料だし，そこでごろごろできて，日なたぼっこしたり，木の下で本を読んでいる人もいるし，かと思えば，グループで漫才ごっこしていたりとか，ボール遊びしていたり，そこでさまざまな活動が OK なのですよ。だから，みんな好んでそこへ行くし，リラックスすることができる。そういった行為を図書館のなかでつくってあげられれば，誰でも来るんじゃないかと思ったんですよ。小さい子から，高齢者，あとは学生さん，あらゆる世代が集まるのは公園かなと思ったので，公園と同じ環境をつくってあげようというのが最初のスタートでした。

じゃあこういった環境をどうやって建築でつくるのか，というところで私たちが一番始めに考えたのは，森があって緑があって，葉っぱの隙間から光が降り注いでいる，木

漏れ日が入る。葉っぱの隙間から光が降り注いで木漏れ日がある，まずそういった環境を建築でつくってあげようと思いました。そこではフレッシュな空気が流れてなおかつ，もちろん明るいところもあるし暗いところもあるし，葉っぱがあるところはちょっと低い落ち着いた空間にもなるし，「ぽん」と空が抜けると，そこは天井が高くて陽がさんさんと降り注ぐ。そんなふうに見上げたときの高低差とか光の入り方とか，そんなところを建築でつくってあげれば，公園の森の下で本当に本を読んでいるような，そんな環境がつくれるのではないかと思いました。そういった環境をつくれれば，自然にみんなリラックスして活動が生まれるんじゃないかなって。建築がやってあげるのはそういう，まず環境をつくってあげようというところからスタートしました。

そして考えたのがこれです（スライド：木漏れ日の差す木々の下で人々がさまざまな行為をしているイラスト。葉の部分と幹の部分の境目にラインが引かれている）。まさに森があって，木漏れ日があって，その下でさまざまな行為がある。見上げたときというのは，葉っぱのこういうガタガタしたラインがあって，これ，われわれ「リーフライン」ってよんでいるんですけど，このリーフラインを建築でつくってあげて，そこから光が入って，本当に森を見上げたようなシルエットをつくってあげれば，森のなかで本を読んでいる環境がつくれるんじゃないかと思って，こういう建築になりました（スライド：リーフラインを模した屋根のある建築模型の画像）。これをリーフラインとよんでいて，ここから光が入ってきて，天井の高い所，低い所，あるいはちょっと籠れるような場所があったりとか，そんな建築をつくろうと考えました。

黒磯駅前なのですが，（スライド：黒磯駅前の航空写真）商店街があって，こちらに住宅街があって，ここにスーパーがあって，奥が黒磯高校へ行く道なのですね。1 日にこの駅使う人数ってたぶん数百人程度です。下手したら人がほとんど歩いていないような駅です，簡単にいってしまうと。人口は 11 万人いるのですが，やっぱり車社会なので，歩いている人というのは，黒磯高校に通う隣町から来る人が朝ここを通って，あと住宅街からスーパーへ行く人がここを通っているくらいなんですね。そうすると，この図書館というのはちょうどそういう人たちの通り道になるのですよ。なので，通り道を邪魔しないでそのまま建築をつくろうと思いました。スーパーへ行く通り抜けの道，黒磯高校へ通う通り抜けの道。駅があって，住宅街から通り抜けられる。この大きな「アベニュー」ってよんでいるんですが，この通りをつくってあげて，その周りに小さなストリートができている。そんな平面を考えました。その間をバイパスっていったらあれですが，散策路ですね。森のなかって直線の道ってないじゃないですか。ぐねぐね曲がった道をぐるぐると歩いているといろんな場所に行き着く。なので，同じように道をランダムにつくってあげて，迷い込むような，そんな空間をつくってあげようと思いました。そのなかにですね，「緑の森のポケット」というふうにわれわれはよんでいるのですが，森を歩いていくと，ところどころ葉っぱが途切れてそこに光が入り，そこを見上げると空がある。そんな状況をところどころ散りばめてあげる。そうすると，本当に森のなかにいるような，光のグラデーションとか，光のリズムがつくれるので，そんな環境をつくってあげる。この森のポケットがいわゆる，なにをしてもいい場所になっていくんですね。

スライドは図書館の 1 階の平面図です。こんな形で通り抜ける道があり，「森のポケット」とよばれるものが貫入していて，残りが基本的なスペースになっています。その森のポケットというのは機能をもっていないです。機能をもっていなくて天井見上げると吹き抜けになっていて，とても明るい場所になっています。1 階が道になっていてその周りにたまたま本棚がある。この本棚もハの字にランダムになっているのですが，なるべくグリッド状にならないような工夫をして，なるべく森のなかに迷い込んだような状況をつくってあげるようにしています。なおかつ壁で仕切らないということを徹底しています。空間どうしをなるべく壁で仕切らない。なんでかというと簡単な理由で，森に壁ないじゃないですか。やんわりお隣どうしがみえたりするので，この図書館も同じように，最低限のところは壁がありますが，基本は壁がないようにしてあげて，巨大なワンルーム，本当に森のなかにいるような状況をいかにつくるかということを徹底しました。

スライドは多目的ホールです。これは道からみたパース

ですが，道に対して本棚をハの字に開いています。これはなんでかというと，外から図書館のなかの活動がみえるようにしてあげる。要は，壁をつくってクローズにしてしまうと図書館の活動がみえなくなって入りづらくなってしまうので，単純に外と連動してあげることで入りやすくする。なおかつどんな活動をしているのか，興味をもって入ってきてくれる人がたくさんいたらとよいなと思うので，なるべく面出しの状態で本はみえるようになっています。あとはイベントでこの空間の貸出ができるので，グループでなにかイベントをやりたいってときにはここを全部借り切ってもらって，この棚にグループイベントの模様をこの壁に貼りだしたりすることができる。そうすると活動がファサード，外側に溢れ出ていくんですね。そこから人が入りやすくなってくるという状況をつくってあげようとしました。なおかつ壁はないんですが，斜めにすることで壁っぽくみえるので，やんわり仕切ってあげることもできるんですね。あまり仕切られすぎずに，だけど必要なときは仕切ってもみえるという。そういう建物を心がけました。なので，壁をつくらないというのを徹底している１階になっています。で，ここは森のポケットなので，天井からトップライトから明るい光が入るようになっています。

２階が図書館，蔵書とかがたくさんあるスペースになっているんですけれども，２階も普通の図書館ですと十進分類法，TSUTAYA さんですとまた独自の分類があるんですけれども，一般的に十進分類法でやるとこう横一列に並んでしまうと思うんですね，図書館って。でもこう並ぶと，森のなかにグリッドの空間はないので，散策できないなあっていうのをずっと思っていたんですよ。なので，私たちが提案したのは，十進分類法を円グラフのようにしてあげて，これがいいのは自分が中心に来るとどこにでも同じ距離で行ける，ということができるんですね。なおかつこの周りに通り抜けられる道をつくってあげる。そうすると，いま哲学のところにいたんだけどその隣に行くと科学があると。いろいろな分類に偶然出会うことができる。偶然出会うことができると，新しい本に出会うチャンスがすごく増える。グリッド状に並べてしまうと，歴史の本に行こうというと新しい本に出会うチャンスがなくなってしまうので，「帰りがけに歩いていたらたまたまおもしろい本みつけた」みたいな，そんな偶然性をつくってあげることがより自然に近い環境になるのかなというところで，回遊性のある道をつくって，分類は放射状にすることで，真ん中に来るとぐるっとみるとわかりやすい状態にもなっていて。道に迷い込んで本当にわからなくなってしまうとそれはそれで困るので，わかんなかったら真ん中に来ると，十進分類法全部みえるので，見渡すとまたわかる。そういうふうにわかりやすさと，散策性というのを兼ね備えている本の並び方を提案しました。なおかつ，真ん中ににぎわいがあって，周りが静かな状況になる。図書館ってにぎわいだけつくってもらっても，きっと困ると思うんですね。やっぱり静かに本を読みたいとか静かにお勉強をしたい，そういうニーズもたくさんあるので，両輪が必要だと思っています。なので，それも壁の部屋であまり仕切るんじゃなくて，なるべくグラデーションにしてあげたら，真ん中はにぎわっているんだけど，そのにぎわいから離れると静かなスペースが自然とできていて，そこへ，静かになりたいときは自分で探してそこへ行くと。なるべく自分で散策して好きな場所を自分で探すという状況をつくるようにしました。

スライドは２階の様子です。本棚が放射状に並んでいて，散策路をたくさんつくっています。真ん中が賑やかな場所にしています。もちろん静かな場所も用意してあげるというふうにしています。これが上からみたパースです。真ん中がおしゃべりしてもいいよという場所で，奥に行くと，みてわかるように本がいい感じに邪魔をして，静かな環境にすごくできるんですね。なおかつ，静かなほうに向かって天井が低くなっているので，おのずと居心地がいいと。真ん中のにぎわうところはおのずと天井が高くてとても開放的だと。そういう人の行為というものも，自然に反映するように建築でしつらえています。そこに，先ほどいった森のポケットのところに光がところどころ落ちることで，天井を見上げたときに，本当に葉っぱの下にいるような環境を建築がつくっています。なので，自然の行為がそのままここに現れるような，建築をつくりこんでいます。

そして１階のエントランスホールですが，黒磯というのは大谷石の蔵がたくさんあるので，建築もそれを一部取り入れようということで，階段に大谷石を使って，積層され

た大谷石のようになっています。地元の素材をなるべくうまく活用しようということを試みています。見上げるとトップライトがあって，本当に明るくて，まるで朝日が降り注いできているかのような，そんな状況になっています。こういった光のグラデーションとか，環境をつくることで，森のなかにいるような環境をつくることを建築で提供しています。

なおかつ夜の光というのも重要で，最近夜遅くまで図書館が開いているようになっています。ここは，地方なので周りに照明がなくて本当に真っ暗なのですね。なので夜の照明で人を惹きつけるということも重要だと思ったので，明るすぎない照明というものを提案しました。基本的には蛍光灯でがんがん読みやすく明るくするのですが，そうではなくて，まちの雰囲気を壊さないように，がんがん明るい照明は使わないと。そうではなくて，本当にぼんぼりの照明のような，ぽわんとしたやわらかな光が外にもれるような照明を考えていますので，なるべく足元はガーデン灯で演出してあげて，照明は全部天井を照らしています。天井をリフレクションして外に光が漏れるような，そんな工夫をしています。

ここからはちょっと具体的な話なんですが，人の行為を，森の下で人がなにかをする行為というのをどうやって建築に取り入れようかなという具体的な話なのですが，黒磯というまちは，高校生がすごく元気なんですよ。ワークショップにもたくさん高校生が来てくれて，自分たちの居場所がないということを，すごく私に要求してきたんですね。子ども世代やお母さんたちに対しては，ものすごく児童図書が充実しているんですよ，図書館というのは。いろんなとこ行ってもだいたいそうなんですね。あとは，高齢者に対してとか，障害者に対してもちろんやさしいつくりになっていて，手厚いですね。

じゃあ中高生，大学生，そのあたりの居場所というのが図書館にあるのかというと，最近ヤングアダルトコーナーとかもあったりはするのですが，じゃあそこでなにやっているのかをみると，なんかゲームしていたり，ただしゃべったりするだけで。図書館って本来学びの場所で，学ぶことでなにかを得て，自分のきっかけになってほしい，そんな場所になってほしいなと思うのに，なんかただ行く場所がないからいますっていうだけで，それはどうなのかなってことをずっと思っていたんですね。高校生と話していても，聞いたら，プレゼンテーションごっこをやりたいっていうんですね。それはなにかっていうと，TED っていうプレゼンテーションの番組があるんですが，そのように自分が発表者になって，みんなの前で発表したいっていうんですよ。結構すごいなと思ったのが，自分がなにか考えていることを第三者に発表して評価をしてほしい。それでブラッシュアップして更に考えていることを発展させてゆきたいんだっていうことをいうんですよ。高校生なのにすごいなって思ったんですよ。そういうプレゼンテーションごっこを友達とやれるような場所が欲しいっていうんですよ。それしつらえてくれって。なるほどそれはすごいなって思って。そういう人がたくさんいたので，じゃあそれを建築でつくりましょうということになったんですね。もともとのコンペのときはそういう提案はしていなかったんですが，ワークショップからすごくそういう提案が出てきたので。やっぱりまちおこしとかを考えると，若い世代が活躍しないと，なかなか活性化っていうふうにはならないので，若い世代をどうやって育成していくかというのが図書館の重要な役割だと思ったので。われわれが提案したのは，これからアクティブラーニングが今後文科省のほうでも授業で取り入れてゆくというのがあったので，アクティブラーニングを積極的にする場所をしつらえましょう，という提案をしました。

ここでアクティブラーニングがなにかというと，グループで討論してそれを自分たちで体験して，お互いに教え合う，お互いが先生になる。先生になって，それを成果として第三者に発表して，評価を得て，ブラッシュアップをする。その過程がアクティブラーニングの相乗効果だと思うので，それをできるスペースをつくろうと思いました。われわれが提案したのは，いろんな行為，グループ学習したり，会話したり，プレゼンテーションしたり発表するような場所をどうやってつくるかということで，1 階から 2 階に上がるところにつくったんですけれども，前にもいったように空間として部屋をつくりたくなかったので，階段状にしてつくりました。1 階から 2 階に上がる階段がたまたま大きくなっちゃって，そこで勝手に議論してたり発表し

てたりしているような場所をつくりました。とある図書館に行ったら，ヤングアダルトコーナーなんですけど，部屋になっちゃってるんですね。そうすると大人が行けないんですよ。なんか寄りづらい，学生がわいわいがやがやとやっていて入りづらい，という状況を目にして，こうなると多世代交流はできないなと思ったんですね。なので，階段の横でそれをやってくれれば，大人も入りやすいし，子どもも参加しやすいし，逆にいうと，そういうふうにしてしまうと学生が悪さをしてしまう，それを見守る管理人も必要だ，みたいな話になっちゃうので，階段のところであれば皆みてくれるからそういうことないんじゃないですかということで，われわれは，階段がたまたま大きくなっちゃって，そこに学生が勝手に活動しているという状況をつくるということを提案しました。

このスライドがそうですね。2 階に上がっていくこれが階段ですね，巨大な階段。どこを上がってもいいんですが，この巨大な階段のあちこちで学生が議論をしたり，プレゼンテーションごっこをプロジェクタでしている，巨大な階段スペースをつくってにぎわいを出すようにしました。大人も 2 階に上がるときにここを通るので，たまたまみんな，なにをやっているのか，監視じゃないですが，みることができるという。なおかつ，もちろん静かに勉強するスペースも必要だということもあったので，ガラスに区切られた奥は吸音をしてあるすごく静かなスペースをつくっています。それと，収蔵っていうのも，部屋にしてしまうと奥にどんな貴重な本があるのかがわからないので，このアクティブラーニングスペースの向こうが収蔵スペースになっていて，これもみえるようになっています。収蔵庫も部屋で隠すのではなくて，表にしてあげて，学生さんや若い人たちがみえるようにしてあげて，貴重な本，歴史的な本をみたいという興味を出すような，そんなしつらえにしてあります。ちょっと眺めをみてみると，このスライドのようになっています。階段状にあちこち，勝手に議論やら活動ができるような，学生さん向け，若い人たち向けの活動スペースというのを用意しました。

黒磯高校に通っている人たちって，学校終わったら行く場所がないんですね。地方はやっぱり行く場所がないので，どこにたまってるかって聞くと，フードコートだったりとかコンビニの前ですっていうんですね。そこでなにをやるかといったら，くっちゃべっている。こういうものをつくると，ぜひここで活動をしてくれということになる。しかし活動しろっていって，スペース与えるだけじゃ活動にならないので，運営側にいったのは，プロジェクタは最低限欲しいし，もちろん iPad や PC とか，最低限のタッチパネルとか，そういったきっかけを与えないとさすがにやらないので，それは最低限用意してくださいというふうに要求しました。裏話をいうようであれなのですが，なかなか役所というのはそういうわけにはいかないので，なかなかそういうのを理解してもらえなかったので，設計としては，「わかりました。じゃあ建築工事費のなかに入れます」ということで，入れました。やはりそこまでしないと活かされないんですよ，空間って。建築家がつくって終わりになってしまうと，そういう点が意図したものとは違うので，すごくイレギュラーだったのですが，工事費のなかに全部入れました。やっぱりワークショップで，学生さんたちが「やりたいんだ，やりたいんだ」っていっているんですよ。大人は「わかりましたよ」ってワークショップ終わるんですよ。そのあと実現しないっていうのがワークショップの現実なんですよね。それを目の当たりにしていて，そうはさせたくないなという思いがあったので，だったら，項目を，あまりよくないんですが項目をちょこちょこってやって，建築費のなかに。

ただ，やっぱり誰かが，大人がそういう協力者になってあげないと，若い世代が育たないですよ。だって学生にどの図書館行っても，ここではしゃべらないでください，ここでは飲食ダメです，ここでは騒がないでください。禁止事項だらけで，こんなので活動っていえるのかなってすごく思ったんですよね。活動を促すようなことを本当にやりたいなら，禁止事項をなくせっていったんですよ。なくしてルールをつくればいい。学生はバカじゃないからちゃんとルール守りますよ。大人がちゃんとしたルールつくらないから，そうするんですね。頭ごなしに規制するのではなくて，みんなで話し合って運営していく体制が必要ですよって話しました。なので，ここは学生に運営させなさいということをいまも設計側では提案しています。学生が自発的に運営していくことで，ちゃんとやれるんですよ，若い

子たちは。それをやらせないんですよ，大人が。だから，私たちがいま提案しているのは，黒磯高校とかいろいろな高校があるのですが，そこの高校生たちが自主的にここを管理運営する，常にきれいにするというのをやらせよう，というのをやっています。こういうことはワークショップで提案があったことで変わってくることなんですよ。始めの設計からこういうことがあったわけじゃなくて，ちゃんとみんなで話し合って，市民からの声があって変わるんですよ。だから私はまちが変わるんだなと思うので，そういうことをやらせる大人になりたいなとすごく思って，いまやっています。まだ OK はしてくれないんですよ。実際は OK してくれないんですが，まだオープンまで時間があるので，粘り強く交渉してゆこうかなと思っています。

児童スペースも同じで，結構話を聞いていると遊具がいっぱいある図書館がすごく多いんですよ。それはそれで小さな子たちが来るきっかけになるのでいいんですよ。まず来ないとダメなので，それはいいんですけど，そこを真剣に遊んで帰っちゃうって子も多いので。そうじゃなくて，われわれは，児童スペースを大きく二分割にして，0～5 歳で行動が違うし，6～13 歳で行動が違うってことでそこを大分割して。0～5 歳は確かに遊びでいいと思うんですね。ぐるぐる走り回って遊んでいるうちに，おもしろい本みつけた，これお母さんに読んでもらおうっていうのでいいなと思ったので，ぐるぐる走ってください。どうぞぐるぐる走ってもらって，真ん中では裸足でごろごろしちゃってください。それと，子どもって小さいスペースとか狭いスペースがすごく大好きなので，穴倉の奥に秘密基地をたくさんつくっています。この小さなトンネルを抜けると小さな穴倉スペースがあって，なんか秘密基地のような，そんな場所をつくっています。そこでごろごろ本を読む。公園と同じですよね。草むらのなかで寝転んで本を読む。そんな状況をつくってあげます。6～13 歳には，もうちょっと大人になるとあんまりごろごろというよりは，自分で本を探しに行くことができるんですね，行動としては。それをお母さんに読んでもらうというような。そういった行動が多いので，発見することができるようなしつらえにしてあげて，といってもまだ子どもなので，ちょっと穴倉的なものも欲しいだろう，一部あります。ただ基本的には自分で探して来てお母さんに読んでもらう。この二つの児童図書の間にお母さんが本を読んであげるスペースをつくっています。2 階は大人の本がたくさんあるので，ここの階段は 2 階へつながるんですよ。大人へ向かう階段といって，ここの階段の本は子どもから大人になっていく過程の本をしつらえてあげると。そういう本の置き方を提案しています。なので，行動が違う二つの児童の間に大人が本を読んであげるスペースがあって，子どもたちは上に行くと大人への本が並んでいると。そんな成長過程がわかるようなしつらえにもしています。

あとはワークショップで「ツリーハウスが欲しい」ってさんざんいわれたんですが，建築的にやっぱりなかなか難しくて，法的なこともあるし，あとは管理運営が難しいというのがネックになって。じゃあ「なんでツリーハウスが欲しいの」って聞いたら単純な理由なんですよ。「高い所で本が読みたい」，「木の上で本を読みたい」ということだったので，階段を木に見立てたんですよ。これは建築上らせん階段なんですけど，ツリーハウスのように高い所で本を読めるような場所がいくつかあるんですね。それは実現できるので，ツリーハウスと同じ環境じゃないかということで子どもたちを説得して，「大人の事情でツリーハウスはできませんよ」ということをいいました。でも，そういう純粋な気持ちを建築に取り入れてあげたいとは思っていて，私も確かにツリーハウスで本を読みたいなと思うので，それをやっぱり本当は実現したかったのですが，簡単にいっちゃうと法規的に燃える素材は使えないとかいろいろあるんですが，そのなかで実現はなるべくしてあげたいという思いから，そういう行為ができるようになっているよというふうにしました。

1 階は「マガジンストリート」になって雑誌がたくさん並びます。本棚の一区画の箱というのも実は貸出ができるようになっていて，市民が一箱いくらで借りて，自分が展示をしたりすることもできるようになっています。昔でいう物々交換みたいな，そんな感じを取り入れようと思っています。要は，個人で 6 個くらい箱を借りてなにかグループで発表したり，あるいは全部箱を借りて小学校単位でなにか発表をしたり，そんなことができるような，フレキシブルな使い方ができる 1 階のボックスになっています。普

段は雑誌がたくさん並んでいて，2 階の専門書へ上がるための導入になっています。例えば，こんな感じです。通る方が，だれだれさんを特集して企画展をやりますということもできるし，こういうところに iPad を埋め込められるような電源もあるので，なにかデジタルとつないで，イベントをやるようなこともできるし，例えば受験シーズンになると，iPad 全部並べて上から英単語が降りてきて，みんなで英単語のあてっこするとか。そういう使い方もできるので，「このタワー型の本棚の上ってどうやって使うんだい」といった話もあったのですが，そういったことを，市民が使い方を考えてくれるような，そんな余白を残しながらつくっています。

駅前広場というのも重要なので，わりとここは市民が夜市をやっていたりして活動の拠点になっていたんですね。なので，それができるようなしつらえをしてあげようということで，イベントができるような，車が乗り入れられるような状態にしてあげて，図書館のホールと一体利用できるようなしつらえになっていて，休日のイベント対応というものにも，もちろん対応しています。

最後に写真を，いまどういう状況かおみせします（スライド：図書館の建築の経過）。来年の 3 月に建築は完成します。オープンは夏になります。なにもないところからだんだんこんなふうにできあがってきて，鉄骨の屋根がこんなふうに組み上がって，こうやってみると本当に葉っぱの葉脈みたいな感じなんですが，まさにそんな状態で，屋根ができて，2 階ができて，いま天井が張られて，外からの感じですね。いまこんな感じでできあがっています。あとは，本棚をどんどん入れて完成に向けてやっている感じです。照明のテストなどもしています。まあこんな現場を支えているのは職人さんなので，職人さんとも毎週のようにディスカッションをしながら，われわれは地元の業者さんを全部使ってやっています。20 億規模の建物なので，だいたいこういう規模だとゼネコンが入るんですが，できるだけ地元のマンパワーでやろう，ということを決めてやっています。なので全部地元の業者を使って。そうすると愛着がわいてくるので，長くメンテナンスもしてくれるし，利点はたくさんあるので，なるべく地元の素材，地元の業者，地元に還元するというところでやっています。

最後になるんですが，森の下でいろいろ行われる行為を建築に反映していくというのが，われわれにできるランドスケープ的な使い方というふうに考えて，いまやっています。ここからは市民の皆さんが本当にそういうふうに使ってゆくかというところが試されるなというふうに思います。以上です。ありがとうございました。

==========

（永田）

ありがとうございました。

引き続き，次の森山さんからお話をお願いします。

【講演】「デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープ」

（森山）

皆さん，こんにちは。岡山から参りました森山と申します。「デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープ」というテーマでお話をさせていただきます。

ここに映したのは「江戸一目図屏風」という 200 年前の屏風絵です（https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/ImageView/3320315200/3320315200100020/hitomezu-v3/）。鍬形蕙斎という岡山県津山藩の絵師が，江戸の景観，ランドスケープを描いたものです。東京スカイツリーの展望台に，複製パネルが設置されていますので，ご覧になったことのある方も多いのではないでしょうか。隅田川のやや東寄り上空からの眺めで，われわれがいまいる日比谷はちょうど真ん中あたりになります。今回参照するデジタルアーカイブの「デジタル岡山大百科」や「ジャパンサーチ」でも閲覧できます。

お話しする内容ですが，そもそも情報とランドスケープという二つの言葉は，皆さんの頭のなかでは結びつきにくいものでしょうから，まずはランドスケープとは一般になんなのかということから話をはじめ，次に情報のランドスケープとはなんなのかということに話を展開します。情報のランドスケープについては，手近な図書館の閲覧室，さらにデジタルアーカイブで確認します。まずは空間のランドスケープ，すなわち一般的なランドスケープ，次に情報

のランドスケープです。その際，情報のランドスケープを機能させるツールをお話しします。また，なぜランドスケープ機能が必要かということを考え，最後に，課題と解決指針を示します。

ここで，今回参照する五つのデジタルアーカイブを紹介します。まず，世界規模，国家規模の大量かつ多様な内容的視点のコンテンツが提供される三つのデジタルアーカイブです。第一に，国の枠を越え，ヨーロッパの文化遺産のコンテンツが提供される Europeana（https://www.europeana.eu/en）です。視聴可能なコンテンツ数は，トップページの情報によれば，2019 年 7 月 14 日時点で 57,642,199 件です。第二に，米国各地の図書館，博物館，文書館等のコンテンツが提供される DPLA（Digital Public Library of America；米国デジタル公共図書館）（https://dp.la/）です。視聴可能なコンテンツ数は，トップページの情報によれば，2019 年 7 月 14 日時点で 34,619,208 件です。第三に，日本の分野横断統合ポータルである国立国会図書館運営の「ジャパンサーチ」（https://jpsearch.go.jp/）です。視聴可能なコンテンツ数は，トップページの情報によれば，2019 年 7 月 19 日時点で 1,184,320 件です。一方，内容的視点において特化したコンテンツを提供するデジタルアーカイブとしては，岡山の地域関係に特化した岡山県立図書館運営の「デジタル岡山大百科」（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/）と，震災関係に特化した国立国会図書館運営の「ひなぎく」（国立国会図書館東日本大震災アーカイブ）（https://kn.ndl.go.jp/#/）の二つです。

まず，ランドスケープ（landscape）という言葉ですが，景観と一般に訳されます。地理学用語としては，「一定の特徴を有する空間単元を形成している地表の一区画」と定義されます（石井英也「文化景観」『地理学講座４　地域と景観』古今書院，1991，p.42.）。だから，視界に入るすべての景色，風景を指すという訳ではなく，特色あるひとまとまりの空間と捉える必要があります。この捉え方が起点となります。前提条件として，空間が基盤にあります。さらに，地理学では，ランドスケープの五つの特色を挙げています（中村和郎「地域・景域・景観」『地理学講座４　地域と景観』古今書院，1991，p.10-11.）。第一に，異なるが，関連し合うものが，同時に存在する。第二に，特有の形態をもった空間を指す。第三に，空間の広がりに階層性がある。第四に，類型，タイプ，モデルとして捉えられる。第五に，時間とともに変化する。

以上の特色について，冒頭で挙げた「江戸一目図屏風」で具体的に確認します。

第一の関連し合うものということでは，川と橋との関係。隅田川があるから両国橋があるというような関連性です。第二の特有の形態をもった空間ということでは，高台の山の手，低地の下町ということで，台風が来たら，一方は安全だけど，もう一方はすぐに流されてしまうような対照的な形態の両空間です。第三の階層性ということでは，山の手のなかに武家屋敷の一区画がある，江戸城もある，武家屋敷が江戸城を取り巻いている，下町のなかに庶民長屋があるというようなものです。第四の類型ということでは.この構図は，江戸に限らず地方都市でもやはり同じだっただろうと考えられます。第五の時代とともに変化するとは，江戸，明治，大正，昭和，平成，令和と刻々と変わるようなことです。以上の地理的なランドスケープの特色は，情報のランドスケープにおいても通じるものがあると思われます。

そこで，情報のランドスケープに進みます。地理学でのランドスケープの定義は，先ほど示したように「一定の特徴を有する空間単元を形成している地表の一区画」ということでした。前提条件として，空間が基盤にあります。一方，情報のランドスケープについては，前提条件として，メタデータ，つまり目録情報，索引情報を基盤に据え，暫定的な定義として，「情報を，多様な視点から，絞り込み，取捨選択し，見渡した際の特色あるまとまり」と，ここではひとまず示しておきます。

このことについて，図書館の閲覧室での情報のランドスケープに至るプロセスを具体的にイメージするとわかりやすいかと思います。利用者は，閲覧室の本の配置が主題別に分類で並んでいることを念頭に置いて，目当ての書架に行きます（図 4 参照）。

それよりもやはり，職員に聞いてみるのが手っ取り早い。館内地図を示しながら職員が教えてくれます。「料理の本はどこにありますか」と尋ねると，「窓際の雑誌があるブラ

ウジングコーナーの隣にありますよ」ということで，行ってみたら料理の本がまとまりのあるものとして並んでいて，料理本のランドスケープを確認できます。さらにみると，料理の上の階層には，家政学の 590 番台があり，その上の 500 番台は技術・工学ということで。こうした点から情報のランドスケープの階層性を確認できます(図 5 参照)。

閲覧室での情報のランドスケープでは，分類を基盤に資料が配置されますが，異色なものに，企画展示があります。似た性格のものをグルーピングした独立空間のランドスケープとして，自己完結しています（図 6 参照)。

図 4　閲覧室での情報のランドスケープに至るプロセス

図 5　閲覧室での情報のランドスケープ①

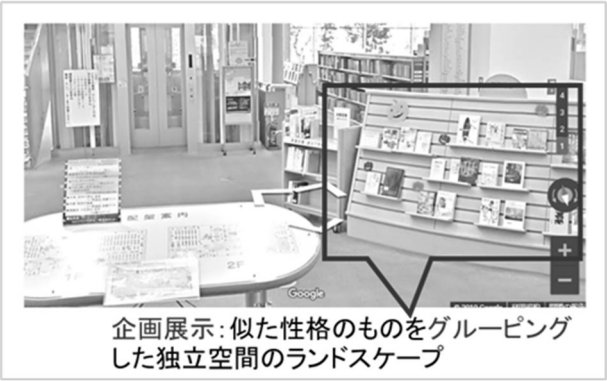


図 6　閲覧室での情報のランドスケープ②

出典（図 4～6）：Google ストリートビュー・岡山県立図書館（http://www.libnet.pref.okayama.jp/riyou/map/googlemap.htm）（accessed 2020-01-20）

図書館以外で，日頃身近に接する情報のランドスケープといえば，Amazon 等の通販サイトが代表的です。キーワード検索ももちろんできますが，カテゴリーも意識され，そこから段階的に展開します（https://www.amazon.co.jp/gp/site-directory?ref_=nav_em_T1_0_2_2_20__fullstore)。「絵本，児童書」のカテゴリーのように，意図的な重複によって，個人の認識の違いを補う工夫もみられます。ここからサブカテゴリーに展開すると（https://www.amazon.co.jp/絵本-児童書-本/b?ie=UTF8&node=466306&ref_=sd_allcat_children)，左側にファセット検索，つまり複数の視点の組み合わせを選び，絞り込むことによって，該当する情報の一覧が展開されます。

こうした仕組みも，情報のランドスケープとみなして話を進めます。

以上の事例確認を踏まえて，ここで改めて，情報のランドスケープを定義します。先ほど,「情報を，多様な視点から，絞り込み，取捨選択し，見渡した際の特色あるまとまり」と，暫定定義していましたが,「多様な視点から」を,「内容的，形態的視点から」に置き換えます。つまり,「情報を，内容的，形態的視点から，絞り込み，取捨選択し，見渡した際の特色あるまとまり」と定義します。具体的には，メタデータが，次に挙げるようなツールによってフィルタリングされ，特色あるまとまりとなって提示されます。

内容的視点としては，主題，テーマ，ジャンル等が挙げられます。対応するランドスケープを機能させるツールとして NDC 等の分類, シソーラス, 各種典拠等があります。

形態的視点としては，時間軸，空間軸のほか，コンテンツの形態，たとえば，動画，画像，音声，文字情報等が挙げられます。時間軸，空間軸に対応するランドスケープを機能させるツールとして，年表，地図等があります。

各視点が具体化されたものは，体系化される必要があります。すなわち，実質的に同じ内容，形態のものが集約されて提示される必要があります。階層性や関連性を伴わない単なるフリーワードでは，ランドスケープ機能が働きません。分類を例にとると，階層性は，先ほども申したように，料理の上に家政学があり，その上に技術・工学があるというイメージです。関連性は，598 に家庭の医学がありますが，493.9 に小児科があり，それらが関連，参照し合

うというイメージです。

それでは，ここからは，デジタルアーカイブを対象とした情報のランドスケープを考えます。複雑性の高いデジタルアーカイブ，具体的には，MLA 連携。M が Museum，L が Library，A が Archives という枠組みで構築されたものを主に考えます。

まず，内容的視点によるランドスケープのうち，既存の分類法の活用，具体的には分類検索の有効性を探ってみます。

MLA 連携では，個々の施設が異なる分類法を採用する場合，標準とする分類法に分類変換，移行をするために，分類法間のマッピングを行います。実際に行うと，分類法の性格の違いにより，移行先の分類法で表現しきれないことがあります。たとえば，デジタル岡山大百科で，NDC 分類（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/sup/jp/kyodo_ndc.html），200（歴史）関係コンテンツのランドスケープを行うと，博物館の大量の出土品コンテンツが同一分類に集中した状況を目にします（図 7 参照）。

この背景には，博物館で出土品をきめ細かく博物館分類しても，分類法間のマッピングによって，移行先の図書館分類で粗い分類表現に変換，移行するということが挙げられます。この場合，分類検索自体の意義が薄れます。つまり，分類法間のマッピングの限界，既存の分類法の活用の限界です。MLA 連携の複雑性が高まるほど，分類法間のマッピングによって特定の既存分類に集約し，ランドスケープ機能を提供する有効性は低下すると考えられます。

Europeana，DPLA，ジャパンサーチが，特定の分類をツールとしたランドスケープ機能を提供していないのは，このような背景があるからと考えられます。たとえば，DPLA が提供する内容的視点によるランドスケープ機能は，ファセット検索の要素の Subject（主題）として，付与の多い順に 50 種限定でキーワードを並べ，選択できるようになっている程度です（https://dp.la/search?q=）。

換言すると，デジタルアーカイブ全般で，主題，ジャンル等の内容的視点によるランドスケープ機能が十分提供できていない状況です。

次に，形態的視点によるランドスケープのうち，地図ツールの活用を挙げます。デジタル岡山大百科の地図で，岡山県瀬戸内市の牛窓町の区画，「日本のエーゲ海」とよんで観光振興しているところを範囲指定します（図 8 参照）。

岡山県瀬戸内市牛窓町関係コンテンツのランドスケープの画面となり，3 点のコンテンツのうち「唐子踊」に関するものを選ぶと，江戸時代に朝鮮通信使が瀬戸内海を渡って牛窓町を寄港地としたことに由来する「唐子踊」という郷土芸能の映像に展開します（図 9 参照）。

図 7　NDC 分類 200（歴史）関係コンテンツのランドスケープ

図 8　形態的視点によるランドスケープ・地図の活用

図 9　岡山県瀬戸内市牛窓町関係コンテンツのランドスケープ

出典（図 7～9）：デジタル岡山大百科（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/）（accessed 2020-01-20）

形態的視点によるランドスケープでは，年表ツールも挙げられます。ひなぎくの地震発生順に並んだ年表（https://kn.ndl.go.jp/static/ja/earthquake.html）で，「明治三陸津浪」を選択します。すると，関係コンテンツをランドスケープできるだけでなく，先に挙げた Amazon の画面展開同様，複数の視点の組み合わせであるファセット検索も可能です（図 10 参照）。

さらに，グルーピング機能です。閲覧室での企画展示に相当します。似た性格のコンテンツをグルーピングし掲載します。既存のツールや枠組みに収まりきらない場合に活用します。呼称は，コレクション，トピックス，ギャラリー等とさまざまです。埋もれたコンテンツを発掘し，可視化するのは腕の振るいどころです。デジタル岡山大百科のトップ画面で，「校歌」を選択すると（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/collist-jp/kyo/M2016012520372237322），196 曲の校歌の一覧をランドスケープできます（2020 年 1 月 20 日時点）。

グルーピング機能については，Europeana でも Galleries という呼称で活用されています。たとえば，「歌川広重」関係（https://www.europeana.eu/portal/en/explore/galleries/utagawa-hiroshige）コンテンツ 45 作品のランドスケープができます（2020 年 1 月 20 日時点）。

ちなみに，「安藤広重」が同一人物ですが，「歌川広重」でキーワード検索しても「安藤広重」は含まれないという問題があります。この問題については，後ほど改めて触れます。

図 10　「明治三陸地震（津波）」関係コンテンツのランドスケープ

出典：ひなぎく（https://kn.ndl.go.jp/static/ja/earthquake.html）（accessed 2020-01-20）

ここからは，なぜ，ランドスケープ機能が必要かということを考えていきます。第一に，専門知識の格差に由来するキーワード検索の限界を補完するためです。メニュー選択，ファセット検索等の活用によって実現します。第二に，言葉や概念の参照，隣接領域の提示を実現するためです。分類（カテゴリー），シソーラス，年表，地図等のツールで提示されます。第三に，グルーピング機能によって，埋もれたお宝を伝える，可視化するためです。第四に，提供者側にとっては，情報の偏在，不足状況の把握が容易になるためです。区分ごとのコンテンツ数の一覧によって，不足箇所の補強の必要性を認識できます。解決策の一つとして，コンテンツを募集し，参加型の仕組みをつくることが考えられます。第五に，同様に提供者側にとっては，一覧メニューにあてはめるという取り組み等を通じて，言葉や概念の体系化を進められるためです。結果的に効率性の高いシステムになります。つまり，同じ内容のものが集約提供されるようになります。また，異なる時代や場所でつくられた同じ内容のものが集約提供されるようになります。これは情報のストックをミッションとするデジタルアーカイブでは特に重要だと思います。その時点で存在する Web 情報を中心に提供する検索エンジンに対して，これから十年，百年，千年と長期の保存提供を見据えたデジタルアーカイブであれば，同種のものを集約提供でき，関連知識がなくても集約提供してもらえるような仕組みが必要と思います。

キーワード検索の限界と，言葉や概念の体系化の必要性については，ここに挙げるコンテンツを通して理解していただけると思います。これは，デジタル岡山大百科の郷土情報募集事業に応募されたクリエイターによる，「想いでの学び舎」という想定外のタイトルのコンテンツです（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/kenmin/omoidenomanabiya/gakko-top.htm）。

タイトル，著者等の代表的項目では検索ヒットせず埋もれる事例です。小学校の先生だった方が，150 校を超える廃校になった校舎を，ラジコンヘリで上空から映したものです。ラジコンヘリって言葉は，いまは使われないですよね。ドローン（drone：無人機）という言葉がいま活発に使われていますが，コンテンツが提供された 2006 年ころに

はドローンという言葉はなく，ラジコンヘリコプター，略してラジコンヘリと呼ばれていました。その言葉をメタデータに付与していたのですが，そうしたコンテンツを現代の利用者が，キーワード検索で取り出すのは難しいと思います。異なる時代や場所でつくられたものが集約提供できるように，ラジコンヘリと，ドローンを泣き分かれないようにするのが理想的です。

言葉や概念の体系化の必要性に関する固有名詞，人名の事例として，ジャパンサーチで「安藤広重」でキーワード検索すると 276 件，「歌川広重」でキーワード検索すると 3,023 件で，両者の関係性は現状の仕組みではわかりません（図 11 参照）。いわゆる泣き分かれ状態です。先ほど，触れた Europeana でも，キーワード検索では同様の状況です。

ちなみに，Google では，「安藤広重」で検索すると，「歌川広重」の参照表示があります。ただし，「歌川広重」で検索すると，参照表示は出ません。限定的なランドスケープと呼べるかもしれません（図 12 参照）。

図 11　ジャパンサーチ（https://jpsearch.go.jp/）（簡易検索）での比較（accessed 2019-09-22）

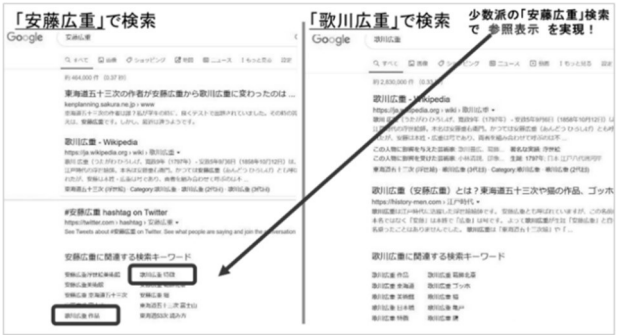


図 12　Google（https://www.google.com/）での検索比較（accessed 2019-09-29）

それでは，デジタルアーカイブにおける情報のランドスケープを，より精度の高いものとするための課題を挙げ，解決指針を示します。

課題を 2 点挙げます。第一に，既存の分類，カテゴリー体系，あるいはフリーキーワードの活用における限界です。分類体系，カテゴリー体系，あるいはフリーキーワードは，時間の経過とともに急速に陳腐化します。それにもかかわらず，NDC 等の分類体系の改訂間隔は少なくとも 10 年はかかるとともに，メタデータ，目録情報への付与済み分類，フリーキーワードの将来的変更は未想定です。付与したときから変わりません。つまり，変化に対する柔軟性の欠如の問題があります。第二に，同義語，固有名詞や人名の別表現，別表記について，個人によって認識の格差があることに由来する機会損失の発生の問題があります。内容的視点によるランドスケープ機能が不十分な状況に由来する二つの課題について，主要なデジタルアーカイブでいずれも未解決であり，いわば限定的なランドスケープしかできていない状況といえます。

ここからは発表者の個人的見解となりますが，以上の課題への解決指針を示します。以上の二つの課題に共通するのは，現状のデジタルアーカイブで，言葉や概念の体系化が進んでいないことです。言葉や概念の体系化を持続的に進めるために，必要なことはなにかということを突き詰めて考えると，各デジタルアーカイブとシソーラスとの連動を進めることに帰着しました。

このことについて，次のように四段階で考えます。第一に，各デジタルアーカイブが API 機能をもつシソーラスを共有します。API とは，あるプログラムが別のプログラムを呼び出す際の仲介機能です。ちなみに，シソーラスとは，索引，検索用の構造化された統制語彙集です。なお，シソーラスは固有名詞や人名の別表現等の典拠機能を含むとともに，多言語対応です（図 13 参照）。

第二に，メタデータ記述のキーワードと，シソーラスの関連用語が連動します。このことによって，たとえば，デジタルアーカイブ上で，「ドローン」付与コンテンツ，「ラジコンヘリコプター」付与コンテンツの両方が参照できるようになります。「ドローン」というキーワードで検索する

と，シソーラスを参照し（図 14 参照；例示したのは JST シソーラス map「ドローン（drone ；無人機）」関連の表示一覧），メタデータにキーワード「ラジコンヘリコプター」が付与されたコンテンツ（図 15 参照；例示したのは「想いでの学び舎」メタデータ）も含めた情報のランドスケープが実現します。つまり，デジタルアーカイブ上で，「ドローン」付与コンテンツ，「ラジコンヘリ」付与コンテンツの両方が参照できるようになります。

第三に，シソーラスの継続的なメンテナンスが必要となります。つまり，時間とともに変化する言葉や概念への対応です。Web でのボランティア参加型や，AI のディープラーニングが考えられます。

第四に，シソーラスの体系化，階層化の完成度を高め，シソーラスの個別の用語マップをつなぎ合わせていくと，究極的にはまとまった分類（カテゴリー）体系が構築され，ランドスケープを一覧メニューから見渡すことができるようになると考えられます（図 16 参照；例示したのは JST シソーラス map（用語マップ）「ドローン」の上位階層「工学」の表示一覧）。

最後に，金をかけてシステム改造をしなくても，すぐにできることを二つ挙げておきます。第一に，埋もれたお宝コンテンツを可視化するということです。具体的には，グルーピング機能を活用し，Web 上での企画展示を行うということです。第二に，情報の偏在，不足状況等について，

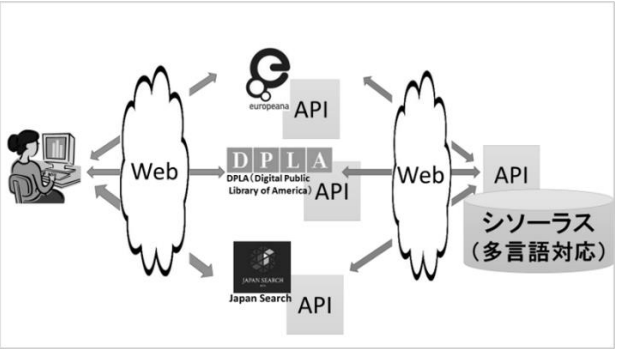


図 13　API 機能をもつシソーラスと連動するデジタルアーカイブ

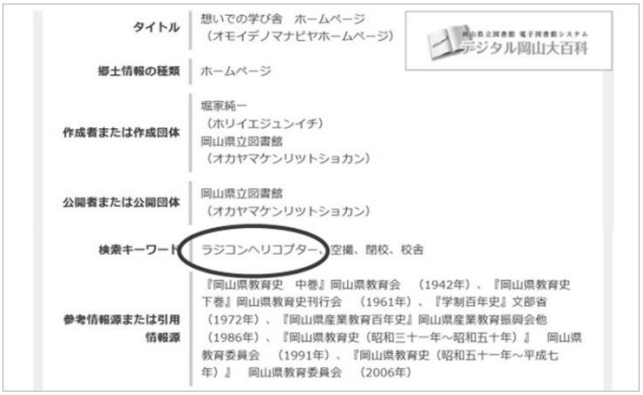


図 15　「想いでの学び舎」メタデータ

出典：デジタル岡山大百科（http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detail-jp/id/kyo/M2006021512523651289）（accessed 2020-01-20）

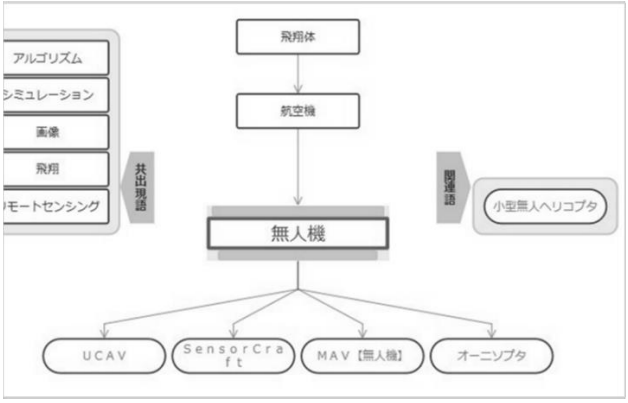


図 14　JST シソーラス map（用語マップ）「ドローン（drone ；無人機）」関連の表示一覧

出典：JST シソーラス map（https://thesaurus-map.jst.go.jp/jisho/fullIF/index.html/）（accessed 2020-01-20）

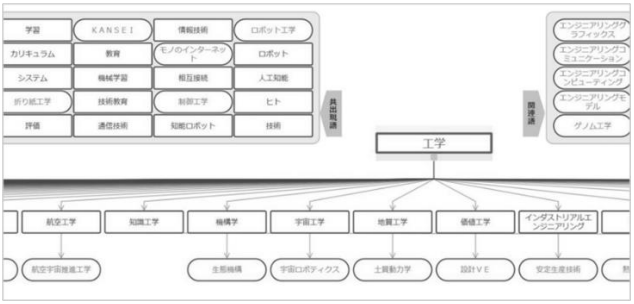


図 16　JST シソーラス map（用語マップ）「ドローン」の上位階層「工学」の表示一覧

出典：JST シソーラス map（https://thesaurus-map.jst.go.jp/jisho/fullIF/index.html/）（accessed 2020-01-20）

ランドスケープ機能によるチェックを行ってゆくということです。みつかった不足箇所の補強にあたっては，コンテンツ募集（参加型）も一つの解決策です。先ほど紹介したラジコンヘリのコンテンツは，参加型で住民の方から集めたものです。こうした取り組みによって，デジタルアーカイブの活性化も進むのではないでしょうか。古文書も大事ですが，それだけにとどまらず，住民に開かれた公共図書館は，住民とともにデジタルアーカイブを発展させる使命があるのではないでしょうか。以上です。ご清聴ありがとうございました。

（永田）

ありがとうございました。ここで休憩にしたいと思います。外には，お茶や水が用意されていますので，ご利用ください。

それから，お手元の封筒のなかに質問票がございます。質問がある方は，それにお書きになりまして，私どものほうにお渡しください。

==========

ディスカッション

（永田）

それでは，時間になりましたので，再開したいと思います。ディスカッションを始めたいと思います。

少なからず質問を頂戴しているんですが，最初申し上げましたように，ここで太田さんに，太田さんのなさっていること，あるいは今日お越しになって思いつかれたコメントなどを，お願いしたいと思います。

（太田）

図書館と地域をむすぶ協議会の太田剛と申します。一昨年このシンポジウムに呼んでいただいて，ソーシャルイノベーションとか協働ということについてお話しさせていただきました。今回のシンポジウムの準備が始まるころに，永田先生に今回は「ランドスケープ」でいくとお話を聞いて，これはまたチャレンジングなものを選んだなとずっと思っていたのですけども，文字面だけとって「景観」だけの話にすると，意外と世界は広がらない。だけどいったん「ランドスケープ」に「図書館」をくっつけて，「図書館を巡るランドスケープ」といって，図書館を巡るいろいろな状況や課題をそこに入れていくと，今度は広がりすぎてなかなか収集つかないのかなと。ここでいう「ランドスケープ」はどういう切り口で，どんなふうなことをいって，どんな形で落とし込んでいくかって，結構難しいなと思って今回は聞いていたのですけども。ま，今回は第一に伊藤麻理さんの建築からみたランドスケープ，それから，森山先生のデジタル情報，インフォメーションランドスケープっていうところで話をもっていかれるのだろうなと想定しながら聞いていましたが。

伊藤さんの話のなかでもあったと思いますが，普通は建築家さんがいう「ランドスケープ」の考え方は，「景観」ということになると思うのですけども，もう少し図書館というものに引き寄せたときに，そこに込めたいニュアンスってきっとあると思うんですね。そういったときにものすごく似ている言葉で，「観光」という言葉がある。景観の「観」に「光」と書いて観光。光を観る。この「光」ってなんですかね。観光，観光っていってますけどね。いまは観光っていうと，なにかつまらないゆるキャラが出てきてグルメやってってなっちゃうんですけど。本来の観光って意味は違うんですね。あの光って「クニ」からきていて，「クニ」に光を照らすということなんですね。ときの権力者が高台にのぼって下々の人たちがどういう生活をしていて，どういう土地に力があってということ。このときの「クニ」って，昨日天皇陛下がパレードやられましたけども，そのナショナリズム的にとっちゃうとつまらない話になっちゃうんですけども，そうじゃなくて，もっと愛郷心っていう。里という意味での「クニ」というものとして，そこの土地の力を観る。そういったものが観光の「光」なんですね。そういうときに，図書館とランドスケープっていうときに，景観じゃなくて，その土地土地のもっている「光」を観る，それを図書館にどうもっていくのというところまで広げると，ちょっとおもしろい議論になってくるかなと思います。

そのときに，伊藤麻理さんがおっしゃっていたよう

に，建築家さんというのはいろいろなことを考えてその土地のあり方，もちろん物理的な地面の傾斜だとかいろいろなことを考えるでしょう。それと，そこの駅との関係とか商店街との関係とかいろいろな事を考えてつくっていきます。今回紹介していただいた梼原町立図書館，「雲の上の図書館」といっていますけども。建築家は隈研吾さん。隈研吾さんのコンセプトというのは，「溶ける建築」とか「負ける建築」とおっしゃっていますけども，完全に外からみると，自然景観に溶け込んでいます。そこが大したものだなと思うんですけども，そのときに，建築家さんがいろいろ考えて，なかで工夫したこと。それから梼原の場合は，前の町長さんの意向がものすごく強かったので，その町長さんの意向をくみ取って，それから地域の人がどういうことを考えているのか，働く人たちがどういう人たちなのか，そういうものを全部受け取って，最終的には運用に渡していくんで，そこの橋渡しをコーディネーターといわれている僕なんかがやっていることなんですけども。じゃあそのときに，なにをもってそのランドスケープといっているものを，この図書館のなかで組み立てていくのか。そこにはもちろん，運用だとか，その土地の「光」，そういうものをどうやって，選書から，分類から，それからルールづくりから。例えば梼原の場合は町長さんが「町民の人たちに，ワインを傾けながら，ここでまちの将来を語ってほしいんだ」っていうすごく強い想いをもってらしたんで，そういうラウンジを一番上につくって，利用者が自由に使えるようにして，飲食自由にしてお酒もOKにして，持ち込みOKにしてっていうような空間づくりからルールをつくっていくというふうにしているんですけども。まあそうしたときに，ランドスケープといったときに，情報のインフォメーションスケープもあるんですけど，もう一つマインドスケープというようなことを考えなくちゃいけないかなと思っています。

昔，岡崎市の岡崎市美術博物館で，中身全部をコーディネートする仕事に関わったことがあるんですけれども，マインドスケープミュージアムというものをつくりました。その土地土地の人たちがその地域のなかでもっている，いわゆる物理的なスケープじゃなくて，マインドスケープ，もう一つ心の，心象的な風景があるんじゃないか。そのなかには必ず物語があって，地域の物語があって，それをどうやって運用から，選書から，分類まで込めていくのかっていうことを，組み立てていかないと最終的には図書館，本当の地域のためのよい図書館にはなってゆかないんじゃないかなというのがあります。

そういう意味では今回，半年ぐらいですか，伊藤麻理さんと一緒に那須塩原の図書館お手伝いしていました，アドバイザーで入って。市民の人たちのつくった本当にいい基本計画があるんですね。それを建築家として伊藤さんが解釈して，あそこまで形にしたのだけども，それが運用につながらない。残念なことに。建築は建築家さんが都市整備課さんと組んでぐいぐい進めていくんですけど，建物ができあがると運用になって，生涯学習課さんに引き渡される。その運用を引き渡された側があんまりやる気がない感じのことが多々あるんですね。昔のスタイルの，指定管理丸投げのような既存図書館があって，それをそのまま移行するだけのようなプランしか出てこないとか。例えば建築側が基本計画からああやっていろいろね，アクティブラーニングの空間を用意する。あれ運用するとなると大変ですよ。誰がコーディネートして，誰がファシリテーションして，どうやってあそこの場を動かしていくのって考えると，いろいろやんなきゃいけないことがあるんだけど，結局，なにもしないっていう運用プランになってしまう。最近多いのは，防犯カメラの議論ですね。さっきの伊藤さんの設計もそうでしたが，小さいスペースがいっぱいあるじゃないですか，子どもがひそめる。そういうときに，死角になるから防犯カメラつけるとかいう議論になるんですね。みえないところには防犯カメラをつけるってね。挙句の果ては，トイレの出入りまで防犯カメラで全部チェックするとかって，ホントに椅子から転がり落ちそうになることがあります。結局マインドスケープってなにが支えるかというと，利用者と地域の人と図書館の，運用側との信頼関係だと思うんですよね。

さっき永田先生からアフォーダンスって言葉がありましたけど，アフォーダンスってすごく大事な言葉で，わかりやすくいうと，コップを取ろうとしたときに，手が

コップの形になっているんですよね。先に手がコップの形になってコップを取る。これがアフォーダンスなんですけど。図書館に行くときに人というのは，図書館に入ったときにそのアフォーダンスができているか。多くの図書館は万引き防止のことばっかり考えていて，信頼関係がないですよね。こいつ盗むんじゃないかっていうつくりになっていたり。それでそういうマインドスケープができるんですかねって僕はいつも思ってるんですけれども。じゃあそういう信頼関係に基づく，マインドスケープができて，マインドスケープができた図書館では，そういう万引き率はぐっと下がるんじゃないですか。実際に幕別町図書館，梅原町立図書館もそうなんですが，まったく万引き防止対策は行っていないです。キンコンキンコン鳴るような高い機械は入れていないです。でも，ほとんど万引きないですよ。ほとんど本なくなってないです。1年。幕別はもう7年やってますけど，ほとんど。要はそういう空間ができているかどうかという話なんじゃないかなと思います。

それからデジタル化の話，これもものすごくこれから大事な話なんだと思います。インターフェースをどうするかという話から，情報構造，分類等。僕も慶應大学では，ネットワークコミュニケーションというのをずっと教えているので，どっちかというとそっちが専門なんですけど。かつては長い間，アノテーションだの，コノテーション辞書とか，文脈型検索エンジンとか，オブジェクト指向だとかエージェント指向とか。いろいろなものを駆使してどうやって検索の，いわゆる今日のお話だとランドスケープをつくるかという議論をしてきました。そのときに，デジタル社会になってネットワーク社会になって一番大事なのは，そのランドスケープの範囲をどうみるんですかという議論を散々してきました。そのときによくいっていたのが，ゴーンと鐘を鳴らして，お寺の鐘が聞こえる範囲が，コミュニティの範囲だよねと。じゃあデジタル社会のそのお寺の鐘ってなんなんですかと。それは僕はたぶん分類からとかだけのアプローチでは出てこないんだと思っています。ネットワーク上でゴーンて鐘を鳴らしてそれが響き渡る世界のなかで，さっきまさにおっしゃられたボランタリーな形でみんなで情報をつけていく。だいたいシステム系のデータベースの話になると，特にキーワードをつけるとか，アノテーションとかコノテーションという話になってくると，形態素解析とか出てきて出口がなくなっちゃったりするんですよね。そのときにWikipedia型とかあると思うんですけど，知の交換の場というのをどうやってつくっていくかってことが大事になるんだと思います。なのでいままでのあらゆるメディアとデジタルネットワークになってなにが一番違うか。いまのデータベースって情報があるものしかストックできないんですよね。ところがネット社会，デジタル社会の最大のポイントって，ない情報が出せる。前は情報をもっている人しか語れなかったのですけども，ネット上は，「私，情報ないです」，「ここ情報ないです」。で，差し出すとみんながそこに入れてくれる。そのときの信頼の範囲は，さっきいったお寺の鐘がゴーンとなって届く範囲だと。

じゃあ図書館を核にしてそういう情報ネットワークのランドスケープがどうつくり得るのかというのが，これからの課題かなと思って聞いていました。そのときに，さっき江戸の絵図が出てきましたが，あれ富士山が真ん中にある絵がありましたが，なぜああいう描き方になるのか。あれが実は，日本のコミュニティのモデルなんですよ。山があって川があって，あれ「海山里モデル」ってよんでたんですけれど。山に神が降りてくる依り代（よりしろ）があって，川の分かれたところに水分り（みくまり）があって，そこに御仮屋（おかりや）を置いて，そして奥宮，中宮，本宮があって，もう一つ海のほうからやって来る神があって，奥津宮，中津宮，辺津宮とかあって，それを里にお招きして，魂振り（たまふり）してまちのなか歩いていくのが御神輿で，日本の「海山里モデル」なんですね。そういうような，土地それぞれの物語っていうのを，もう1回それぞれの物語を，図書館という空間でどうやって，分類だけじゃない方法で，情報の基盤に敷いていこうかということを，ランドスケープって意味では考えていかなければいけないかなと。もちろんそういう昔ながらの「海山里モデル」だけではない，なにかそういったモデル，十進分類法だけではない。あれは，前々回のシンポジウムでも聞かれ

た方はよくわかっていると思いますけど，僕はあまりNDCって好きじゃないんですね。世の中のものを全部10個に分けられるってなんという横柄な考え方なのかって思うんですけど。そういったら，前のシンポジウムでも何人かの人に叱られたんですけど，図書館はそういうものじゃないって。まぁ，十進分類法は大事だと思います（笑）。

それとは別にもっと可変性・多層性のあるものをどうやって取り入れていくかということが大事だと思います。そのときに，私がいま一番注目している言葉が「レジリエンス」という言葉です。もともとは環境学とか生態学とか，もう一つは心理学のほうからもきているんですけど，なんていうんですかね，折れにくさ，回復力などというふうに訳されているんですけど，例えば，木って雪が降ってくると枝が折れますよね。だけど竹はたわんで折れないですよね。そういう回復力とか，折れにくさ，そういう強さ，柔軟性とも訳されているらしいんですが。そういう強さをこれからの地域づくりに，持続可能な社会，SDGsとかいっていますけどもね。これからの持続可能な社会づくりでいまもう１回注目されている言葉なんですけども，図書館が，地域のなかの図書館という限りは，図書館そのものもどうやってそのレジリエンスをつくっていくのかというのが大事になってくるのかなと。そのときに今日のランドスケープだとか，情報のコミュニケーション，インフォメーションランドスケープ，そういう話が，ボディブローのように効いてくるんじゃないかなと思います。ということで，ありがとうございました。

（永田）

ありがとうございました。いろいろ示唆に富んだご発言をいただきました。

ディスカッションですが，いくつか質問がきています。ランドスケープという言葉がどうもしっくりこなかったという印象をもった方もいらっしゃったようです。ランドスケープとは一体なんなのか，あるいは情報のランドスケープということがもう一つ腑に落ちていないという印象があります。基本的には最初にお伝えしたような意味なのですけども，私どもは，景観をみて，その形態を認識するだけではなくて，そこに含まれた意味を直感的につかむんですよね。そして，「すばらしい，ああいいな」となると，そのランドスケープにのめり込んでいけるというわけですね。図書館の建築を伊藤さんたちが設計にあたるときに，いいランドスケープをつくろうとする。そのいいランドスケープをつくろうとする過程を今日はご説明いただいたわけです。伊藤さんにいろいろな質問がきています。

森山さんのほうの話は，少し技術的な話が多かったので，馴染みのない方がいらしたと思うんですが，実はとてもとても大切な話ですね。これからデジタル化社会になっていって，ランドスケープが直感的に，視覚的にみえない状況になっていく。そういうときにどういうふうに，図書館は工夫して情報を届けるのかという話です。ただし，分類，NDCの話があって，それからシソーラスの話があって。実はいま図書館で働く方もそういったところに対して疎くなっているので少し難しかったかもしれません。また，公共図書館では太田さんがなさっているようなユニークな形での配架，つまりコレクションのランドスケープづくりがあって，そういった工夫に公共図書館は留意しなきゃいけないけれども，デジタル化資料になると必ずしもそうはいかない。ある程度標準的な，誰もが思い浮かぶようなものが（もちろん太田さんのものも誰もが思い浮かぶところを根拠にしているのですが）必要です。そこでは，広い流通性を求められますから，国際的な標準だとかを取り入れた，かなり技術的な話になります。そういう意味で慣れてない方にはつらかったかと思いますが，実際大変重要な話でもあります。

では，質問にお答えいただきます。どっちからいこうかな，「情報のランドスケープは，情報のありか，それを取り巻く構造という理解でよいですか」という質問がきていますが，どうですか，森山さん。

（森山）

そうですね，情報のランドスケープを，情報の分布状況とイメージされているのかもしれないですね。私のイメージとしては，定義のところでお話ししたように，まとまりですね。情報をフィルタリングしたときに再現さ

れたまとまりを，情報のランドスケープと捉えているので。必ずしも分布状況というものとはまた違うかなと考えています。

（永田）

ありがとうございました。森山さんにはおっしゃりたいことがあったんだと思うのですが，ご質問された「情報のありかですか」という質問には「そうですよ」と，答えたほうがわかりやすいかと思います。ただ，そのありかをどういうふうにつかまえるかということに対して，いまのような森山さんのお話があるわけです。まさに情報のランドスケープというのは，情報のありかを直感的につかまえられるような景観を示すといったほうがわかりやすい。

ついでに森山さんに「デジタル岡山大百科の到達点と今後の方向性についてご教示ください」という質問がきていますが，どういうのがありますか。これにお答えいただけますか。

（森山）

到達点，他館が見習うべき点，今後の方向性についてのご質問ですね。ただし，私はもう担当者じゃないので，これまでどのようなスタンスで取り組んできたかをお話しすることによって，回答に代えさせていただければと思います。

私が任された時期は，試行錯誤がかなり許容された時代だったんです。90 年代，2000 年代初頭ですね。自分でまずは考え，実証実験から始まりました。デジタル岡山大百科ということで，岡山のことはなんでもわかるようにするはずが，最初のころは，分類をとおしたランドスケープ機能によるチェックをしたときに穴だらけだったんです。「お前これどうするんだ」と，「県内をカメラかついで歩くのか」と上層部からいわれて，つらい思いをしたんですけど，そこで思いついたのが郷土情報募集事業です。すべて自分でやるんじゃなくて，住民の参加型でやる。こういうことを繰り返し，ひねり出してやってきました。他館が見習うべき点というところでは，「必要は発明の母」という言葉がありますけど，やはり自分で考える。他をまねるということではなくて，まずは自分で考えてみるというのが必要じゃないかと思います。到達点とか今後の方向性というのは，やはりそのときそのときの時代の要請に応えていく，ということが必要だと思います。

（永田）

デジタル岡山大百科は皆さんネットでみることができます。クリックしてみて，「へぇ，こんなことやっているんだ」とご覧になっていただきたいと思います。公共図書館の一つのあり方として，大変ユニークなあり方だと思います。他の公共図書館はなぜこういうことをしないのかと思うくらいのおもしろい取り組みだと思います。

もう一つ伊藤さんのところへいく前に，「アクセシビリティ」というキーワードがありますね。「アクセシビリティ」というのは誰もが情報にアクセスできるということで，特に障害のある方のアクセスを保障することです。その「アクセシビリティ」に関する質問で，読みますと，「物への接近しやすさ，使いやすさ，情報の取得しやすさを考えるようになってきています。使いにくい，わかりにくいということのないように，当事者の目線で捉えていくことが重視されていると感じます。今回シンポジストのお二人のお話では，当事者がどのように関わっていくのかという視点が感じられませんでした。障害者だけが当事者ではありませんが，さまざまなニーズをもつ方々がどのようにすれば使いやすくなるのかは，どこで判断，担保されているのかが気になりました。ご教示いただければ」ということであります。

重い質問です。私は今回のお二方がその観点をお忘れになっているわけではまったくないと思いますが，のちほど，機会を差し上げますのでコメントをつけていただければと思います。

それで，伊藤さんへの質問は，必ずしも情報景観のお話，あるいはランドスケープ一般の話ではありませんが，いくつか質問がきています。一つずつお答えいただければと思います。「図書館のコミュニティづくりに関して，市民による自主的な活動，ボランティアグループの設立等は予定されているのでしょうか」という質問がきています。どうぞ，お願いします。

（伊藤）

いま，那須塩原市では，ボランティアさんがたくさん

いるんですね。市民の活動を支援している会社があったりとか。活動がすごく盛んで，例えば図書館の既存のところでいうと，児童図書のところで読み聞かせをしているボランティアさんたちがいるんですね。そういった方々の活動はもちろん引き継いで，なおかつ，新たな活動をするボランティアさんも出てきているんですよ。今回の図書館をきっかけに。例えば，3D プリンタがある部屋があるんですけど，そこであれば「僕たち 3D プリンタが大好きなので，グループをつくって教えます」という方がいます。つまり誰か支援する人を雇うのではなくて，市民のなかで得意な人たちが教えることで，教えたり教えられたりすることでコミュニティができていくので，そういう活動の場であってほしいとは思っていて，そういう部屋を用意したりとかしています。やっぱりそうなっていかないと，継続しないと施設は死んでしまうと思うので，継続するためにはやっぱり地元の人たちが主役となって，活動しやすい場所をどうやって用意しないといけないというところで設計をしています。

（永田）

はい。よろしいでしょうか。

それでは次の質問に参ります。「実際に那須塩原市の図書館で働く方の意見など，参考にされた部分，あるいは設計に反映された部分はあるのでしょうか？働く方にとっては，作業のための動線などが重要になってくるかと思いますが，そういったところは考慮されていますか」と，働く立場への配慮は，なにか。

（伊藤）

黒磯図書館の方々にはすごく聴き取り調査の会合をしています。例えばカウンターを女性が使いやすい高さにするとか，裏動線で上下 2 階になっているので，垂直動線ですぐ作業できるような，エレベーターの周辺に作業場があるようにしたりとか，あとはですね，これだけの図書館だと，本棚もランダムに並んでいると，すごく死角ができていろいろ管理がしづらいという話もあったので，建築的な配慮としては，中心に来ると，360 度見渡せるようになっているんですね。本棚が放射状になっているというのはそういう利点で，真ん中に来ると全体が見渡せるプランにはなっているので，そのへんで管理はしやすいという配慮をしています。あとは，どうしても女性が多く働く職場なので，女性に対しての配慮というのを結構していて，わかりやすくいうと足が疲れるのでというのがあったので，二重床にしてやさしいクッションタイプの床にしたりとか，あとは床下空調を徹底して，吹き抜けのところには床暖房を入れて寒さ対策をしています。やっぱり長期滞在になるので，足元があったかく，快適で心地よくて，働く人にとってもいいというので基本的に床暖房とかクッションタイプの床にしたりだとかは，調査のなかで出てきたことなので，取り入れています。

（永田）

よろしいでしょうか。すごいですね。私が大昔，新しい図書館の設計計画に関与したときは，図書館屋と建築屋さんはなんか敵対関係にありまして，建築屋さんはいいデザインのものをつくりたい。図書館の方は働くのに働きやすい図書館をつくってくれなんて話で，なかなか話がうまく一致しなかった覚えがありますが，いまは時代が変わりまして，伊藤さんのお話を伺っていると，随分とお互いに歩み寄っているような気がします。

次の質問に参ります。伊藤さんへの質問ですが，「近くのカフェ，雑貨屋等にはどちらかといえば外の人（地元ではない人）が多く来ているように思います。そんな人たちにとって黒磯の図書館は興味をひくものになりそうだなと感じていますが，そのような外から来た人たちを巻き込む方法等はワークショップで出たのでしょうか」というものです。

（伊藤）

そうですね。那須塩原っていうまちって，いわゆる那須は那須町なんですよ。地理的にいうとその下のまちが那須塩原市なんですね。観光で外から来る方々って，ちょっと誤解されやすいんですけど，観光地とは若干しか被ってないんですね。基本は那須町とか塩原町なんで。なので来る人って，観光に来た人が那須塩原の駅に向かうので，帰りにたまたま寄ったとか，そういった方が多いですね。ただこのまちは特になんですが，結構イベントをやってるんですよ。例えば宿とカフェを営んでいる方が中心となって，広場の前で夜市とかやって，東京の

料理人を連れてきてなにかイベントやったりとか，結構地元の人は活動的で，もうすでにそういった活動家がたくさんいるんですよ。なので，こないだやった交流センターのイベントなんかでも，すぐ2～3千人がすっと集まるんですよ，土日だけでも。だから呼ぶ力があって，それはやっぱりインターネットを通じて，いろいろなことを発信しているというのもすでにあるので，そういう方々が図書館の1階のフリースペースでどんどん活動をやりたいという話があるので，そういった意味では，場所さえ与えれば，変な言い方ですけど，場所さえあれば彼らがちゃんと利用してくれるというのが，ワークショップで垣間みれたんです。

あとは，重要なのはやっぱりルールなんですよ。運営者がしっかりルールづけをしていくという，本来であればしっかり議論されていかなければいけないと私は思っているんですけど，ルールって例えば，時間は何時から何時までですよとか，周りからうるさいとか意見が出てきちゃうから。貸し出すものはこれですよとか，電気代はこんなルールですよとか，本来は運営する生涯学習課の方々がもうやってかなければならないんですけども。やっぱり知識がないんですよ，打ち合わせしてて聞いていると。だからやらない。そうなると，オープンしたとき絶対トラブるんですよ。これだけの広さがあるんですよ，1階だけでも2,000㎡近くあって，1階全部を貸し切って広場もあわせると，5,000㎡近い平場を借りてイベントできるのに，なんのルールもつくらなかったら絶対トラブるんですよ。そういった準備をやっぱりやるべきなんだけども，しないなあっていうのを，はたからみてますね。だからトラブるんだろうなあってやっぱり思うんですけども。そこがすごく悲しいなあと思いながら。

でも市民の皆さんのほうがよっぽど勉強されていて，自分たちでルールをつくってなにかやろうっていう活動すらどんどん出てきているので，私はやっぱり強制的に「こうです」って役所がやるんではなくて，市民の力をもうちょっと引き出して，市民の方々でルールをつくって，「はい，やってみましょう」っていうのをもっとやってもいいのかなっていうのは，はたからみていて思っています。どうしても設計者なので，ああだこうだやっぱりいえないんですね。ただ，設計者っていろんなところでワークショップやったり設計やっていると，実はすごく情報をもっていて，成功しているまちはこんなことやっているんだよっていうんですが，なかなかやっぱりしっかり勉強する行政とそうじゃない行政とあるので，課によってもかなり違うのかもしれないですが，もう少し情報交換できればいいのになというふうにはすごく思っています。

（永田）

はい。大変おもしろい話ですね。ここに集まっていらっしゃる方は図書館で働かれている方が多いのですが，同時に行政の方もいらっしゃいます。図書館で働かれている方は行政の意向に左右されて，ときにいい場合もあれば，かなり困った場合も，そういったことをご経験されていると思います。図書館の議論をすると必ずやこの問題にぶつかりまして，要するに市民というか住民が主体なのですが，行政がその住民の代表権をもっているような形で規則などをつくって，この言い方はちょっときついかもしれませんが，抑え込むような場合もあります。このあたりはどうも，今後の日本社会の成熟の問題なのかなというふうに思います。もう一つ伊藤さんが示唆されたなかで非常におもしろいことは，市民の人たちが自分たちでルールを考える，実は市民も必ずしもいい主体者ではないこともある。ずるいことする人もいるし悪いことする人もいる。そういった余剰をどうやって防いでいくかは，行政のように明言すればいいわけではない。市民どうしのなかである程度お互いにそういったことを防いでいくような約束が必要なのだと思います。そのことを伊藤さんはルールとおっしゃっているような気がします。この点はぜひ頭に残しておいたほうがよいのかなと思います。

ヘルシンキの写真を出しましたが，ヘルシンキのような都市が，ああいった図書館をつくるのに10年近くかけている。その間に市民たちが，本当に市民たちが参加してつくっている。約1万平米の図書館ですけども，BDS（Book Detection System）ありません。そんな必要はないと彼らはいっています。そういったいわば，社会的な信頼性が高い社会ではやりやすいなと思いますね。

もう一つあります。伊藤さんに，「新しい図書館のサービス指標としてどんなものを評価基準にされる予定ですか。それは設計者の意図と合っていますか」というようなちょっと難しい質問が。

（伊藤）

いまですね，那須塩原市の図書館で提案しているのが，図書館の評価って来館者数ですよね。何人きました，みたいな。「で？」ってこっちからすると思っちゃうんですよ。正直な気持ち，これちょっと一市民みたいな言い方ですけど。「何人来たか，だからいい図書館ってイコールじゃなくない？」って思うんでよね。で，いま私たちが提案しているのは，SIB を入れたらどうかという提案です。SIB ってなにかというと，Social Impact Bond。イギリスが発祥でもともと医療機関とかでやってるんですけども，例えばわかりやすい例でいうと，糖尿病の方が検診をすることで，そのまちに糖尿病の患者が減りました。そうするとまちが負担する医療費が削減されますよね。それがまちにとって大きな視点でみると医療費削減で個人の負担が減るでしょっていうことなんですけども。そういうのってアウトカムを評価してるんですよ。だから，何人きたからいいというんじゃなくて，そこで市民が活動して，活動した人たちがまちにどんないいことを起こしたか，みたいなことを評価にしたらいいんじゃないのということを提案しています。何人来たからって，じゃあこのまちがどれだけ活性化したってならないですよね。

そうじゃなくて，どんないいことが起きたか。もしかするとそこで活動した人が，例えば海外に出て有名人になったとか，わかりやすいところでいうとそういうことでもいいですし，なにかここをきっかけにして，新しいステップを踏んだ人がどれだけ出てきたかとか，せっかくそういう場所をつくっているのに，そういう人が生まれないのを評価してもしょうがないじゃないかって提案しています。ただ，こんな SIB を入れる図書館というのはなかなかないので，もちろんハードルは高いんですけど。ただ，「そういった提案って設計者がするのかい？」ってすごく思うんですけど。なんか役所にきかれるから，「こんなのあるよ」ってそういった提案をして，「ああそんなのあるんだ，じゃあ今度話聞いてみよう」ってなるんですけど，なんか甚だ不思議だなと思いながら。でもどうしてこんな一生懸命やってるんだっていったら，わかりやすいんですけど，自分がつくった建物が悲しい状況にはなってほしくはないので，知っている情報は全部提供しますっていうのはやっています。

さっき太田さんがいった，ちょっと話変わっちゃうかもしれないんですけど，マインドスケープって私もすごくそれ感じるんですけど，ちょっと変な話なんですけど，BDS をつけるかって話が出たんですね。黒磯図書館にはないんですね。新図書館はいい本いっぱい入れるから，なくちゃ困るからつけようって話になって，建築家としてはつけようってなっても入口に電源取ればいいだけだから，いいですよっていうふうに話をしてたんですね。すごくその議論していて，BDS って 1,000 万するんだよねって，結局買えないですよって話になったんですよ。まあいいんですよ，そういう話に振り回されるのは。でもそもそもの議論で，素朴な疑問を出したんですよ。「1 年間でどのくらい盗まれるんですか」ってきいたら，だいたい 100 万くらいなんですよ。「BDS いくらするんですか」ってきいたら，だいたい 1,000 万なんですって。「だったらいらなくない？」ってすごく思うんですけど，そういう素朴な疑問すら，なんかなにも考えないで「BDS 神だ」みたいな議論をしているのが，すごく不思議だなといつも聞いているんですけど。なんかこんなことといっちゃいけないって思うんですが，こういうことも，先ほど太田さんもいったマインドスケープだなあって。盗まれている状況は悪いと思いますよ。悪いけど，それを維持するのにこんなにお金かかるなら，信頼関係でもう少しやってみてもいいし，盗まれたっていいじゃん，100 万くらいならって思っちゃうんですよね。まちの負担がそれだけ下がるわけじゃないですか。差額 900 万円。900 万円でいい本入れてあげたほうがよっぽどまちのためになりませんかって話をしたこともあります。本が買えない買えないってずっといっているんですよ。いい本をその差額分買えるじゃないかって素朴な疑問を投げたことがあるんですけど，なんか打ち合わせをしているといろいろ気づくことがあるなって思います。

（永田）

はい。ありがとうございます。あの SIB の話というか，一昨年の太田さんがご登壇いただいたときのソーシャルイノベーションのような観点というのが，図書館など，われわれのコミュニティを維持するための議論には非常に重要な話です。また，図書館もそういったソーシャルイノベーションの機関として活動していることを，建築家の伊藤さんからも指摘されたようなものです。

ちょっと森山さんに，先ほどの聴覚障害者の方のアクセシビリティの話ですが，情報のランドスケープのお話のなかで，森山さんがアクセシビリティをどのようにお考えになっているか，ちょっとコメントをいただいてもよいですか。

（森山）

はい。先ほどのご質問というのは，聴覚障害の方のアクセシビリティに対して，どのような配慮がなされているかということですね。それについては，地図ツールの活用によって展開したランドスケープ画面のメタデータのうち，「唐子踊」の映像コンテンツに，括弧して字幕付きという言葉が付け加えられているものが該当するのですが，その映像コンテンツでは，音声が出るのに加え，画面の下のほうに字幕が付いております（図 9 参照）。字幕を付ける作業をボランティアの方にお願いして取り組んでいただきました。

（永田）

アクセシビリティという観点は，大変重要な話で，法令ができたからではなくて，常に意識されなければならないところです。特にデジタル化が進んできますと，そういったものと組むデバイスの範囲が広がってきますので，経費の問題があるとしても，いいアクセスの方法を実現できるかと思います。

ランドスケープの話がちょっとみえにくかったと思いますので，最後にこのスライド（図 17）をみていただければと思います。これは議論の論点を挙げたものですが，図書館をこういった観点でみたときに，皆さんの図書館が十分なものかどうかを少しお考えいただければと思います。もし図書館がオープンで歓迎するような雰囲気をもっているとすれば，いいランドスケープがあるといえます。あるいは図書館では安心して心休まるというような状況があれば，いいランドスケープが設定されているといえるでしょう。図書館は学習の意欲をもたせてくれたり，あるいは仕事がそこでうまくはかどったりということが可能ならば，その図書館はいいランドスケープが設定されているわけです。あるいは提供されているサービスが容易に把握できるかどうか。容易に把握できるということは意外と難しいことですよね。図書館に入ったときに入口でランドスケープをみて，どこになにがあるかというのがさっとわかりますか。そういった物理的あるいは情報的に指示が出ていますか。それから，図書館から「知識の世界」全体が見渡せますか。これはちょっと難しいかもしれません。でも森山さんからご説明いただいた情報のランドスケープというのはこれですよね。知識の世界というのは必ずしもそこだけではなくて，世界につながるようなネットワーク，あるいは世界につながるような情報像がないとつかめない。図書館はそういうものを用意してくれているのか，今後の図書館はそういうものを用意していくようにしていかなければいけない，ということです。

あと少しになってしまいましたが，私がしゃべりすぎたかもしれませんが，質問したい方がいらっしゃるということで，ちょっとマイクを用意いたします。

はい，お願いします。

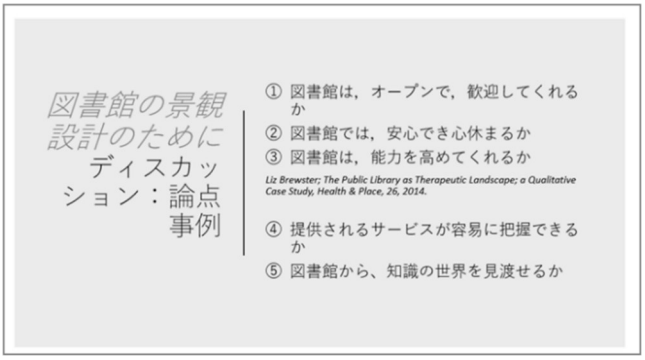


図 17　ディスカッションの論点

（質問者）

昨年も，3 年続けて参加させていただいておりまして，ソーシャルイノベーションというテーマをいただいたときには，私は練馬の図書館を利用している者ですけども，ソーシャルイノベーションというものをどういうふうにまちなかの図書館でやっていこうかという話を伺いました。そして今回はですね，図書館とランドスケープというテーマをいただいて，さあこれをどういうふうに理解してどういうふうに展開していくか。特に私は練馬区に住んでいて，この日本の図書館というものが，欧米と比べてまったくこう，利用者も，それから提供する側の役所といいますか，自治体の姿勢も，まったく違うんですね。一方利用する側も要するにただの貸本屋だと思って利用する人たちがいます。

それで去年出版された『挑戦する公共図書館』というのが出まして，これをいま取り組んで，これを練馬区長，それから区の教育長，それから区の図書館関係の課長クラスに届けています。

それで，ランドスケープというのを考えてゆくと，図書館の建物というのはつくったときが一番立派なのですね。ですが，公園などだと，この日比谷公園もそうだけども，つくったとき植えたときはみすぼらしいけれども，歳月を経るごとにさらに立派になってくる。図書館もそういう意味でランドスケープといったときに，時間の変化を，うまく利用者が，あるいは提供する側が一緒になって，よりよいものに仕上げていく。そうするといま，設計事務所で考えられていたようなことが，本当に時代につながってゆくのかどうか。例えばこの図書館も，東京都は昔ここの図書館（旧東京都立日比谷図書館）を通じてどんどん新しいことを発信していたわけです。私は全盲なので，図書館で朗読サービスをやっていただいているのですが，ここはその発祥の地ですよね。

時間ですか。そういうようなことをまた考えてやっていこうかと思います。ありがとうございました。

（永田）

すみません。時間がきてしまいまして，すべてをおっしゃっていただくことができませんでした。申し訳ありません。時間の経過とともにランドスケープが向上するという興味深い視点を教えていただきました。またご意見をお伺いする機会をつくりたいと思います。

それでは，少し時間を超過しましたが，皆さんのご協力によって，これにて本日のシンポジウムを閉会させていただきたいと思います。ありがとうございました。改めて，お二方に拍手をお願いしたいと思います。また，ご質問，ご発言いただいた方に拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

LIBRARY FACILITATOR

図書館で使えるビジネススキルを
少人数のワークショップで学べる！

ライブラリー・ファシリテーター®

認定講座 Online

定員6名！ | 受講料30,000円

こんなスキルがアップします！

- 調整力
- 発想力
- コミュニケーション力
- プレゼン力
- ファシリテーション力

3回連続オンライン講座

2021年 5月13日（木） 20時～22時
5月20日（木） 20時～22時
5月27日（木） 20時～22時

受講生特典：オリジナル認定バッジ贈呈・
限定フォローアップ講座（無料～実費）等

お申込みは
こちらから

講　師

北村　志麻

図書館パートナーズ　代表
著書「図書館員のための
イベント実践講座」樹村房

小田垣　宏和

図書館パートナーズ　代表
著書「図書館パートナーズの
つくり方　～図書館からの
コミュニティづくり～」郵研社

内　容

講座監修：慶応義塾大学名誉教授　糸賀雅児

- チームビルディングワーク
- 傾聴力を高めるワーク
- 図書館法ワーク
- 自治体基本方針ワーク
- 図書館経営・PR
- プレゼントレーニング
- アイデア発想法
- ファシリテーション実践
- アクションプラン作成 等

お申し込み・お問い合わせは
こちらまで

以下のメールアドレスまで、「お名前・メールアドレス・お電話番号」をご記入の上、お送りください。

✉ info@libraryfacilitator.com

主催 ｜ 図書館パートナーズ

――― 未来の図書館 研究所　第 5 回シンポジウム 記録 ―――

図書館とレジリエンス

日時　：　2020 年 11 月 27 日（金）13：30～16：30
Zoom および YouTube によるオンライン開催

プログラム

13：30～13：50 シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨
永田 治樹（未来の図書館 研究所　所長）

13：50～14：30【講演】「名取市図書館における東日本大震災からの復旧と復興」
柴崎 悦子 氏（名取市図書館　館長）

14：35～15：15【講演】「情報支援とレジリエンス　～鳥取県立図書館の取り組みから」
三田 祐子 氏（鳥取県立図書館）

15：15～15：30　休憩

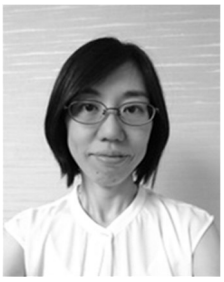
15：30～16：30 ディスカッション
●パ　ネ　リ　ス　ト　柴崎 悦子 氏
三田 祐子 氏
●コーディネーター　永田 治樹

登壇者プロフィール

■ 柴崎 悦子（しばざき・えつこ）氏　／ 名取市図書館 館長

宮城県名取市生まれ。東北学院大学文学部史学科卒。1986 年名取市に司書として採用され，市内小学校の図書館に勤務。2008 年名取市図書館に異動。新図書館建設に向けて準備を開始した矢先，東日本大震災が発生。国内外からの支援を受け仮設図書室を建設。2013 年 5 月より本格的なサービスを再開。2013 年 4 月より現職。学校経験を活かし，学校図書館との連携支援に力を入れている。

■ 三田 祐子（みた・ゆうこ）氏 ／ 鳥取県立図書館



鳥取県生まれ。図書館情報大学を卒業し，2002 年 7 月に鳥取県に司書職として採用される。鳥取県立図書館に配属され，ビジネス支援サービス，レファレンスサービス，児童サービス，資料購入などを担当し，現在に至る。日本図書館協会認定司書第 1130 号。

■ 永田 治樹（ながた・はるき）／株式会社 未来の図書館 研究所 所長

名古屋大学附属図書館を振り出しに，国文学研究資料館，東京大学・金沢大学・北海道大学の図書館などに勤務後，1994 年から図書館情報大学，筑波大学図書館情報メディア研究科，立教大学文学部等で教育・研究に携わる。専門領域は図書館経営。ISO TC46 / SC8 の国内委員。
近著：永田治樹編著『図書館制度・経営論』日本図書館協会，2016.

==========

シンポジウムの開会ご挨拶と趣旨

（永田）

第５回，未来の図書館 研究所シンポジウムの開会でございます。最初に一言，ご挨拶を申し上げます。

本年も，ご登壇いただく柴崎さん，三田さん，そしてZoom，YouTube でつながってくださっている皆さまのおかげをもちまして，このようにシンポジウムを実施する運びとなりました。今年はよもやということが現実となり，コロナ・パンデミックで本当に大変な年になりました。なお事態は収束に向かっているわけではございません。「ウィズコロナ」という妙な表現が日常になっております。しかし，まさにそうした困難なときにこそ，人々が孤立せず，十分に語り合える会合・シンポジウムが必要かと存じます。ただし，この状況では，皆で集まってお酒を酌み交わすことから生まれたシンポジウムの由来のように一堂に会することはできません。ウェブシンポジウムの形となります。手法に馴染みがなく，種々面くらうことも多そうですが，本日の機会を有効に活用し，なんらかの成果をつかみとっていただければと願う次第であります。まずは，ご参加いただいたすべての方々へ，御礼を申し上げ，ご挨拶にかえさせていただきます。

シンポジウムの進行の約束については，後ほどさらに説明申し上げますが，ここからはコーディネーターとして，私のほうから，今回のシンポジウムの趣旨について説明いたします。

未来の図書館 研究所のシンポジウムでは，これまで図書館の今後のあり方を展望するテーマを設定してきました。図書館がこれからの世界において，未来をどう確保するかという観点であります。継続してこの会合にご参加いただいている方にはご案内のところでありますが，少し説明いたしますと，これまで私どものシンポジウムでは人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動と，もう一つ，図書館の未来を確かなものにするための図書館活動とを，議論してきました。この二つは，重なるものでありますが，視点に若干の違いがあり，前者は，図書館の社会的役割に目を向け，これまでのテーマでいえば，第２回の「図書館とソーシャルイノベーション」の場合のように，図書館が社会革新にどのように貢献するかを議論するものです。また後者は，図書館自体に焦点をあて，その未来を確保するために用意しなくてはならないことがらを議論しております。昨年度のテーマ「図書館とランドスケープ」は後者であります。図書館を今後とも人々に快適に活用してもらうためには適切なランドスケープ設計が必要だとしたものです。

今年のテーマ，「図書館とレジリエンス」でありますが，図書館自体がレジリエント，つまり，災害や混乱などの状況を乗り越え成長してゆくことと，また図書館が人々やコミュニティのレジリエンスを確保してゆくという二つの議論があり，双方にまたがるものですが，どちらかといえば，人々やコミュニティの未来を確かなものにするための図書館活動のほうに重心があるかもしれません。そのようにご理解いただければと存じます。

さて，今回のテーマ「レジリエンス」とは第３回のテーマでした「サステナビリティ」と並んで，今後の世界を考えるための重要な概念であります。サステナビリティについては第３回のシンポジウムで定義しましたから，おさらいではありますが，その際，「サステナビリティとは環境や経済，社会のバランスを考え，世の中全体を，持続可能な状態にしてゆく考え方のこと」と定義していました。皆さんご承知のとおり，私たちの社会は産業革命以来の急速な発展に重ねて，20 世紀以降，経済成長に伴う人口の爆発，環境破壊などを進行させてしまいました。その結果，いまや人類が豊かに生存し続けるための基盤である地球環境には，限界がみえてきました。状況は，持続可能なものか，サステナブルかという問題になってしまいました。また，地球上にはなお多くの人々が決して十分な生存条件を確保できていない状況もあり，そうした部分の人々を誰一人，置いてきぼりにせずに開発も進めてゆくという条件のもとで，われわれの生存を持続可能にしてゆく必要があります。国際連合，国連では，この状況を捉えて，このスライドにあるように 17 の目標を掲げ，2016 年から 2030 年までの 15 年間

にそれを達成しようという計画を立てました。エス・ディー・ジーズ（SDGs：Sustainable Development Goals）という「持続可能な開発目標」です。いまや，サステナブルな社会を構築することは世界的な合意でありまして，図書館界，その代表である国際図書館連盟（IFLA：International Federation of Library Associations and Institutions）もこれに賛同し，教育はもちろんのこと，さまざまな社会課題に関与しているところです。

それに対して，レジリエンスにはまだ耳慣れない感じもありますが，新しい概念といってよいでしょう。現代においては地球環境の急激な変化などもあり，温暖化などによる災害や大混乱を避けるのは難しい状況になっておりまして，サステナビリティとともに，変化への対応というこの概念がさしせまったものとして認識されています。ただし，この概念は非常に広い意味合いがありまして，経済学，生態学，政治学，認知科学，デジタルネットワークなどのさまざまな分野で議論されているものであります。ここに定義を示しておきましたが，上段のものはロックフェラー財団のもので，「個人，コミュニティ，機関，企業組織，及びシステムがどのような種類の慢性的ストレスや急性的ショックを経験しても生き残り，適応し，成長する力」とあります。また，下段のものは，後ほどちょっと触れるゾッリとヒーリー（Andrew Zolli & Ann Marie Healy）のものであります。いずれも個人やシステムの双方のレジリエンスを問題にしており，混乱などに遭遇しても，いいかえれば，新しい状況の変化があっても，それに適応し自己の目的を達成する力，対応できる力をいうものであります。

サステナビリティとレジリエンスは，現代社会において大切な二つの視点です。実はこの両者の関係については，さまざまな議論がありますが，ここでは，この図（図 1）のように，SDGs の目標にバランスをとりつつ，つまりレジリエンスを確保して，歩んでゆく，と捉えておきたいと思います。持続可能な開発目標を目指すなかで，襲いかかるリスクに対して，この綱渡りをしているご婦人のようにバランスを保つ，回復力，レジリエンスが必要だということです。また，サステナブルと思われる均衡点も事態の変化に応じて変動してゆきます。そうした状況に対応できることが不可欠なのであります。

図１　サステナビリティとレジリエンス

次に，図書館界においてこれまでレジリエンスがどのようにとりあげられてきたかを少しみておきます。米国，アメリカでは，ハリケーン・カタリーナやサンディのあと，前者はニューオリンズ，後者はニューヨークを襲ったんですが，都市の復旧の大きな困難が図書館の問題としてとりあげられるようになりました。その意味合いは，ここに書いてある三つの点（①図書館は，政府とともにレジリエンス戦略に与する必要がある，②レジリエンスはコミュニティの関与が不可欠，その際に図書館は大きな役割を果たす，③レジリエンスは，公平性やアクセスという図書館の価値と合致するもの）に由来するものでありますが，少し端折っていえば，図書館はコミュニティのレジリエンスを支えるための格好の社会機関だという捉え方であります。

また，サステナビリティの後，その活動をしていたレベッカ・スミス・オルドリッチ（Rebekkah Smith Aldrich）という方が，小冊子などを著して，この活動を始めております。

もう一つは，これは 2015 年 3 月 14 日から 18 日にかけて仙台で開催された第 3 回国連防災世界会議に成果文書「仙台フレームワーク（仙台防災枠組 2015-2030）」というのがあるのですが，そのなかに「レジリエンス」という表現が出てまいります。具体的には，四つの優先行動のなかに一つ，「レジリエンスのための災害リスクの軽減への投資」というのがあり，それを受けた七つのターゲットでは，「2030 年までに保健や教育施設など重要なインフラへの損害や基本的サービスの破壊を，レジリエ

ンスの開発を通じて，実質的に減らす」というような言葉が出ております。これをうけて IFLA，国際図書館連盟は，災害における図書館の役割というのに焦点をあてて議論を広げております。私は日本国内の図書館関係者の間で，この「仙台フレームワーク」についての反応は，あまり聞いたことがありませんが，ひょっとすると地元の柴崎さんはご存じかもしれません。

さらにもう一つ，これは，アメリカ図書館協会の企画ですが，今年レジリエンスの活動を行う図書館には，助成が行われております。図書館のプログラムでレジリエンスをとりあげていれば，一定の財政的支援があるのです。図書館界では，レジリエンスという問題について，なお必ずしも大きな流れをつくり出しているわけではありませんが，非常に基本的な問題であり見落とせないという認識が深まっているようです。

最後に，ここに挟みましたのは，上に参照したゾッリとヒーリーによって書かれた本のなかにあった指摘です（図 2）。レジリエンスを高めるためにはどのように議論したらよいか，個人，社会，それぞれどのような観点で考えたらよいかということで，彼らの本にはこのスライドに描かれてるような実践例がかなり盛られています。

ちょっと駆け足で解説をいたしましたが，シンポジウムの趣旨として，サステナビリティ，レジリエンスという概念，図書館界でのレジリエンスの動きというのをご紹介いたしました。

早速，お二方のご報告にうつりたいと思います。人々やコミュニティの未来を確かなものにする，レジリエンスに関わる図書館活動であります。まずは，名取市図書館の柴崎さまにご講演をいただきます。

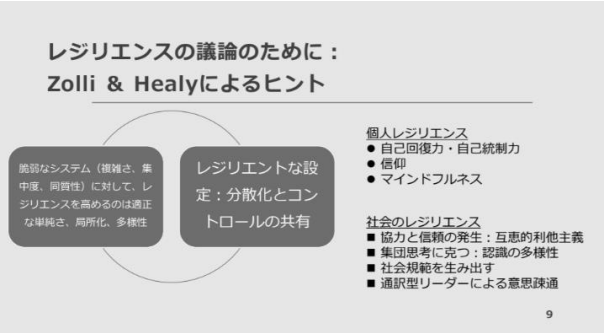


図 2　レジリエンスの議論のために

==========

【講演】「名取市図書館における東日本大震災からの復旧と復興」

（柴崎）

皆さま，こんにちは。私は宮城県名取市図書館の柴崎悦子と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

名取市図書館は，現在は再開発された JR 名取駅前のビルのなかに入っている新しい図書館です。2018 年の 12 月にオープンいたしました。その前は，東日本大震災で図書館が被災しましたので，6 年から 7 年，仮設の建物でずっと運営してきました。今日私は，「名取市図書館における東日本大震災からの復旧と復興」というタイトルでお話しさせていただきますが，私の話は，これまで経験してきたことの単なる事例報告に過ぎないと思います。なぜなら自然災害は一つだけではなく，地震もあれば，洪水などの水害，火山の噴火，台風，山火事，いろいろな種類があって，そこからの立ち直り方も一つではないので，こういうことが起きたら，こうすれば大丈夫ですよ，元通りになりますよ，というような話ではないんですね。なので，私の話も，こういう図書館もあるんだ，とその程度に聞いていただければと思います。それでは，ここからはスライドをみていただきながら話を進めてゆきたいと思います。

まず，簡単に私の住んでいる名取市をご紹介したいと思います。私の住んでいる名取市は，宮城県の中央部，仙台市の南に隣接しています。東は太平洋に面していて，形としては東西に細長くて，海から山まであるという，そういうところです。面積はだいたい 100 平方キロメートルで，人口が 8 万人にちょっと欠けるくらいです。東日本大震災のときは，沿岸部の閖上（ゆりあげ）地区，閖上というこの地名を聞いたことがある方もいらっしゃると思いますが，閖上地区と仙台空港があるその下増田地区というところが，街がなくなるほどの壊滅的な被害を受けています。

これが閖上の震災当日の写真ですね（スライド：閖上地区の被災写真）。小学校の屋上から撮った写真です。こ

れは仙台空港ですね，これも当日の写真です（スライド：仙台空港の被災写真）。名取市の震度はこのときは6強で，津波の高さは9mといわれています。それから死者は，関連死も含めて923人と報告されています。

では，ここからは名取市図書館の，先ほども被災したといいましたけども，被災状況について簡単に説明させていただきます。名取市図書館は海から6km以上離れているので，津波の被害というか，水の被害は全然なかったのですが，建物がとても古かったんですね。この写真は昔の図書館ですね（スライド：旧館の外観写真）。名取市が市になった昭和33年に役所として建てられた建物です。市役所は昭和50年に別なところに移っているので，図書館は51年からこの建物を転用して使っていました。

これは図書館のなかの写真です（スライド：館内の被災の様子・カウンター）。カウンターの後ろの棚が，こんな感じで倒れています。いまみると恐ろしい感じがしますが，幸いこのときは蔵書点検中の休館で，利用者が誰もいなかったのが不幸中の幸いでした。

ちょっと恥ずかしいのですが，みていただきます。これが書庫のなかですが，このようにスチールの棚がみんな倒れました（スライド：館内の被災の様子・閉架書庫）。床固定はしてあって，頭のほうも留めてあったのですが，やはりこのように倒れて本もたくさん落ちました。

それからこれは階段の写真ですが，壁が剥がれ落ちています（スライド：館内の被災の様子・階段）。ここだけではなくてすべての壁が，こんな感じで剥がれ落ちました。

これは，左側は一般開架の写真ですが，足の踏み場がないくらい本が落ちています（スライド：館内の被災の様子・開架フロアと会議室）。会議室，ここは物置にして使ってたところでしたがこんな感じで壊れました。

そして3月19日には応急危険度判定で赤紙が貼られました（スライド：応急危険度判定の赤紙）。「危ないのでなかに入らないでください」という意味の紙です。

ここからは，私が自分で復旧期ってよんでいるのですが，その復旧期についてのお話をしたいと思います。どこからどこまでが復旧期かと考えているかというと，震災があったときから仮設の建物が完成して，震災前とほぼ同じようなサービスができるようになったときまで。2013年3月までが名取市図書館の復旧期だと思っています。

これは復旧期の最後，木造の子ども図書室と，それから，カナダからもらった木造の一般図書室ができあがって2棟並んだところの写真です（スライド：どんぐり子ども図書室・どんぐりアンみんなの図書室外観写真）。

これは2011年3月11日の発災から復旧が終わったところまでの間に，どんな出来事があったのかを表にしたものです（スライド：復旧期の出来事を時系列に並べた表）。3月11日に震災があって建物が壊れて，4月に北海道の石狩市から復旧支援を受けて，5月に臨時開館を始め，10月に南館とよんでいたプレハブの建物を図書館振興財団からもらい，その後に日本ユニセフ協会から「子ども図書室」を，カナダから「どんぐり・アンみんなの図書室」をもらって，そして古い建物を解体して，駐車場の整備が終わったという流れです。

では，ここから写真をみながらどんな過程を踏んできたかを，ちょっと詳しくみていきたいと思います。先ほどいいましたように，2011年4月に北海道の石狩市から復旧の支援をもらいました。震災から2週間くらいたったとき，石狩市民図書館の方から「支援に行きたいんだけど」という電話をもらいました。このときはすごく大変な時期だったので迷いましたが，館内で相談して，結局支援を受けることにしました。そこから準備をして，受け入れ体制をいろいろとつくりながら，4月11日に石狩市の方々を迎えました。

実は，振り返ると，このときが一番苦しかったです。私たちは公務員なので，震災直後は，図書館の仕事よりも，むしろ役所の人間として動かなくてはいけなくて，避難所の運営を担当していたんですね。なので，震災から2週間目っていう時期がものすごくきつかったです。そのような時期でした。石狩市の方には，避難所に行ってもらったり，図書館のなかを片付けてもらったりしました。石狩市さんは3週間ほどいたので，前半と後半とでやってもらうことが違っていたのですが，後半はこのように臨時開館に向けての本の片付けなどの作業をしま

した（スライド：石狩市からの応援の様子・写真４枚）。

その後，先ほどもいったように５月 10 日に臨時開館を始めました。建物のなかに利用者は入れない状態だったので，このように移動図書館車，BM（Bookmobile）の車庫のなかで，毎日パソコンと長机を持って行って貸し出しを行いました（スライド：臨時開館の風景・写真８枚）。建物のなかには，行くところがなかったので，私たち職員は入っていましたが。

あんまり楽しみがなかったので，夏は七夕飾りをしたり，水ヨーヨーを出したりして，ちょっとお祭りのような雰囲気をつくったりもしました。夏の間はよかったのですが，だんだん寒くなって，この後どうしたらいいのかと心配になってきた頃，図書館振興財団からの寄付の話をみつけたので，お願いしたところ，プレハブの小さい 20 坪の建物をもらうことができました。ちょうど寒くなる直前，10 月の半ばに建てることができて，利用者をようやく建物のなかに入れることができました（スライド：南館の外観写真）。

これが建物のなかの様子です（スライド：南館の内観写真）。外でのときは，風が強かったので新聞を出すことができなかったのですが，ようやくこのように落ち着いて新聞を読めるような環境ができました。

その後，日本ユニセフ協会の資金援助で「どんぐり子ども図書室」を建てました。これが竣工したときの写真です（スライド：どんぐり子ども図書室の外観写真）。12 月 24 日にできあがりました。ちょうどクリスマスのときにこのような素敵な木造の建物をもらうことができました。

「どんぐり子ども図書室」を建てるときは，宮城県図書館や saveMLAK が中間支援をしてくれて，日本ユニセフ協会につないでくれたり，東海大学の建築の先生につないでくれたりして，そのおかげでこのようなものができました。この写真は，上の左側はみんなで書架を組み立てている様子です（スライド：「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・上段左）。書架は手作りです。右側は本を運び入れている写真ですね（スライド：「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・上段右）。このようにして 2012 年の１月６日にお披露目をすることができました（スライド：「どんぐり子ども図書室」準備作業とオープニングの写真・下段）。私たちもびっくりしたのですが，オープンの当日はものすごい数の人が並んで待っていてくれまして，こんなにも図書館を待っていてくれる人がいるんだとすごく感激した覚えがあります。

それで，子ども図書室ができあがったので，次は一般の方，大人の方が入れるスペースが欲しいよねって思っていたところ，建築をしてくださった東海大学の先生から「カナダ東北復興プロジェクト」というのを教えていただいて，じゃあそれに手を挙げてみましょうか，となりました。名取市は，カナダと中学生の交流事業を行っていたので，カナダには縁があったものですから，手を挙げましたところうまく採択されました。それから１年ほどかかりましたけども「どんぐり・アンみんなの図書室」という建物ができました。「アン」というのは，『赤毛のアン』からもらいました。私たちは，カナダっていうと単純に『赤毛のアン』をイメージしたので。これがそのとき，できあがったばかりの「みんなの図書室」のなかの様子です（スライド：「どんぐりアンみんなの図書室」外観と内観写真）。ここの棚もみんなで手作りしました。

このように「子ども図書室」のときは全国から延べ 70 名，「みんなの図書室」，このときはさらに多くの，延べ 250 名のボランティアの方々が集まってくれて，オープンに向けて準備をしてもらいました（スライド：「どんぐりアンみんなの図書室」準備作業とオープニングの写真・上段）。そうして 2012 年１月 18 日にようやくオープンすることができました。ものすごく寒い日でした（スライド：「どんぐりアンみんなの図書室」準備作業とオープニングの写真・下段）。ちょっとこの写真では寒さが伝わりませんが，とにかくすごく寒い日でしたが，外で式典をさせていただきました。

これは先ほどもみていただいた写真と同じですけども，手前にあるのが「子ども図書室」で，奥にあるのが「みんなの図書室」です（スライド：どんぐり子ども図書室の外観写真）。駐車場も整備し終わって，古い図書館も解体し終わったというときの写真です。

復旧期といっているのはここまでで，震災から 2 年です。2 年はいま思うと本当に短い。2 年間で仮設の建物をつくり，サービスも震災前とほぼ同じようにできるようになりました。とりあえず「よかったよかった」ということで，前と同じように，また利用者の方に戻ってきていただきたいと思いながら運営していました。

これは復興期の最後，完成した名取市図書館の写真です（スライド：名取駅東口の複合ビルの写真）。再開発された駅前に，このように新しい図書館ができました。2018 年の 12 月です。

これは復興期の出来事を表にしたものです（スライド：復興期の出来事を時系列に並べた表）。図書館サービスの完全再開が平成 25 年 4 月ではなく 5 月となっているのは，4 月にはまだ職員が完全に戻ってきていなかったものですから。開館時間も元通りになって，完全に前と同じようになったのが 5 月でした。そして，先ほどもいったように，とりあえずは「前に来てくださっていた方に戻ってきてもらおう」ということで動き出したわけです。

その年，平成 25 年の年度末に，「復興交付金を活用して名取駅前の再開発をする」という話が出ました。名取市は，閖上地区など沿岸部の津波被災が当然大きかったのですが，名取駅前のほうは，地震被害がすごく大きくて，古くからのお店はやめてしまったり，更地にしてしまったりと，かなり元気をなくしていました。そこに元気を取り戻そうということで，「復興交付金を活用して再開発をしましょう」という話が持ち上がったのです。2013 年度末くらいです。

表の 2 段目，2014 年，平成 26 年の 11 月に「新名取市図書館施設整備検討委員会発足」とありますが，今度は「新しい図書館つくる」という話が進み，市民や学識経験者の方々を入れて 10 人ほどの委員会を立ち上げました。そして，その年の 12 月に，『新名取市図書館整備基本計画』の改訂版を策定しました。実は名取市では，震災前から駅前に新しい図書館をつくるという計画がありました。駅前を再開発して移転するという計画が平成 20 年のときからあったので，すでに一度計画をつくっていたんですね。ただ震災を挟んでしまって，さらに何年も過ぎていましたので，少し見直しをして新たにつくったのがこの改定版です。

そして，平成 27 年には内装設計を行いました。その後，1 年ほど間が空きましたが，平成 29 年に本体工事の着手，内装工事の着手。それから平成 30 年には友の会が設立，平成 30 年の 10 月竣工，12 月にオープンという，このような過程をたどってきました。

ではここで，現在の図書館を，簡単にご紹介いたします（スライド：名取市図書館の紹介）。面積は約 3,000 ㎡，収蔵能力は 30 万冊で，現在は 21 万冊ほどあります。座席数は約 250 席です。開館時間は，火曜から金曜は朝 9 時から夜の 7 時まで，土日は 6 時までです。ここに書かれていませんが，実は早朝の開館も行っていまして，朝 7 時 30 分から，一部のエリア，「カフェコーナー」とそこから続く「新聞・雑誌コーナー」は朝 7 時 30 分から開けています。ただいまはコロナ禍で，カフェの営業時間が短縮されているので，早朝開館はお休みしています。普通のときは 7 時半から開いているので，通勤前にちょっと図書館に寄って，コーヒーを飲んだり，モーニングを食べたり，新聞読んだりして，それから出勤されるという人もいます。

この写真は館内の様子です（スライド：2 階部分の館内写真 8 枚）。左上は入口ですね。駅の改札からまっすぐペデストリアンデッキを歩いてくるとここに着きます。1 分もかからないので，とても便利なところです。なかに入るとすぐ左手にカフェコーナーがあります。下段の写真は，入口の自動ドアから入ってなかをみたところですね。

奥に行くと児童コーナーになっていて，「おはなしのへや」などもあります。この「おはなしのへや」は結構広くて，おはなし会をゆったりとした感じで開催することができます。それから CD・DVD のコーナー，この近未来的な丸椅子がブースになります。ここに座って観ていただきます。さらにバックヤードにはこのようにボランティアルームもあって，ボランティアさんたちが常時活動しています。

ビルの 2 階 3 階が図書館なのですが，図書館の上の階はまた雰囲気がガラッと変わって，床はこのようなカー

ペットでシックな感じになっています（スライド：3 階部分の館内写真 4 枚）。2 階 3 階と二つのフロアを使っているので，二つのフロアそれぞれにコンセプトがあります。2 階は「にぎやかなフロア」というコンセプトで，子どもや赤ちゃんが泣いたりしても大丈夫，カフェでお話ししても大丈夫ですよ，と。また床はフローリングで，暖かい雰囲気をだしています。静かに過ごしたい人は上へどうぞ，ということで「静寂のフロア」というコンセプトになっています。フロアの真ん中にこのようなアイランド型のカウンターがあります。奥には情報発信コーナー「名取の宝ばこ」というのがありますが，これは郷土資料を置いているところです。

設計で大事にした基本計画のメインコンセプトが，この三つのキーワード「やすらぎ・つどい・ひろがる」です（スライド：『新名取市図書館整備基本計画』メインコンセプト）。この三つのキーワードを大切にしながら設計しました。

これは図書館サービスの基本方針です（スライド：図書館サービスの基本方針）。先ほどの三つのキーワードはもちろん大事にしながら，基本方針，この五つの方針も大切にしました。このなかには，市民とか地域，そのような言葉を入れています。市民の生涯にわたる自主的な学習を支える図書館。地域の課題解決を支援し，まちづくりを支える図書館。学校・家庭・地域を結び，地域の教育力向上を支える図書館。地域文化を大切にし，新たな文化の創造を支える図書館。情報と人，人と人とをつなぎ市民と共に歩む図書館。市民や地域ということを特に大事に考えました。

これはワークショップの写真になりますね（スライド：平成 26 年度「ライブラリーミーティング」の写真 4 枚）。上の 2 枚は，最初に行った「ライブラリーミーティング・ヤングセッション」というワークショップです。2014 年の 9 月に開催しました。高校生，大学生の若い人たちを対象にしたワークショップでしたが，このときのテーマは「私たちが還りたくなる図書館」。進学とか就職で，いったん名取を出て仙台とか東京などいっても，戻ってきたときにまた「図書館にいってみたいな」っていう，そんな図書館ってどういう図書館だろうということを，若い人たちに考えてもらいました。このときには本当におもしろいアイディアをたくさん出してもらいましたが，そのなかのいくつかはいまの図書館に反映されています。

下の写真は「出張ライブラリーミーティング」というのを行ったときの写真です。2015 年の 2 月に 1 ヶ月ほどかけて，名取市内 19 ヶ所でライブラリーミーティングを開催しました。公民館が 10 館と，そのときはまだ仮設住宅がありましたので，仮設の集会所。そういうところを回って，皆さんとお茶を飲みながら，図書館についていろいろ話し合いをしました。このときには，考えさせられることがすごくたくさんありました。公民館に集まってくださった方は，「名取市の図書館が新しくなりますよ」って呼びかけて来てもらったのですが，それぞれに皆さん意識の高い方ばかりで，厳しいご意見も頂戴しましたが，図書館の建設に関してものすごく前向きなご意見をたくさんいただきました。反対に，仮設住宅で行ったときには，たまたまそこにいた方に集まってもらったという形だったので，図書館を知らないという方がほとんどだったんです。図書館のなかにばかりいると他がみえなくなって，みんな図書館を使っているんだ，と錯覚していたところがあったと思うのですが，冷静によーく考えてみると，名取市民約 8 万人いますけども，実際使ってる方って 1 割とか 2 割とか，本当に少ないはずなんです。ほとんどの方，多くの方は図書館を使わずに生活をしている。図書館というものをよく知らないという方がたくさんいるんです。特に仮設に住んでいる方は，図書館を全然知らない人が多かった。「図書館って難しい本しかないんでしょ。」とか，雑誌があるっていうことをお話ししただけでびっくりされたり，ただで本を借りられるっていうことをいっただけで，「え？そうなの」っていわれたり。「あー，そうなんだ」って改めてそのとき感じました。

そのようなワークショップもやりながら，新しい図書館ができる前年度に友の会の立ち上げっていうのを視野に入れたライブラリーミーティングを開催しました。「名取市図書館と協働してなにができるかを考えてみましょう」ということで行ったのが，このライブラリーミーテ

ィングです（スライド：平成 29 年度「ライブラリーミーティング」）。3 回開催しましたが，たくさんの方が参加してくださいました。この 3 回のライブラリーミーティングが終わったあと，このワークショップに参加してくれた方のうちの何人かが発起人となって，友の会設立の準備会を立ち上げて，数ヶ月かけて設立に向けての準備を行い， 5 月に正式に友の会が発足しました。このときも，参加された方もそうですが，私も本当にすごくたくさんのことを学びました。

このようなことを行いながら，2018 年の 12 月 19 日に新しい名取市図書館がオープンしました（スライド：新図書館オープン記念式典の写真）。ビルのグランドオープンに合わせて図書館を開館するということでしたので，10 月 31 日に引渡しを受けてから，2 ヶ月弱で開館しなくてはいけませんでした。ものすごく大変でしたが，頑張ってやりました。オープンの日はすごくいい日で，天気がとてもよかった，ということが思い出されます。

この辺でまとめに入らなくてはいけないのですが。まとめとして，「震災からの復旧・復興を後押ししたもの」と書きましたが，ちょっとうまい言葉がみつからなくて。復旧・復興のプロセスはこれまでご紹介したとおりなのですが，そのベースとなったもの，私たちのやってきたことを後押ししてくれたものっていうのがあって，そのベースがあって，いろいろなことが実現してきたわけです。それで，そのベースとは一体なんなのだろう，と考えて書き出してみたのが，この三つです（スライド：震災からの復旧・復興を後押ししたもの）。「柔軟で，かつ楽観的，希望的な考え方」，「新たなつながりとコミュニティ形成」，「目標を達成したときの喜び」。漠然としているので，一つ一つなぜこのように思ったのかをお話しします。

まず，「柔軟で，かつ楽観的・希望的な考え方」。いま振り返ると，当時，私たちは強いこだわりというものをあまりもっていなかったような気がしています。直感的にいい話だと思えばすぐに飛びついたし，あるいは「もうこれダメ」と思ったらすぐに諦めました。「楽観的・希望的」と書きましたけれども，それは私たち職員がみんなそんなキャラクターだったからなのか，それとも，もう建物を失ってしまうっていう，どん底までいってしまったので，あとは上をみるしかないと思ってそのようになったのかわかりませんが。結果的にすごく楽観的だったなと思います。

これまでお話しした事例のなかにはなかったのですが，一つご紹介したいと思うことがあります。これは私が「名取市図書館の復興の歩み」みたいなお話をさせてもらうときに，あんまり言ってこなかった話で。どちらかというと「建物ができました」，「新しい建物をつくってこうなりました」，ということばかりで，あまり話したことがなかったことなのですが，実は「どんぐり子ども図書室」をつくっている最中，本当に建てている最中の 11 月に，「図書館絆まつり」というすごく大きなお祭りを開催しているのです。そのときは震災から 6 ヶ月とか 7 ヶ月とかというときなんですが，そのときまでに，もうすでにいろんな方からものすごくたくさんの支援をもらったので，そういう支援してくれた人たちに感謝しましょう，感謝の意味を込めたお祭りを開催しましょう，と行ったものでした。支援してくれた方に「お祭りするから一緒にやりませんか？」っていったら，皆さんすごく喜んで，本当に遠いところからも駆けつけてくれました。例えば，札幌からは在アメリカ領事館の職員さんが来てくれて，子どもたちに英語でおはなし会してくれたりだとか，石狩市の飲食店グループの人たちが来て，石狩鍋をつくって振舞ってくれたりだとか。それから，一番大きかったのは，東京 FM の方々が女優の室井滋さんに声をかけて呼んできてくれて，室井滋さんのおはなし会をすることができたんですね。あとは，東京のほうからアニマシオンをやっている方も来てくれましたね。そんなふうに遠くから来てくれた方もいましたが，同時に名取市内で図書館を想って活動しているお話のグループの方々も参加して，おはなし会や工作をしたりと，2 日間かけて，市の文化会館をほぼ借り切って開催しました。2 日間で延べ 1,200 人ぐらいの方が来た大きなお祭りを，「どんぐり子ども図書室」をつくっているときにやった，そんなことがありました。

このお祭り，実は「最初にやりたい」といってくれたのは石狩市の図書館でした。そのとき，このアイデアに

すぐ飛び乗ったっていうのも，私たちはきっと楽観的だったんでしょうね。どうにかなるだろうという考えだったから，このようなお祭りを成功させることができたんだろうなと思います。この成功体験が，後々の私たちの活動に影響を及ぼしてくれたと思っています。この大きなお祭りが成功したということが自信になって，「子ども図書室」，カナダからの「みんなの図書室」につながっていったのです。

次の「新たなつながりとコミュニティの形成」というのは，もちろんボランティアのことをいっています。全国からたくさんのボランティアが来てくれて，日本全国にもたくさんのつながりが生まれました。全国あちこちで活動している図書館関係者の人とつながることができたので，新しい図書館をつくるとき，つながりができた方々からたくさん協力をもらうことができました。すごくありがたかったです。また，名取市以外の全国の方だけではなく，名取市民の方々との新たなつながりというのもできました。これはどういうことかというと，市民ボランティアさんのことです。先ほど友の会ができたという話をしましたが，この友の会，もともとは，震災後に私たち職員が少なくなって大変だったときに，自然発生的に集まってくださった方々が始まりなんです。その自然発生的に集まってくれたボランティアの皆さんがグループになって，それがいまの友の会に結びついているのです。そういうわけで，「コミュニティの形成」と書いています。

「目標を達成したときの喜び」というのは，一つ一つのことを達成したときの喜びがモチベーションになって，復旧・復興してきたと思っているんです。実は先日，永田先生から，「復興を進める上での六つのポイント」というのをご紹介していただきました。私この六つのポイントをみせていただいたときに，共感というか，ものすごく実感するものがありました。どういうものだったのかというと，「どこに行っても通用する処方箋はない」，もう本当にそのとおりだと思いました。それから「災害が社会のトレンドを加速している」，「復興が従前の問題を深刻化させて噴出させる」，「復興の過程でコミュニティの力をどう引き出せるか」，それから「復興で用いられた政策は過去に使ったことのあるもの」，「復興に必要な四つの目，＋α，バランス感覚」。私，すごく納得できました。冒頭でもいったように，私がこれまでに経験してきたことは，同じようにやったからといって，元通りになれるとか，復興できるというものではないんです。もしこれから，なにかに備えるというときには，この六つのポイント（世界の災害復興事例からみた「災害復興の６法則」（加藤孝明））っていうのも，知識として押さえておくことも必要なんじゃないかな，ということを感じました。ということで，私の今日の話はここでおしまいにさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

==========

（永田）

ありがとうございました。それでは次に鳥取県立図書館の三田さんにお話を承ろうと思います。ご用意ください。質問等はチャットに入れていただくとありがたいです。

【講演】「情報支援とレジリエンス　～鳥取県立図書館の取り組みから」

（三田）

皆さま，こんにちは。鳥取県立図書館の三田と申します。よろしくお願いいたします。私からは，「情報支援とレジリエンス」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。

まずこちらのスライド（図３）ですが，鳥取県立図書館のサービスについて簡単に表にしたものになっております。公共図書館ですので，小さなお子さまから，そして高齢の方まで，利用の対象というのは大変幅が広いということになります。例えば小さなお子さんであれば，児童サービスがありますし，また中高生の方であれば青少年サービス，高齢の方であれば高齢者サービスがあります。また，子育て世代には子育て応援サービスというのがあります。利用者の年齢に対応したサービスではなく，課題解決に対応したサービスというふうにみれば，

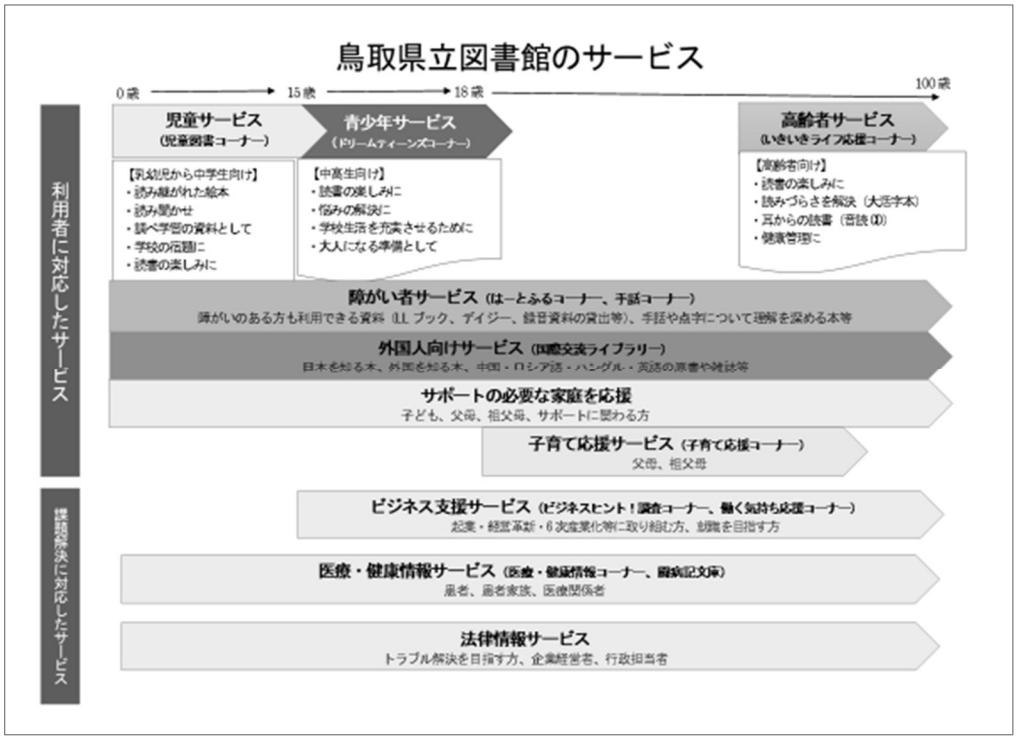


図３　鳥取県立図書館のサービス

ビジネス支援サービス，医療・健康情報サービス，法律情報サービスといったサービスもあります。本日はこういったもののなかからピックアップし，事例を紹介させていただきます。

今回テーマをいただいたときに，（いろいろと本をみながら）ちょっと気になった文章がありましたので，皆さまにご紹介をさせていただきたいと思います。これは熊谷晋一郎先生という小児科医の先生が書かれた文章のなかの一文です。熊谷先生は，生後間もなく脳性麻痺により手足が不自由でいらっしゃって，現在は当事者研究に取り組んでいらっしゃる先生です。この先生が，自立ということについて，このような文章を書いていらっしゃいます。「多くの人が自立と呼んでいる状況というのは，何物にも依存していない，そういった状況ではなく，依存先を増やすことで，一つ一つの依存先への依存度が小さくなる。そしてあたかも何物にも依存していないかのような幻想を持っている状況なのである」（熊谷晋一郎「第４章　依存先の分散としての自立」『知の生態学的転回　第２巻』東京大学出版，2013）ということです。自立ということを考えたときに，依存先を増やすことなんだということが，図書館にもあてはまるんじゃないかなと，勝手に私のほうで理解をしたところなんです。

おそらく私たちはなにか困難に直面したときには，乗り越えるために多様な選択肢を必要とするということはあるように思います。この「選択肢」の部分が，図書館を使っていただく，そういうことにも置き換えられるんじゃないかなと考えました。

そこでですが，図書館サービスのなかで重要な機能であるレファレンスということについて，少し考えていきたいと思います。事例を紹介します。

「図書館で夢を実現しました大賞」というのは，鳥取県立図書館で平成25年度から企画，実施をしているものです。2年おきに平成25年度，平成27年度，平成29年度，令和元年度に実施をしておりまして，図書館のビジネス支援機能，例えばレファレンスを使うとか，あと図書館で開催されているセミナーに参加をする，また相談会に参加をする，といった場面を利用していただいて，起業，商品開発，技術開発，経営改善などに成功した事例を募集するというものです。応募いただいた方のなかから最優秀賞・優秀賞を決定させていただきまして，そ

図４　図書館で夢を実現しました大賞：第２回（左），第４回（右）最優秀賞

の方々には，その成功までのストーリーを漫画にしてプレゼントしよう，そういった企画になっております。これまでの受賞作品については，鳥取県立図書館のホームページ（https://www.library.pref.tottori.jp/business/cat/cat6/）に掲載しています。

そのなかから今回二つの事例を紹介させていただいております（図４）。まず，こちらの左側の事例ですが，（https://www.library.pref.tottori.jp/business/earthway_s.pdf）生ゴミ処理機の開発をされている方の事例です。この方は，20 年ぐらい改良を重ねて高性能の生ゴミ処理機を製造されています。高性能だということもありまして金額もかなり高い。この生ゴミ処理機をどういうふうに販売していこうかと販路について悩んでいらっしゃるという状況です。ご家族の方がたまたま図書館を訪ねてこられて，そのときに図書館でビジネス支援をやっているらしいとお聞きになる。そして，半信半疑ではあるけれども相談をしてみようということですね，図書館の利用が始まります。そのときに対応した図書館の司書が家庭ゴミの減量に取り組む自治体の情報をインターネットで探すなどして，この方にご覧いただいた。ちょうどそういった情報がほしかったということで非常に喜んでいただいて，次の販路開拓の一歩を踏み出していかれる，という流れになります。たまたまですが，そのときに，県立図書館にテレビ取材の依頼もきていまして，出演をお願いしたら「わかりました」と快諾いただきました。全国ネットのテレビだったもので，すごく反響があって，販路がさらに拡大してゆくという流れもありました。

そして，右側の事例は，コーヒー豆の販売（http://www.library.pref.tottori.jp/business/02.pdf）をされていたのですが，豆以外の商品はないですかというような問い合わせを受けて，そこから商品開発でもしてみようかなと行動を起こされます。そして図書館にお越しになって，ニューヨークで流行しているクラフトチョコレートの情報を得られます。カカオ豆を自家焙煎して砕いて，砂糖を加え成形まで行う Bean to bar というもののようで

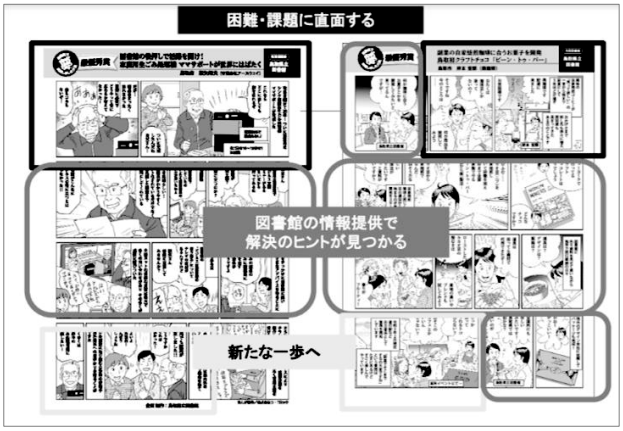


図５　課題，解決のヒント，新たな一歩へ

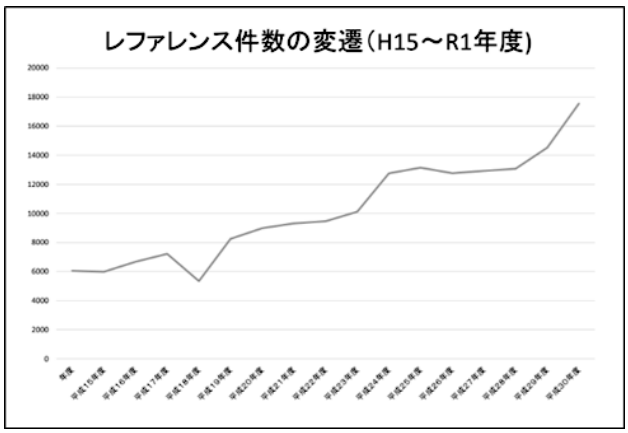


図６　レファレンス件数の変遷

すが，それについてすごく興味をもたれます。製造方法から，どんな道具が必要なのか，あとパッケージデザインどうしよう，というような話にどんどん進んでゆくわけですが，最終的には商品化に結びついた，という事例となっております。おそらくこういった利用者の方は，どちらの図書館にもいらっしゃるものだと思います。

いまの話を少し整理してみると（図 5），まずなにか困難や課題に直面する。それを解決するために，この方は図書館を使っていただいた，そのときに図書館の情報提供で解決のヒントがみつかり，そして新たな一歩に進んでいく。これがレファレンスで満足していただいた結果なのかなと私自身は感じています。

当館でも年間 1 万 8,000 件近いレファレンスを受けておりますけれども，レファレンスの件数の変遷をたどってみました（図 6）。平成 15 年から令和元年度の統計をとってみると，最初すごく少なかったのが近年増えてきているというような現状をみることができます。

ではそこで，なぜレファレンスの件数が増えたのかと考えると，おそらく私が思うには，きっかけは，課題解決型サービスを始めたことが原因の一つではないかなと思っています。平成 16 年度にはビジネス支援サービスを始めました。平成 18 年度には，医療・健康情報サービス，法律情報サービスといった課題解決型サービスをスタートさせてきております。そのときの私たちの課題意識として，住民の方，県民の方々に図書館の機能は十分に理解して使ってもらえているだろうか，という思いがありました。つまりは，本が好きな人っていうのは図書館を利用してくださっているのですが，実は図書館の機能ってそれだけではないということは案外知られてないんじゃないかなと。例えば，図書館に読みたい本がなかったとしても，リクエストができるということや，また，市町村の図書館の利用者の方であっても，県立図書館の本が利用できるというような，いわゆる基本だと思っているようなことすら，知られてない可能性もあります。鳥取県立図書館では県内の市町村立図書館に依頼を受けてから 2 日程度で本が届く仕組みっていうのをもっています。そういうことも強みだと思うのですが，そういうことをもっと知ってもらいたいなと思っておりました。そしてもう一つは，やはりレファレンスです。課題解決型サービスを始めていく上で，やはり図書館の武器はレファレンス。「もっと聞いてください」「使ってください」と PR していかなくてはいけないなとも思っていました。

そこで，情報を求める人が欲しい情報を得られているのかが，一番大きな課題であり，クリアしなくてはいけない問題だと感じています。

ここでちょっと最近のデータではありますけれども，鳥取県の現状をお示ししたいと思います（図 7）。現在のところ，人口 55 万人です。20 代から 50 代という年齢に注目したところ，だいたい人口の 43%を占めています。じゃあ 65 歳以上はどうかというと約 32%を占めています。実はこの 20 代から 50 代というのは，例えばですね，ビジネス支援サービスということを考える上では，だいたい中心となってくる年代，ターゲット層にあたる

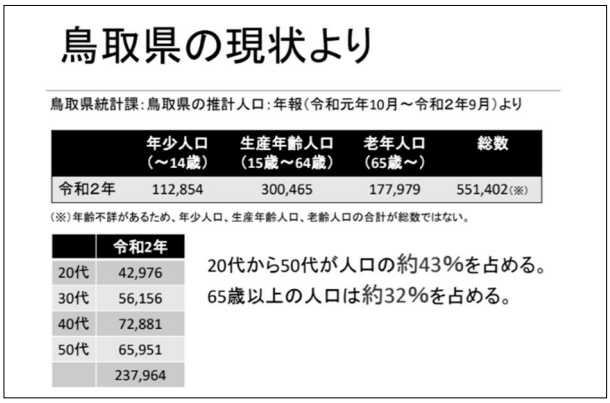


図７　鳥取県の現状

かなと考えます。こういう世代の方々に図書館として本当にアプローチできているのだろうか。どういう情報が必要とされていて，その情報を提供できているか，ということを改めて考える機会になりました。それは課題解決型サービスをスタートさせる上では，この年齢構成も考えて（参考にして）スタートさせたところでもあります。

働く人たちはどうやって情報を集めているのだろうと思い，探してみました。例えば，『中小企業経営者の経営情報の収集・活用に関する実態調査』があります。2013年に中小企業基盤整備機構によって調査をされたものです。「経営に必要な情報を誰から取得していますか」という問いに対して，同業者，取引先の担当者，顧客，自分で調べるというような項目が挙がってきています。年間売上高が大きくなるにつれて，従業員，または自分で調べるというような項目が増加してきているというような傾向がみられます。では，「どのようなメディアから情報収集しているか」というと，新聞・テレビ・雑誌・ホームページというようなものが挙がってくる。日常的に業務を通じて入ってくる情報が大変大きなウエイトを占めていること，新たな経営手段を求めて情報収集をされる場合，異業種の交流会に参加するなど，そういう方法で情報を集められているということ。また新聞や雑誌，書籍という紙媒体でのメディア活用というのは，年間売上高が，規模が大きくなるにつれて活用が増えてゆく傾向にある。ということは年間売上がそう多くない企業様にとっては，そこまでの情報収集はできていないのかもしれないなというふうに，ここからも感じることがありました。

そして平成28年度には，『中小企業・小規模事業者の成長に向けた事業戦略等に関する調査』がありまして，このなかでは，「製品サービスにおける市場ニーズの把握に向けた取り組みとして，最も効果が高かった取り組みはなんですか」という問いがあります。そのなかで，テレビ，新聞，業界専門誌，インターネットによる情報収集，官公庁や業界団体，支援機関等が発表する統計レポートによる分析がとても効果が高かったと回答された方は全体の約18%を占めています。これを多いとみるのか，少ないとみるのか，ということかなとは思いますが，これらの情報は十分に図書館でもサポートできるものだと思います。むしろ，図書館を活用していただければ，もっとたくさんの情報を提供できたのかもしれないと思うこともあります。

これらの調査から，やはり潜在的なニーズはありそうだなと，文献を調べる，情報を調べる，図書館ができることはまだまだあるんじゃないかなと思いました。ただ，「図書館をどんどん使ってください」といったとしても，利用される方には具体的なイメージがまったくわかないということもあると思います。そこで始めたのが「図書館から情報を発信していく」という視点です。待っていても来ていただけないのなら，発信をしてゆきましょう，出かけてゆきましょう，という視点です。

ターゲットをある程度明確にして，情報を見える化してみようという取り組みですね。

（館内には）「働く気持ち応援コーナー」がありますが，リーマンショックでリストラされ，急に職を失うことが社会問題となりました。この時期につくったものになります。例えば，急に職を失ったときに，資格を取得して，次の職を目指そうという方のために資格取得のための問題集を入れました。また，面接の受け方，ビジネスマナー，賃金について，といったような，働くことをテーマにした24のテーマを設定して本を集めています。

また，「ビジネスヒント！調査コーナー」は，おそらく公共図書館のイメージを変える棚だと私は思っています。こちらに並んでいるのは，東京商工リサーチである

とか，帝国データバンクといった信用調査会社が出している会社情報ですね。また，起業しようとした場合には市場動向を調べることがよくあるのですが，いろんな業界の市場動向を調べられるような専門的な資料も購入するように意識をしています。また，未来予測，1 冊 20 万円程度する資料もありますが，そういったものも購入しております。1 冊 10 万円以上の市場調査レポートなどもよく利用される資料となっています。なかなか一般の書店では並ばない，そういった資料がここに来ていただくとみていただける，もしくは借りていただけるというような状況をつくっています。レファレンスのことも少し触れたのですが，（こういうコーナーをつくってからだと思います）こういう本があるのなら，こういう相談をしてみてもいいかもと思われる方もあるようで，質問も専門的なもの，市場動向を調べたいというようなご相談をいただくようになってきました。

一番最近につくった棚，今年つくったものですけれども，新型コロナウイルスの影響を受けた県民の皆さまが活用できる助成制度，また相談事業を紹介したパンフレット，これらはすべてインターネットで紹介されていたりするものなんですが，インターネットに上がっていてもなかなか情報にたどり着けない，そこにそういう情報があるとはわからないという方もいらっしゃると思いましたので，紙で印刷したものを棚に設置しました。

ちょっとまた変わった棚もつくりました。「とリサーチギャラリー」（図 8）というものですけれども，図書館のカウンターにはいろんな相談が寄せられます。その相談事例を紹介したものです。この「とリサーチ」という名前は，県民の皆さんと図書館との共同作業であるレファレンス，アイディアとリサーチの出会いという意味を込めまして，「とリサーチ」という名前をつけました。ここには，いろんな相談事例をわかりやすくみていただけたらということで事例を紹介しています。「ハヤブサイダー」という商品ですが，鳥取県の特産の二十世紀梨の果汁を使ったサイダーがあります。「地サイダー」に関する本をお探しで，図書館に来られて，新聞記事を探されたり清涼飲料水の業界情報を調べられたりして，この商品をつくられました。「隼（はやぶさ）」というのは実は鳥

図 8　とリサーチギャラリー

取県のなかにある小さな地域ですが，若桜（わかさ）鉄道に隼駅という駅があります。この「はやぶさ」は，バイクとか詳しい方だとスズキのバイクで「ハヤブサ」というのがあると思いますが，そのスズキのバイクのハヤブサの聖地ともいわれています。年に 1 回その隼駅にハヤブサが集結するお祭りがありまして，「隼駅まつり」っていうのがあるんですね。今年度は新型コロナのために実施はできなかったようですが，昨年度で第 11 回目を数えておりまして，なんと 2,300 台のバイクが集まった。この隼駅とコラボした，このご当地サイダーということになります。

そのように申し上げると，「ちょっとこんなことで聞けないかも」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが，あの棚のなかには，例えば「カラスが石鹸を食べるって本当?」という質問もありましたよとか，いろんな質問に対してお答えできますのでどんどんご相談くださいということで，いろんな事例を紹介させていただいています。

そして，次に図書館の機能を紹介するということですが，先ほども少し触れたのですが，やはり図書館では常識だと思っていることでもまだまだ知られてない，意外と図書館の機能をご存じないということが多いんじゃないかと思います。例えばレファレンスもそうですが相互貸借，文献複写といったことも知られていないと感じています。そこで，図書館で待っているだけじゃなくて図書館から飛び出してみましょうということで出かけて行って図書館を PR するという活動をしています。商工会議所が主催されている「創業塾」。起業を目指す方，創業を

目指す方が集まって勉強される，そういった機会なんですが，ここに図書館から出向いて行きました。例えば事業計画をつくるときには必ず業界動向の分析が必要となると思います。そこで事前に創業されるテーマ，予定をされているテーマをお聞きして，参加者に合った本を持って行くなどしています。当館で契約をしているデータベースは，この場で検索をしてプリントアウトできるようにパソコンも持って行きました。例えばですね，商圏分析，エリアマーケットの分析ができるデータベースと契約をしております。「市場情報評価ナビ MieNa（ミーナ)」というデータベースがあるのですが，このデータベースを使えるように，一緒に（パソコンを）持って行っております。ここでプリントアウトができるようにプリンターも持参しています。本のコピーも図書館と同じようにすることができます。プリントアウトしたらお渡しするのですが，お金をいただかなくてはいけませんので，レジも持って出かけて行って図書館の機能も説明させていただきます。質問にもお答えして，この創業塾のなかで人間関係をつくって，また後日相談されたいということであれば，ぜひまたご連絡くださいとご案内をしています。

レファレンスは（図書館では相談）カウンターでお受けしております。図書館の資料を使うとか，インターネットデータベースを使うということももちろんありますが，もう一歩踏み込んで，アドバイザーの方，専門機関の方を紹介するということもあります。関係機関との連携というのを強化すること，つながるということは非常に重要だと思っています。図書館に来ていただいた方に，図書館で専門家による相談会も受けていただけるように，月 1 回は特許相談会，中小企業診断士による経営相談，日本政策金融公庫による融資相談などの相談会も実施をさせていただいています。このような活動を続けてゆくなかで，図書館のレファレンスは，先ほども少し触れましたが，内容が変わってきた，高度化したのかなと思うこともあります。

次に，対象を変えた事例を紹介させていただきたいと思います。こちらの調査は 3 年に一度実施をされているものですが，全国の医療施設を利用する患者を対象に，医療に対する満足度を調査するというものです。平成 20 年の調査では病院の選択で情報が「必要であった」と回答した患者さんのうち，情報が「入手できた」と回答した患者さんは実は 2 割以下っていう結果が出ています。お医者さまなどの専門性や，経歴についての情報を調べたかった方が 48.5%，そのうち入手できた方は 14.7%，検査や治療方法の詳細について情報が欲しかった方が 47.7%，そのなかで入手できた方は 13.3%というのが実情でした。こういう状況であったというのは，私はかなりショッキングに感じました。そして平成 29 年にも調査は行われておりますが，同じ項目がありません。「普段，医療機関にかかるときの情報の入手先」について尋ねている問いがありましたので紹介させていただきます。「情報入手している」という方，外来の患者さんで 77.7%，入院の患者さんでは 82.6%で，どこから情報を入手しているかというと圧倒的に，「家族，知人，友人の口コミ」が多いというのが現状です。すべての世代でだいたい 7 割程度が口コミで病院を選ばれているということになります。65 歳未満の方は，インターネット情報を活用されており，65 歳以上の方は窓口の情報，相談窓口による情報によって医療機関を選択されているというような状況がみえてきます。先ほどみていただいた平成 20 年，そして平成 29 年と調査がありますけれども，こういった調査をみても，医療機関にかかるときも，やはりなにかしらの情報というのは皆さん求められていることはわかります。これからまた治療に進んでゆけば，また更なる情報を欲しいと思われる方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。

これは鳥取県立図書館のなかの「医療・健康情報コーナー」を撮影したものです（図 9)。インフォームド・コンセント，セカンド・オピニオンということがいわれますが，本当に自ら情報を入手して評価判断するための情報というものは，皆さんが十分に得られているのかは（先に紹介した）調査からも感じることがあります。こちらのコーナーのなかには，入門書，病気についてわかりやすく書かれた本というのはもちろんありますが，コ・メディカルの方，医療従事者の方が使っていただける資料まで集めるように配慮しています。現在は看護師

さんの利用も非常に多くなっています。また治療・診療について考える際に重要な資料だと思います，診療ガイドラインも積極的に集めるようにしています。医療情報については古い情報というのは特に気をつけて除架をするようにしていまして，だいたい出版後，5 年程度経ったものは書庫に下ろしています。カウンターにいるといろんな質問を受けるんですけれども，そのなかには，「孫が病気になった，その病名を聞いて調べに来た」という方もいらっしゃいます。また，「治療中の病気がある，術後の検査でちょっと気になることをいわれたので，図書館に調べに来た」というような方もいらっしゃいます。

この（医療・健康情報コーナーの）奥には「闘病記文庫コーナー」を設置しております。闘病記も医学文献と同様に重要な情報源だと思います。同じ病気と闘う患者さん，また患者さんの家族の方々が書かれた手記がこちらにあります。

「闘病記で生きる力を！」というパンフレットを当館で作成して配布をしているのですが，これは脳卒中で倒れて左半身に麻痺が残った方が気力を失っていらっしゃった。その方が闘病記に出会って前向きになって，生きる希望を得られた。これは実際に図書館に寄せていただいたエピソードなんですが，その方のストーリーを漫画にさせていただいて配らせていただいております。こちらはつくってから，おそらく 10 年ぐらい経ってきていると思います。今年，新しいエピソードを募集するという企画も始めているところです。

図 9　医療・健康情報コーナー

いまご紹介したようなもの以外，医療情報や闘病記を，図書館でしっかり情報提供してゆくということはもちろん大切なんですが，やはり連携もこの分野でも必要だなと思っています。昨年と今年と新型コロナの影響もありまして，担当者会議（医療情報サービス担当者会議というのを開催しているんですが）も実施ができてないのですが，こういう会議を県内でもつ機会があります。鳥取県内では医学部のある大学が一つあり，鳥取大学。病院図書室は，鳥取県内には二つの県立病院があります。そこには図書館の司書がいます。そして，もう一つ鳥取市立病院という病院がありますが，こちらの図書室にも司書がいます。この司書がいる三つの病院，公共図書館の関係者が集まっています。このなかでは，日常的に困ったこと，情報交換を中心にやっているんですが，「業務上よく利用するウェブサイトはなんですか」というようなご質問があったり，「患者会の資料を入手する方法ってどんな方法がありますか」などの情報交換をしています。病院図書室に直接，本を県立図書館から貸し出しをするということもあります。県立病院は二つありますけれども，病院に本を送っております。病院図書室は専門書以外の本というのはそう多くはないもので，患者さま，そして医療関係者の方が読みたい本を県立図書館からお届けしております。年間その二つの病院で，だいたい 3,000 冊程度の貸し出しを現在しています。実際には，どんな本が借りられるかというと，例えば折り紙の折り方というような本もあるわけです。退院するまでの間にリハビリで使いたいということで。また入院中の楽しみとして，小説が読みたいという方，退院後の生活のために料理の本をお借りになるという方もあります。そういったリクエストにもお答えすることができます。（また，病院図書室には）気持ちが和らぐ本のコーナー「ほっとこーなー」があります。これは 2017 年からスタートさせたものですが，鳥取県立図書館で本をセレクトさせていただき送っています。3 ヶ月ごとに本を入れ替えます。一度に 50 冊程度の本を貸し出しします。手軽に手に取って読みやすいような本をセレクトして，ほっと心が安らいだなぁと思っていただけたらいいなと思い，本をセレクトしてお送りすることも始めております。

私どもの図書館，「鳥取県立図書館のミッション」というのは「県民に役立ち地域に貢献する図書館」です。第 1 から 4 の柱がありますけれども，いままでの活動というのはこういったミッションをもとに取り組んでまいりました。やはり鳥取県という地域に貢献することが非常に重要だと思い，活動をしてきております。

鳥取県の将来人口の推移ですけれども，先ほどは現在の人口を少しご紹介したんですが，やはりさらにどんどん減ってゆく，地域の将来に目を向けると，そういう状況がみてとれます。令和 2 年度には 55 万人と紹介させていただきましたが，令和 27 年度には 45 万人程度に減ってゆくということになります。

こうなってくると，やはり地域の課題というのは，少子高齢化と，人口減少ということは，避けては通れないと思います。じゃあ，この状況に図書館はどう対応してゆくのかということになります。おそらく（図書館で取り組んでいる）サービスは変化してゆくものだと思っています。例えば，子育て支援も移住者の方がどんどん増えておられれば，もっと鳥取県のなかで子どもが楽しめる観光地の情報というものが欲しいと思われる方も多くいらっしゃるかもしれませんし，病院の情報についても，もっと細やかに知りたいという方もあるかもしれません。そういった地域の状況に合わせてまたサービスを変化させていくことも重要だと思っています。

そこで，地域ということを，最後にお話しをさせていただきたいと思います。鳥取藝住実行委員会という団体がありまして，そこと連携し図書館のなかで行った事業があります。「子どもの頃の場所と風景を思い出す」という企画だったんですね。参加者の方々がそれぞれの記憶を，まずテキストに起こします。それを参加者同士でお互いに読み合います。そうすると，それを読んだ方が，「ここに書いてあるものっていうのは一体どういうものですか」とか，「ここに書いてある伝統行事って一体どんないわれがあるものなんですか？」とか，いろんな質問がきます。ところがやはりご自身の記憶のなかで書かれたものであっても，実はそういった詳しいところまではよく知らないということも，改めて気づかされる。そこで図書館の郷土資料で突き合わせながら，その当時の記憶と，実際それってどういうことなんだろうと資料で調べてゆく，ということをされました。このときに，地図やまちの歴史に関する本，写真集などもみていただいたりしました。こういう資料をみながら，いろいろディスカッションをしてゆくということをされていました。

また，大学の授業の一環として使っていただいたこともあります。このときは，「図書館の周辺の地域を文化的な拠点エリアとする」という大きなテーマがありまして，三つのグループに分かれてディスカッションをされました。中心市街地を歩いて書店に立ち寄ったり，また工芸店に行ったりしながら図書館まで来られます。そして，その地域が抱える問題を分析して，学生の視点で地域の将来像を想像して提案していくことをされました。このときに，図書館の本をいっぱい使ってくださったのですが，学生がそれぞれで考えて，どんな資料が使えるかを，図書館のなかから選んできてくれています。私にはちょっと想像できないようないろんな視点から資料が集まってきていました。最終的にこの三つのグループは，後日プレゼンをされたのですが，そのなかには，「おにぎりからにぎわいを」というような，なかなかおもしろそうなテーマも発表されました。

二つの事例で私が感じたのは，図書館という場所ですね。「場所」に集まっていただいて。図書館にはたくさんいろんな情報が集まります。データベースもありますし，本もありますし，雑誌もあります，新聞もあります。そういったものをみんなでみながら，わいわい言いながら自分たちの考えだとか問題点を整理する。そういった場面に使っていただけたな，というふうに思っています。

いざというときに図書館がレファレンスという機能を使って情報による支援を行うことは，図書館の重要な役割，責務だと私も思っています。ただ，いざレファレンスの力を発揮するためには，資料が重要になります。あらゆる分野の資料があること，過去にさかのぼってみられる資料があること，図書館の強みだとも思っています。それに加えて，郷土資料も欠かせないものだと思います。過去の歴史も，災害の歴史もそうです。文化や伝統もすべて地域情報です。いま，コロナ禍で世界中が混

乱のなかにいますけれども，歴史的なパンデミックから学ぼうと考えて，スペイン風邪がとりあげられたりすると，やはり図書館にはスペイン風邪に対する質問がやってきます。「スペイン風邪が流行した頃，鳥取県はどんな対応したんですか」とか，「当時の新聞がみたいんです」っていう質問も今年になって寄せられています。このようにいろいろ地域資料も手がかりに調べることにはなりますが，調査をしながら，図書館しかできないことがあるんじゃないかな，と感じています。

情報を求める人に情報を届けたいと思っていますが，図書館だけで活動してもやはり限界がある。それも感じます。地域で活動する団体とか組織，そういったところと連携をしながら進んでゆくこと，取り組んでゆくことが，図書館にとって，レジリエンス，そういう力を発揮できる場所になるんじゃないかなとも思います。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。

（永田）

ありがとうございました，三田さん，そして先ほど柴崎さんのお話を承りました。

例年ですとここで質問紙など私どもが配って書いていただくというような感じになるんですが，ご質問のある方はチャットに書き入れていただきたいと思います。しばらく休憩ですので，その間を使っていただいて結構です。どうぞよろしくお願いいたします。

==========

ディスカッション

（永田）

はい，それでは，時間になりましたのでディスカッションを始めたいと思います。

すでにいくつか質問とか感想がきております。

当初，柴崎さんの講演に対する感想と，それから質問が一つ，簡単な質問がきてました。「図書館の跡地は現在どうなってますか？」って質問がきてますけど，この辺りで簡単にお答えいただいて，議題の中身に入ってゆきたいと思いますが，いかがでしょうか，柴崎さん。

（柴崎）

どんぐり子ども図書室，どんぐり・アンみんなの図書室，あれはいま現在は名取市の歴史民俗資料館として生まれ変わって使われております。

（永田）

ありがとうございました。

それから同じく，名取市さんへということで支援関係ですかね，「石狩市それから，石狩市と関係する沖縄の恩納村さん，さらに輪島市さんだとか，そんなネットワークがあるようです。そういったもの（つながり）を感じ取った」という，コメントがついてました。

次に，感想と若干質問の部分があるものでありますが，これはやっぱり名取市の柴崎さんに向けたものかと思いますが，「被災地の子どもたちの心の回復というところに関心があります。大川小学校の遺族会の活動についてこの半年，佐藤敏郎さんを通じて，これは心の素地，心の素地を育てるにはコミュニティの力がとても必要なんだなと感じています。図書館がそのようなコミュニティの核になってゆくのはすばらしいなと思います。一方で，震災後に生まれた子どもたちがすでに小学生になっています。そうした思いをどう伝えてゆこうとしてるのか，ここがお伺いできればと思います」というのがきておりますが，柴崎さんコメントをいただけますか。

（柴崎）

はい。私たちも，子どもたちの心の回復についてはすごく大事に考えていました。震災直後，一番に大切にしなくてはいけないサービス対象は子どもたちだと思っていました。もちろん大人も大事なんですが，まず最初に取りかかりたかったのは，子どもたちへのサービでした。先ほどの話のなかにはありませんでしたが，日図協（日本図書館協会）からの支援で，北海道から使わなくなった BM をもらいまして，それに子どもたち用の本を入れて，子どもたちに楽しんでもらったということがありました。その後，支援で建物を建てるという話が出たときに，子どもたちが安心して本を読める場所をつくりたい，まずは子どものサービスから始めたいということで，子どもの図書室をつくりたいという私たちの気持ちと，ユニセフの支援をしたいという気持ちがうまくマッ

チングして，子ども図書室ができあがったのです。そのようなわけで，子どもに対する支援というものはとても重要だと思って取り組んできました。

震災から間もなく 10 年になるわけですが，そのとき生まれた子どもたちはもう小学生になりました。震災の記憶がない子どもたちに，震災のことをうまく伝えてゆかなくてはいけないと。図書館がすべてできるわけではありませんが，図書館もそのお手伝いができるというような立ち位置にいたいので，いま，そのような思いをもって子どもたちへのサービスに取り組んでいます。そんなところでよろしいでしょうか。

（永田）

ありがとうございました。私が先ほどちょっと資料にはさんだ，ゾッリ，ヒリーによるヒントですと，個人のレジリエンスという問題を考えるときに，自己回復力とか，自己統率力ということがいわれるんですが，子どもたちの場合は，そういったものが未発達の段階ですし，またそれを養ってゆくっていうのが，難しいと思いますが，図書館がそういう場所になってゆくことが大変大切だなと私は感じます。その意味で図書館はレジリエンスを育てる場所かなと思います。

次に鳥取県立図書館に参ります。

質問が飛び込んだ順序で，いまのところやってます。以前のシンポジウムのように，ある程度の質問が揃ってそれを分類してということじゃなくて，チャットに入力された順にやっております。

「鳥取県立図書館のサービスにとても注目してます。病気と向き合うための情報発信，とても心強く思います。重い病気を抱える家族の看護をしているとき，そうした情報は，藁をもつかむ思いで，どれだけ心強いでしょうか。お話を伺って，とても心を動かされました。ありがとうございました」とおっしゃってます，これは質問というよりも感想ですね。

「鳥取県県立図書館さんへ」ということで，「レファレンスの，特にビジネス支援サービスのときに感じられたのですが，このコロナ禍になり，いろいろサービスを調整せざるを得なくなって，大変かとお察しします。この手のビジネス系レファレンスには，たとえ回数を分けたとしても，1 回当たりにかかる時間が非常に長くなってしまいそうですが，鳥取県さんは現在どのような工夫をして乗り切っておられますか。ちなみに当館では，建前上，対面のレファレンスサービスは 15 分以内，データベースとインターネットは 1 時間以内，新聞，マイクロフィルムは 2 時間以内といった制限を設けさせていただいております」，いかがでしょうか三田さん。

（三田）

はい，ご質問いただきましてありがとうございます。確かにいま，コロナ禍で当館でも，レファレンスについても時間の制限，ある程度そうです，長くならないというようなところで，ご理解をいただいて使っていただいているところです。

以前からやはりそうなんですが，やはりレファレンス，ビジネスに関係するレファレンスは，割と長くなったり，すぐにその場では解決ができなかったりっていうことがあります。でも，そういったときには，お話を聞いて，そのときにお出しできる情報はみていただくということをしますが，それ以降については，後日，調査の上，ご連絡をさせていただいています。

（永田）

よろしいですか。お二方にご質問等なさった方は，以上のような回答になにかコメントございますか，もしあったら手を挙げていただけるとありがたいのですが。

なければ，次のご質問です。柴崎館長へのご質問として，「早朝の一部開館を始めたのはどういう理由からでしょうか。やすらぎ，つどい，ひろがるということで，つながるということでしょうか。図書館は日常を伝えているというレジリエンスというような意味なんでしょうかというふうに理解しました」。ちょっと，漠とはしてますけども，ともあれ「一部開館を始めたのはなんのためですか」ということで。

（柴崎）

はい，お答えします。これは単純に，名取駅前に建ったからっていうのが正直なところです。そもそもこの一部 7 時半を，図書館の方で「したい」と言い出したわけではなくて，実は当時の市長の考え方でした。「駅前に移るんだったら，名取駅は県内でも 3 番目に乗降者が多い

駅だから，朝から図書館サービスできるように７時半から開けなさい」といわれたのが本当のところです。ただ，それには私も同じような考えだったのでやらせてもらいました。

（永田）

そのような形で人々が寄ってくださるっていうのが結果として，図書館にとってはコミュニティを支える活動になってるかと思います。

質問は，ただいまのところ以上です。いつもとかなり違って，質問を出される方が少ないんです。

柴崎さんのほうのお話のなかで，復興を支えたものっていうか，復興の後，それを後押ししたものをおっしゃっていましたね。一つは，柔軟で楽観的に考えられたっていうのがあったこと，もう一つは，新たなコミュニティのつながり，それは本当にさまざまな形で出てきてコミュニティの形成というか，支え，そして実際に成し得た喜びが，今回後押ししてくれたとおっしゃってました。大震災という不幸があってコミュニティがもっと密になったと思うんですが，図書館の側からどんな働きかけをするようになったか。そこのあたりを教えていただくと嬉しいんですが。何回も会合をやろうとしたのは，新しい図書館をつくって，間もなく開館するために集まりを仕立てたということですか。

（柴崎）

はい，そうです。紹介したワークショップは，新しい図書館の開館に向けて開催したワークショップです。

（永田）

ところが，その開館を紹介しにいったところで，いろいろ新しい事実に出会い，それからそこに新しいことや人とのつながりができたということなんでしょうか。

（柴崎）

はい，そのとおりです。いろんな形のワークショップを，開催してゆくうちに，図書館のもっている課題がいろいろみつかりました。それを解決しながら新しい図書館の建設に結びつけました。

（永田）

鳥取県立図書館でも打って出るというか，情報を，図書館はこういうことをやっているんだよという形で，情報を発信することを強くおっしゃってましたね。その点では名取市図書館も同じような姿勢をとっているような感じを受けます。

また三田さんのところは，情報発信するだけじゃなくて，いろんなサービスを充実させて，成果を次につなげてゆくとかなさってます。そしていうならば分厚いサービスをなさってるからつながってると思います。しかし，個々の図書館では，なかなか情報発信してもレスポンスがつかめないとか，いろんな悩みがあると思うんです。そのあたりは実際に動いちゃったほうがいいようで，名取市さんの場合も，そういう会合をやったことによって，なにかが出てきてますよね。特に，そのあたりさらに言葉を添えたほうがよいことはございませんか。

（三田）

サービスの充実のあたりも触れていただいて，ありがとうございます。私たちがやってきた姿勢というのは，私の前に事例を発表いただいた，名取市の柴崎さんからのお話にも，あぁやっぱり同じなんだなと思うところがありました。とにかくやってみるっていう話があったと思うんですが，やってみて失敗したらやめるっていうね。考えて考えてやらないよりは，やっちゃおうよっていうのが平成16年ぐらいからのずっと動きでした。それを特に恐れてはなかったので，次々と結果としてなんとなくいろんなサービスができてきたようにみえたっていうのは，そこはあるかもしれません。それを始めるときに思っていたのも，たしかにレスポンスっていうことはあるんですけれども，確かにそこはつかみたいところなんですが，一つ，いろんなサービスをしてゆく上での，広げてゆきたい，もっと知ってもらいたいっていうときに，一般の方々にどれだけ，どこにいってなにをいえば広がるんだろうかっていうのは，やはりみえないところもあって，要するに，対象が大きすぎるので，どうしたらいいんだろうっていうのもありました。そういうときに，それだったら，例えばビジネス支援であれば，商工会議所とかそういった団体に，しっかり，わかっていただいて図書館が割と使えるぞって，言ってもらうことのほうが，もしかしたら広がるんじゃないかなっていうようなこともあって，連携というところが生まれてきた。

それを他のサービスでもやはりそうで，看護協会のほうに，看護師さん向けの情報収集の研修会っていうようなところに講師に呼んでいただいたりして，そこで図書館とこういうことできますし，皆さんでもこういう情報収集できるんですよってお伝えするほうが，ピンポイントに広まってゆくっていうことも経験しながら，いまの形のサービスをやっているという感じですね。ちょっと言葉足らずですが，そのように思っています。

県立図書館でそういったサービスを展開する意味というのは，モデルをつくることだと思ってまして，県内の図書館に，こういうサービスでこういうやり方すればできるなら，うちでもやってみようかなって思ってもらえるモデルを示してゆくことですので，常に挑戦してきたというのがいままでの流れだと思っています。ちょっと補足になってないかもしれませんが，私からは以上です。

（永田）

鳥取のケースをみてると，見える化が上手だなと思いますね。「なんとか大賞」とか，あるいは，実際にサービス効果が出たところを見える化してるような気がしますね。そのへんが理解され，図書館を皆さんが支えてくれるのかな，と思うんです。

あと名取市の場合も，実際に図書館行ってみますと，皆さんがずいぶんくつろいで，そして図書館をうまく使ってるという様子を拝見し，市民の方に親しまれてる図書館だなと受け止めました。見える化を実際の運営で，さまざまなさってると思います。

いま，見える化といえばですね，インターネットでわりと図書館も配信してるじゃないですか。それと同時に，鳥取県立では館内の各コーナーで，こういったものがあるよってリアルにもみせている。そういう，二重三重に見える化してるっていうところが気づいたんですが，そのへんはどういうお考えで，どうしてそんなふうになさってるんでしょうか。県立図書館ですから住民の方が，県全体の方が県立図書館に足を運ぶってことはできないと思うんですが。

（三田）

そうですね，先ほどご紹介させていただいたなかでも，コーナーの写真をみていただいたと思います。県立図書館に来館している方は，まずは自分が興味がある本は自分で探されるんですが，来館している方であっても，その際にこんな本や写真があるってなかなか気づかれなかったりします。で，コーナーをつくるっていうのは，一つそういう意味では，非常に見える化という意味で，説得力のあるというか，私たちが届けたいメッセージは届くようにというのがあって，コーナーをまずつくっています。

それに伴ってレファレンスが少し変わってきたとか，問い合わせが増えたみたいな話もしましたが，やっぱりそれがなければ，なかったのかなと思います。コーナーより少し規模を小さく考えてみると，図書館は日常的にいろんな小さな展示をしますよね。展示をすることによって，いままで「あれ？まったく動かなかったのに！」っていうような本が貸し出しに出ていったりするわけです。やはりそういうふうにみせてゆくっていうことは，図書館のなかをコーディネートしてゆくというか，発信の場として考えるというのは必要かなと思ってます。

また，いまそうですね，コロナ禍ということもあって，インターネットを使うっていうこともたくさん出てくるんですが，またそことは少し，メッセージがもしかしたら違うのかもしれません。ただ，むしろこの来館されない方には，やっぱりインターネットをしっかり使って情報発信してゆくっていうことは必要だと思いますので，そちらについても，両方やってゆかなくてはいけない，というふうに思ってはいるところです。インターネットについてはちょっとまだ足りてないのかなと，私自身思うところも，細やかにしてないのかなと思うところありますけれども，やはり両方が必要だと思っています。

（永田）

はい。コロナ禍で，どの図書館もやはりそのデジタルな情報をいかに出してゆくかが課題だということがみえてきちゃったんですが，名取市立図書館としては，カバーする地域はそんなに広くはありませんけれども，柴崎さんのところでも，インターネットで，図書館の情報を出す，あるいは図書館のサービスを出すことはなさって

るんですか。

（柴崎）

インターネットを使って図書館の情報を発するということはやっております。コロナ禍になってからも，現在はやっておりませんが，今年の春先には子どもたち向けに読み聞かせみたいなことをやっていました。おはなし会が，図書館のなかでできなかったとき，図書館に来館してもらうことができなかったときに，限定的にやったことはあります。

（永田）

そうです，名取市さんは，コロナ禍で早い段階でおはなし会をなさったということ，積極的にそういったサービスを展開されているというのを承っておりました。

それで少し，フロアっていうか，ネットでつながってる方々のご発言も促したほうがいいかなと思います。名取市の柴崎さんが新しいつながり，コミュニティができて，その友の会をつくったということをお話しになってました。友の会というと，ご参加の図書館パートナーズの小田垣さんが思い浮びますが，小田垣さんのほうで，なにかご意見というかご発言ございませんか。いらっしゃるかな？

（小田垣）

小田垣です。友の会ですね。関連する私の活動なんですが，いわゆる友の会というのとは，ちょっと性格が違うかと思うんですが。やっぱり市民っていうか，そういう方が中心となって，あの活動するってのはやっぱり，地域活動をもとにした考え方なので，図書館のなかではなく，外からの働きかけっていうのが大事になるかと思うんですけど。なので，あまり図書館という枠にとらわれなくてその，外の地域活動そのものを，図書館のほうに取り込むという発想というか，そういうことがなにか一つ，大事になってくるのかなと思いますね。なんていうかこう，図書館のカウンターのなかで発想すると，やっぱりその図書館のなかに閉じてしまうという感じが，はい。

（永田）

それは友の会であろうが，パートナーズのような形の会合であろうが，どちらも大切だという意味ですよね。

（小田垣）

そうです，そうです。はい，そう感じています。

（永田）

柴崎さんところの友の会は，その図書館を支える会合という形で設定されているわけですか。その趣旨のほうを少し，もう少しご説明いただくとありがたいですが。

あの，いまご発言いただいたのは，東京墨田区の図書館パートナーズの小田垣さんのご発言なんですが，小田垣さんのところは，図書館の活動を外から温かくみて，そしてそれをサポートするような形なんですね。図書館活動そのものをサポートするという，もっと広い意味でのサポートになっていますね。

名取市の友の会はいかがでしょうか。

（柴崎）

はい，うちの友の会は，「図書館を支え，援けるための活動」，それから「図書館を楽しむための活動」，このようなことを目的にしています。その「支え，援けるための活動」のなかに，友の会でボランティアをするというのがあります。が，友の会に入っているからといって，必ずしもボランティア活動をしなくてはいけないというわけでもありません。図書館を「頑張れ」って応援したい気持ちがある方であれば，誰でも会員になれるし，「図書館でこういう楽しいことをやりたいね」って企画をもってこれるのも，会員さんの一つの楽しみじゃないかなと思っています。一緒にやっているって感じですかね。

（永田）

小田垣さんのところと違和感のないものじゃないですか。

（小田垣）

そうですね，同じだと思います。楽しむと，図書館を楽しむために集まって，好きなことをしたい人がいれば，そこで好きなことをするっていうのが基本的に，コミュニティが生まれる最初の考え方だと思いますね。同じだと思います，はい。

（永田）

小田垣さんのところのパートナーズなんかも，結局は，地域が強くなるっていうか，地域の自立っていうか，そういったものが欲しいというところが，根っこに

あるような気がするんですけど。それは今回のテーマ，レジリエンスみたいなところに，かなり近いのかなと思いますが。

（小田垣）

はい，そうですね。図書館をサポートするっていっても，図書館を活性化するのは目的ではなくて，その地域を活性化するのが目的であって，そのための図書館というスペースであったり，資料であったりっていうことを，なにか考え方ですね。

（永田）

そうですね。もちろん図書館がうまく運営されてるっていうことは大切なんですが，図書館は地域のためにあるわけで，図書館のためにあるわけではないですから。わかりきったことですけども。

そういう話になってきますと，太田さんがいらしゃいますから，太田さんにそのあたりの，なにかおっしゃりたいことがあるんじゃないかと思います。太田さん，いかがでしょうか。

（太田）

ありがとうございます。われわれ，昨年からこのレジリエンスっていう言葉に注目して，活動のテーマとして，ずっとレジリエンスということをいい続けてきました。こういう毎年出している「綴」という冊子も，2020年２月発行のものに「図書館と地域のレジリエンス」というタイトルをつけました。その後コロナがきて，ますますレジリエンスについて考えさせられるということで，今日永田先生もレジリエンスっていう言葉に注目されてこういう，シンポジウムもなさって，名取市さんと鳥取県さんの事例を聞かせていただいて，すごく勉強になりました。ああ，やっぱりレジリエンスが大事なキーワードになってきたなという気がしました。

ここ１週間，先週から今週にかけてレジリエンスを考える上ですごく大きなトピックが二つあったと思うんですよね，図書館の世界で。一つは河野大臣が高知のオーテピアを見に行ったと。僕はものすごく危ないなと思ったんですけどね。行政改革っていう旗印のもとに，県立と市立の合築って，ものすごくいろんな要素を含んでいて難しい話だと思うんですけど。あの大臣ですから（笑），ものすごく単純化して，行政改革っていう旗印のもとに捉えられてしまうと全国的な図書館がものすごく被害にあうというか，危ない目にあうんじゃないのかなと思っていて。実際図書館って，何年か前の，いわゆる事業仕分けでものすごい波を被って，指定管理にもピンからキリまであるので一概にはいえないですけど，指定管理という波が押し寄せてきたわけで。同じような，また，合築だけじゃない，今日お話伺った鳥取県立さんみたいなことをいろいろ頑張っていれば，単純なそんな話はないと思いますが，県立図書館と県庁所在地の図書館の二重行政問題みたいなものって必ず出てくる話で，そういうときにそれぞれの図書館の役割をきちんと，レジリエンスという視点のもとで整理しないと，目先の行政改革っていう波にやられてしまうなと。

もう一つは，西日本新聞だったかな，常滑で前に決まってた話なんだけども，新聞の記者さんが書いたことによってもう一回議論が沸騰していて，常滑市さんが中央図書館を潰してしまうと。何年か後に議論を始めるみたいなこともいってるみたいですけども。いま，私が全国のいろんな自治体や図書館から相談を受けていると，いくつかの市町村の首長さんが，常滑の例を引き合いに出して，図書館に急ブレーキを踏むようなことをおっしゃったりとか始まっているんですね。常滑の例なんてまさにレジリエンスの問題で，名取市さんの場合は震災ということで物理的に図書館を失って，そのなかで皆さんが頑張って復興されて，まさにその過程で地域のレジリエンスが発揮されたのですよね。今日本の図書館の多くは，物理的にではなくて，もう図書館そのものが行政からみてはお荷物でしかないと。ただ物理的にやられてしまうんじゃなくて，もう自治体からみて，見限られてしまうっていう状況が目についてきています。今回の行政改革で旗振っている大臣の動向と，この常滑で起こった首長さんの判断みたいな事例が，この後どう響いてくるのかと考えたときに，まさに図書館自身が本気で考えておかないといけない。名取市さんのように逆に復興のプロセスでレジリエンスな力を発揮していったのだけど，そのいま名取市さんがなしえているような状態を各地の図書館がつくれているのかどうか。そういうレジリエン

スが発揮できない図書館っていうのは，このコロナ禍で酷いことになってたりしますから，この後も，自治体の予算はますます厳しくなるなかで，一気に図書館が消滅していく状況もあるんじゃないのかなって危惧しております。ただその意味でも，それぞれの図書館が今日お話を伺ったような，いろんな方法を使って地域の住民とのネットワークをつくっていかないと，おそらくいま，多くの図書館が長年の間やってきた，住民サービスの延長の図書館では，自治体や住民，首長さんには響かないと思うんですね。この先地域の未来に対して，それぞれの図書館がどこまでコミットできるのか。今日，さかんに課題解決という話が出てきましたが，課題解決もそうだし，地域の未来像をどうやってみんなでつくっていく拠点に図書館がなれるかどうか，そういうふうにコミットできてないと，おそらく，この後ものすごい逆風が吹いて，物理的ではない自治体のいろんな状況のなかで，図書館が消えてゆくという事態もあり得るんだと，すごく危機感をもってみています。

今日のシンポジウムでお聞きしたような事例というのは，どんどん地域の図書館さんも共有して，生き残ってゆけるような，物理的な災害ではない，人的なものにも負けないで，きちっと将来に残ってゆくような図書館になっていってほしいなと，すごくいま思ってるところです。

（永田）

ありがとうございました。大変重要な指摘だと思います。昨今のさまざまな事象に関する議論をみていると，どうも本質的なところがきちっと語られてない。コロナに対応する議論なんかもそうなんですが。テレビのバラエティショーですか，トピックをとればいいというような形で。インターネットの情報もそうですね。

サステナビリティに関してはSDGsが出てですね，さすがに皆おかしなこというのは少なくなったんです。少なくなったんですが，誤解もある。レジリエンスという言葉に関して，政府の翻訳は「強靭化」という訳で，ちょっと違うなという感じもあります。われわれ生きてゆく上できちんと危険を避けて，混乱が来たときにそれに対応できるよう，自然環境に備わる力を含め，弾力的な復元力を準備しておくというような意味合いでのレジリエンスとはすこしずれます。おっしゃるとおり，行政改革というようなところから，「合理的だ」「効率的だ」というところで，図書館が押し切られてしまうような危機感は，あるかと思いますね。

なんかこの，いまの太田さんのご意見について，つながってる方，ご意見ございますか？遠慮なくどうぞ。

（太田）

さっき名取市さんの発表のなかであったのかな，「自立」っていうのは依存先を増やすことだっていう。

（永田）

鳥取県立のね，最初ね。

（太田）

それに尽きると思うんですよね。

（永田）

そうそう。

（太田）

ワンウェイの住民サービスではなくて，もうもはや住人と双方向で，お互いの依存関係を何重にもつくってゆかないとレジリエンスって発揮できないと思うんで。だから，やっぱり，Win-Winの関係，それは住民と図書館もそうだし，利用者と図書館もそうだし，逆にいうと，行政と，だから市役所とか役場と図書館の関係もそうだと思うんですね。いま一番問題なのは市役所，役場と図書館がWin-Winの関係がちゃんとできてない。単に予算が落ちてくるのを待ってるだけだと一方向になってしまうので。だからそうではない。市役所の職員にとっても，図書館が大事であるというWin-Winの関係をどうやってつくってゆくのか，相互依存の関係をどうやってつくってゆくのかっていうのがすごく大事なのかなと思います。

（永田）

人間関係でもそうですよ。友人だとか，その自分の周りを，なんとなく一人ぼっちになってしまうことは非常に危険なことです。子どもたちで起きている問題もそうだと思います。

さっきのそのお話のなかにもう一度戻ってきますと，鳥取県立の三田さんのお話のなかで，地域の課題に関し

て，人々が寄ってくれて，その課題を出すという話がありました。これはとっても私は大切な，レジリエンスからいうと大切なところをいってるなと思いました。人々が寄ってくれて，そして自分たちの記憶，地域の記憶を確かめて，そして時代が違うから同じ街はできないかもしれないけど，新たな街をつくる。あるいは，昔あった災害を記憶として残しておく。「だからここには，家建てちゃいけないんだよ」とかいうようなことをちゃんとアーカイブするとか，図書館に置いておくというような意味合いもあるし，もう一つは，私は，人々のつながりという意味で，ソーシャルキャピタルみたいなものが，育つのだろうなあと思っています。ですから，この鳥取県立の事例を伺って，ああ，なるほど，鳥取県立はこういう形でその地域を支えてるんだなと思いました。そこでですね，三田さんには少し，もう少し地域を支えるためになにか他にもやってらっしゃることがあると思うんで，その事例を少しあったら教えていただけませんか。

（三田）

すべていろんな取り組みについて，最初にも申しましたけど，ミッションっていうなかで，私たちもいろいろ考えて行動をしているっていうことを思うと，いろんな活動が，確かに，「地域ではどうか」っていうところを地域の課題をなんとかして解決したいっていう思いで，取り組んでいるっていうのはそうなんですね。それは，ビジネスもそうです，医療・健康もそうなんですけど。最後に紹介した事例っていうのは，実はそれは図書館主体で動いてるものではないです。これってもしかしてちょっと，小田垣さんおっしゃってたところにも，もしかしてつながるのかな，なんて思って少し聞いてたんですけど。図書館のなかだけにいても，ちょっとそこでジタバタしていてもなかなか寄ってくれない人たちがいてそこで，他のどこかとつながって，今回は大学の事例を出しましたけど，そういうところとつながることで，本当に，来たことのない子たちがいっぱい図書館には来てくれました。で，そのときに一応聞くんですね。「利用者カード持ってますか。また本借りれるけど，どう」なんていうと，もう８割くらい持っていないと。「あ，こういう子たちが来てくれたんだな」っていうのが，かえって嬉しかったりしています。

だから，地域とつながるっていうことっていうのは，一つは図書館でなにか企画しようと思っても難しいんですけど，そういう地域のなにか団体とかとつながってゆくっていうことで，さっきみたいな活動が実現できるのかなと思います。これがその答えになっているかはわかりませんが，今年，県立図書館で30周年の記念の年を迎えました。このコロナの年だったんですけれども。一応リモートでのイベントを開催したり，集まれる人だけは集まるっていうようなことをやったんですけど，そのなかで，図書館の近くというか，図書館を出たところに中庭のようなところがありまして，そこで一箱古本市っていうのをやりました。それは図書館のなかで実行委員会をつくって，それで地域の人たちが，ダンボール一箱の本を売ったりして，するイベントなんですけれども，そういうイベントをちょっとやってみたりしました。これが地域の課題を解決するということではないのかもしれませんが，そういう人とのつながりをつくる，また新たな視点でつながりをつくってゆくとか，交流をつくってゆくっていうことを少しずつ始めているというところです。私たちもいまその「まちづくり」とか，地域の課題を解決するために，なにか図書館で一緒にできないかなっていうのを模索しながらやっているところっていうことなので，これからそういう事例がもっとどんどん話せたらいいなと思いますが，いまのところは模索中です。

（永田）

ありがとうございます。あと，なんというのかな，若い世代と古い世代，世代間のつながりみたいのはありますか。

（三田）

世代間ですか。

（永田）

人生の先輩が，若い人に伝えるようなサービスってありますか。

（三田）

そうですね，その具体的にそういうところを意図したものではなかったんですけど，図書館主体ではなくコラボレーションさせてもらった企画のなかに，地域の家庭

で眠っている８ミリフィルムを集めて，その映像を残そうということを事業としていらっしゃる団体があったんですね。その方々が図書館に来られて，図書館と一緒になにかできないかなという相談がありました。うちとしては非常におもしろい企画だと思いましたので，ちょっと一緒にやりましょうということで，コラボさせていただいて，そのときなにをしたかっていうと，その団体の方々は，その８ミリフィルムのデータを映像化して，DVD とかで流して，流すということができるっていうことだったので，じゃ公開鑑賞会をやってみましょうということで，本当にただの８ミリフィルム，家庭のビデオなので，映像なので，淡々とした映像が流れるんですけど，そのなかに，街の様子が映っていたりとか，あともういまはないような百貨店が映っていたりとか，そういうものが残っているわけですね。だいたい昭和 30 年代，40 年代とか，その辺りのものなんですけれども，当時を知る人たちは見に来られます。でもそのなかに若い子たちも来られていて，その映像をみながら，その当時を知っている人たちは，そのときの様子を語られるんですね。で，その話を聞きながら，そのまた若い子たちはそれで，感じたことだったり，そうだったんだなっていうような感想を述べたりして，そういう場面をですね，一つの企画のなかで，体験しました。そのときには図書館でしていただくので，当時の様子がわかる写真を出してみたりだとか，本を出してみたりということも合わせてやりましたけれども。で，一つおもしろかったのは，そういう場面でいろんな情報交換ができたなあということも一つあったんですが，実はそのイベント告知するために，館内でずっと映像を流し続けたんですね。展示コーナーみたいなものをつくって。懐かしいブラウン管テレビを持って来てくださって，そこではずっと映像が流れていて，そこで立ち止まってみる方もあって，「立ち止まってみられるなら，もしかしたら感想を書いてもらえるかもしれない」っていうことで，感想を書くノートを置いたんですね。そしたら思いがけずいっぱい書いてくださったりして。そういうふうに，あの，思いがけない，図書館の資料ではなかった部分ですね，その映像なので。ここから生まれてくる，それこそ世代間の交流というか，交流ですらないことかもしれませんが。というようなことが実際はありました。すごくおもしろい体験でした。

（永田）

まさに図書館があるからできることだと思うんですよね。それをね，記憶を残して，個々に記憶を残して，必ずしも図書館が所有しなくても構わないわけで，図書館という場を通じてみんなで共有できれば，そこになにかイメージのコミュニティというものができてくると思うんですよね。そういうコミュニティが異常な事態に関して，それなりの対応ができるというような気もします。そんな意味で，ぜひそういった活動を，鳥取県立図書館さんだけではなくて，どこでもやっていただきたいような気がします。

もう一つちょっと印象的な話なんですが，名取さんのほうでは，「図書館の絆まつり」っていうのが一つのきっかけだったとおっしゃってました。それから，鳥取県立では「なんとか大賞」，なんでしたっけ。

（三田）

「夢を実現しました」です。

（永田）

「夢を実現しました大賞」。なんかどちらも，ちょっと非日常的な感じなんですけども，その後の図書館の動きをプッシュするというか，機動力になってますね。絆のほうは，なんかこう，「できてしまった」ということなんでしょうかね。「夢を実現しました大賞」，最初聞いたときは「なんだこれは？」と思ったんですけどね。なにがあったんですか。

（三田）

「夢を実現しました」大賞ですか。ビジネス支援をはじめたときに，公共図書館で質問をしてちゃんと答えてくれるんだろうかとか，役に立つんだろうかっていうのが利用者の方，県民の方にもなかなかわかりにくいんじゃないかなっていうのはありました。私たちもぜひ，どう活用されて，図書館を使っていただいて，得られた情報っていうのが，本当に役に立ったんだろうかって知りたいなっていうところからスタートしているっていうところです。図書館の機能っていうのは，本を読まれると

かそれだけじゃなくて，いまは図書館を場所としていろんな活動が展開されています。相談会もあれば，セミナーを開催したりとか，いろんな情報を得られるなかで，そういったものを使って，なにかヒントを得られて，それが開業だとか，経営改善でも構いません。なにかに役に立ったというところを寄せていただけないかなということで募集をして，そしてそのなかから優秀な作品と判断したものについて表彰を行っています。受賞者の方のそれぞれのストーリーは漫画にさせていただいています。

（永田）

堅苦しい話をしますとですね，図書館の活動の成果評価っていうあり方があります。成果評価はとても難しいです。でも簡単にあの「夢を実現しました大賞」は，とても明確な成果評価だなと思いました。実は，まともな成果評価っていうのはほとんどないですが，あれは成果評価ですね。

ということで，この二つの事例を今日はお話しいただいたんですが，二つの事例にはかなりいろんなレジリエンスを支えるアイディア，そして実際の活動があったように思います。例年のように質問でもって議論が終わってしまうということは今年はありませんで，私どももお話しをすることができました。皆さん，難しそうな顔をしてる人もいますし，ニコニコしてる人もいますが，最後になにかこれだけは，いっておきたいっていうのはありますか。

（太田）

すいません１個質問。これってあの，夢をかなえましたっていう，夢をかなえた図書館は県立図書館だけなんですか，県下の市町村の図書館で，こんな夢をかなえたっていうのでも応募できるんですかね。

（三田）

はい，県内の市町村の図書館であれば大丈夫です。実際に，受賞者のなかにも県内の図書館を使った事例というのが入ってます。

（太田）

あの鳥取県立さんが，県内の学校図書館さんに児童書全買いして公開して見計らいみたいなの，やってますよね。あれはすばらしいなと思っていて。さっきのお話で，これからやっぱり市町村の図書館すごく大変だと思うんで，県立さんが，そうやってこう，いままで培ったノウハウをぜひぜひ市町村におろして，鳥取県内の図書館全部が生き残ってゆけるように支援していただけるといいなと思います。

（永田）

はい。都道府県立図書館が市町村立図書館とは違うんだよっていう典型を示しているのは，鳥取県立さんがですね，本当に頑張っていらっしゃると思います。

他になにかございますか。

最後に柴崎さんに一つ，ご感想でも述べていただくとよろしいかと思うんですが。

（柴崎）

はい，先ほど図書館の生き残りという話が出ましたけども，私もあの新しい図書館をつくってゆく過程で，危機感っていうほどの大げさなものではないのですが，ちょっと引っかかるものがあって。実は名取市は，仙台市の南側で，反対側の北側に多賀城市さんがあるんですね。私たちが準備しているときに，多賀城市さんが指定管理ですばらしい図書館をオープンさせました。で，うちの議員さんたちも，ああいう図書館が欲しいと言い出したらどうしようかなって。指定管理の図書館をすべて否定するわけではありませんが，名取にはちょっと合わないんじゃないかなっていう思いがあったので，そのためにはどうしたらいいのかっていうことを考えたときに，やっぱり地域を巻き込む，市民を巻き込んで一緒に図書館をつくってゆけば，それが図書館の生き残りにつながるんじゃないかと，そう思いました。友の会設立という方向に，図書館のほうで舵を取っていまに至っている，そのことを一言付け加えたいと思いました。

（永田）

おっしゃるとおりです。ありがとうございました。今回のテーマはレジリエンスということではありますが，図書館のサステナビリティという観点も視野にあります。だから図書館をどういうふうに支えてゆくか，また図書館は，図書館のためにあるというよりも，地域のためにあるわけですから，地域をどう支えてゆくかを引き

続き考えてゆきたいと思います。

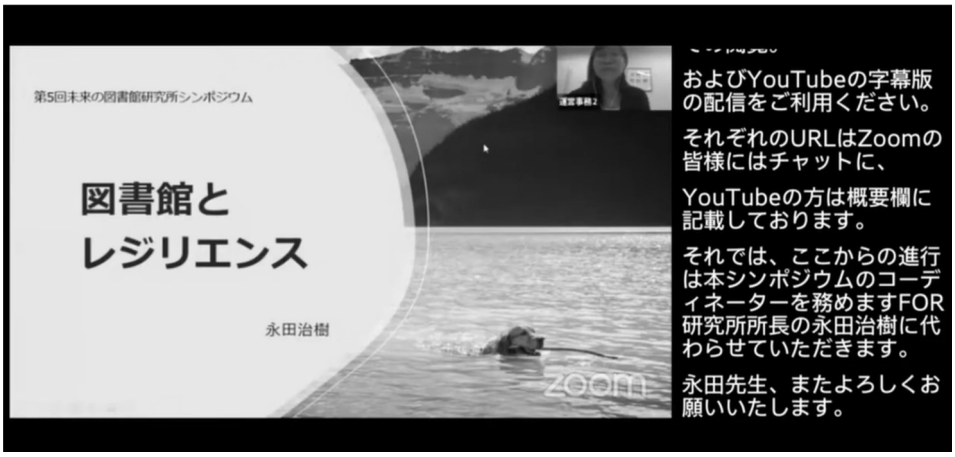
時間を過ぎてしまったようですので，このあたりで締めさせていただきます。本日は皆さまありがとうございました。皆さん，柴崎さん，三田さんに，御礼の意味を込めて拍手をお願いします。それでは失礼いたします。どうもありがとうございました。

■ 主催イベントのオンライン開催について

2020 年は，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，当研究所主催イベントはすべてオンライン開催となりました。Web 会議サービス Zoom を活用し，6 月～7 月にはウェビナー「図書館の未来を拓くスキル～ヒト・モノ・コトをむすぶ場づくり」（全 3 回），10 月には第 4 回ワークショップ「図書館員の未来準備」（4 日間 6 科目）を開催しました。講師の方々のご尽力により，オンライン付箋サービスを活用したブレインストーミングやディスカッション，PC を使用した 3D モデリングやプログラミングの演習など，オンライン形式でも双方向のやり取りや実践形式のワークショップを実現することができました。

本誌に記録を掲載しました第 5 回シンポジウム「図書館とレジリエンス」は，Zoom によるオンライン開催とし，同時に YouTube でのライブストリーミング配信および「UD トーク」による字幕版の配信を行いました。開催後は，YouTube にて当日のシンポジウムの様子を期間限定（2021 年 1 月中旬まで）でアーカイブ配信を行い，図書館に関わる皆さまに幅広くご覧いただけるよう，さまざまな新しい取組を実践する機会となりました。

困難なときこそ，図書館に関わる皆さまとのパートナーシップが重要と考えます。今後も状況に応じて必要な対策をとり，必要なツールとリソースを万全に備え，発信し続けていくことで，皆さまのお役に立てればと存じます。



YouTube 字幕版の配信の様子

（字幕版提供：NPO 法人 メディア・アクセス・サポートセンター）

「ツナガル。」から生まれる図書館の可能性

Possibility of the Library Born From "TSUNAGARU."

豊山　希巳江 [1]
Kimie TOYOYAMA [1]
1　山武市立図書館
Sammu City Library

抄録

「図書館員は何のために存在しているのか？」と問われたら，皆さんはどう答えるだろうか。

私たち公立図書館で働く職員には，人（図書館で働く人等）や場所（施設全体，駐車場等），資源（図書費，図書館システム等）が与えられている。それらをどうやって活用するのかが図書館員の腕の魅せ所だと考えている。

規模の大きな図書館は地域の生涯学習の場，知の拠点を担っており，さまざまな事業を実施することができるし，実際に実施されている。一方，規模の小さい図書館ではどうだろうか。スタッフは少ないし，窓口サービスで精いっぱい，図書費が少ないし，独自の事業は実施できない，そういう声も想定できる。

ここで，安心してほしい。私の勤務する図書館も決して与えられている資源の総量が多いわけではない。あんなふうになれたらいいな，こうしたらもっとよくなるな，といった想像力は小規模図書館員のほうが抱きやすいのではないだろうか。規模にかかわらず，すばらしい図書館の事例に触れるチャンスはたくさんある。大切なのは自館でなにを目指すのか，そのために自分たちはなにができるのか，と考え，実行することではないだろうか。

ここでは，「ある」ものを最大限に活用し，「いまはない」ものを達成してゆく一つの手法として，「ツナガル。」ことを軸に，いままでの実践事例を提案したい。新たな視点で考えてみる契機となれば幸いである。

1. はじめに

最初にいっておきたいことがある。この原稿には「正解」はない。そして，事例に基づいた文章である。最短ルートでなにかを得られると思って読んでくださっている方がいたら，申し訳ないのだが，ご期待に沿えないだろう。すばらしい図書館をつくり上げることは一朝一夕には実現しないことは明白だ。だが，いまの仕事に納得できていない方，マンネリを打破したい方など，いま悩んでいる方にはぜひこのまま読み進んでほしい。

また，私のモットーである「ツナガル。」という表記であるが，昨今「つながり」「つながる」という言葉が多用されているなかで，もともとの，長く続く，つらなり続く「繋がる」という語には「しばられる，とらえられる」という意味もある。私の思う「ツナガル。」は強いていうと「綱がる」「連永る」という意味をもたせたものに使用している。「綱」は太く強い物の総称であり，助けとなるものの意をもつ。また一列に並び続く，連続する，仲間に加わっているという意味のある「連なる」と空間的，時間的

に端から端までのへだたりが相対的に大きいこと，永久であること，心や気質について，のどかで，のんびりしたさま，辛抱強いさまなどの意味がある「永い」を合わせている。つまり，太く強い結びつきで助けとなりながら，のどかにのんびりと長く連続して仲間に加わっている関係性に対して「ツナガル。」を使っているので，この表記をお許し願いたい。

2.「ツナガル。」図書館の可能性を考える

2.1　地域を知る

(1) 図書館員と行政職員のギャップ

あなたは，自分の住んでいる場所や，自分の勤務する図書館の自治体について，どのくらい関心をもっているだろうか。また，住んでいる人，働いている人に対してはどうだろうか。

公立図書館は，自治体によって設置される。その自治体が目指している姿はなんなのか，人口はどうなのか，どういう産業が営まれているのか等にも関心をもつ必要がある。

必ず目を通しておきたいのは自治体の目指す姿を描く「総合計画」だ。また，図書館は教育施設として教育委員会部局に属している場合が多数であるので，「教育振興基本計画」も目を通しておきたい。そのほかにも，自治体で制定されている例規や計画など，たくさんの行政資料がある。一度にみるのは大変なので，少しずつ目を通しておきたいところだ。自治体が地域をどう方向づけていくのかを知ることは，図書館の根幹である資料選定にも関係してくる。

地域の経済について知るためには，各種年鑑等もあるが，無料で使用できる RESAS[1] が有用である。さらに細かい情報が欲しい場合には，有料とはなるが，MieNa[2] も細かいデータが盛り込まれている。自治体内にはどんな企業が多いのか，人やお金の流れはどうなっているのか知っておくことも大切だ。

(2) 転機は突然やってくる

平成 8 年に図書館で働くようになった私。図書館や本に関係することにアンテナを高くし，最新の図書館の動向や新しいサービス，新館情報に目を向けた。地域の歴史を知るために，町史や資料館などの見学をし，多くのことを教えていただいた。図書館員向けの研修にもたくさん参加し，多くのことを吸収した，つもりだった。私が知っていると思っていた地域のことはごく一握りだったのだ。

図書館司書として働く私には，一番身近なビジネスパートナーである行政職員との接点がまったくなかった。それでも仕事はまったく問題なく進む。どれだけ図書館来館者，貸出冊数が増えても，行政部局からみたらそれは指標の一つでしかなかった。それを痛感し，転機となったのが，総務省が実施する研修「全国地域づくり人財塾」に参加させていただいたときのことだ。

その研修は，全国各地で実践されている自治体の課題解決へのヒントが学べる場だった。参加者はほとんどが若手の行政職員で，講師はテレビなどでもとりあげられることのある地域活動の実践者たちだ。図書館職員だと名乗ると，とても珍しがられた。3 日間で行われた研修では最後に「行動宣言」を行う。これからどういう活動をするのかを言葉にし，発表する。図書館の研修は知識を得られるものが多いため，講義を聴いて終わってしまうものが多いが，自ら考え，明日からどうやって行動するかを考えることの重要性を感じた。ちなみにこの行動宣言は，いまも自分のデスクの手に取りやすい場所に置き，ときどき見返している。また，研修を通じて出会った他自治体の職員とのご縁も，とてもありがたかった。

自治体職員がなにを課題としているかを把握するには「対話をすること」が必須だ。単にデータをみるだけでは十分ではない。図書館でせっかくコラボできるような企画展示をしても，行政の担当部局が知らない，なんてもったいないではないか。

(3)　図書館を飛び出して，切り込み隊長！

図書館のなかにいることはとても居心地がよい。図書館という箱のなかで守られているように思えるからだ。でもそのままでいいのだろうか。地域の課題を知ったいま，なにができるか，と考えて「ツナガル。」をしてみた事例を紹介しよう。結果として他課への貸出実績が 1 年で大きくアップすることになった。

①学校図書館からツナガル。（学校教育課）

ことの発端は，平成 23 年，ある小学校の読み聞かせボランティアさんが図書館に相談に来たことだった。話を聞くと，その小学校の図書室があまりにもひどい状況で，子どもたちもほとんど本を手にしてないのではないかというのだ。話だけでは仕方がないので，図書館員がプライベートで読み聞かせボランティアの一員として関わらせていただき，実際の図書室を拝見した。驚愕した。昭和の本が図書館入口の一番いいところに鎮座しており，新刊コーナーはあるものの，「どれが新刊なの？」と思ってしまうような状況だったのだ。調べてみると，一番古い本は昭和 29 年出版のものまで出てきた。本の天には綿ぼこりでカーペットのようになっており，このままではいけない，と立ち上がるきっかけとなった。

学校図書館の管理管轄は学校教育課だ。山武市には学校司書はおらず，司書教諭も完備されていたわけではなかった。そこで，何度も対話を重ね，できることから始めようという流れになった。まずは大掃除と除籍を行い，各学校に赴き，残す本にバーコードシールを添付した。この時点ではシステム化の話はまったくない。ただ今後チャンスが来たときにすぐに対応できるように準備していた。

その後，交付金を利用して，市の図書館システムと横断的に利用できる学校図書館システムを導入した。それに伴い，学校に図書支援員が設置され，いまでは年に 3 回，学校図書館担当の先生と，私たち市立図書館員，学校教育課，図書支援員が参加し，会議や研修の場を設けている。平成 30 年には文部科学省の「学校図書館ガイドラインを踏まえた学校図書館の利活用に係る調査研究事業」でも連携することができた。これにより，先生方や学校教育課職員のよきパートナーになることができたように思う。

②ビジネス支援サービスからツナガル。（わがまち活性課，商工会）

山武市では平成 29 年から「さんむエコノミックガーデニング」という地元の経済をゆっくり循環させるための手法を取り入れている。このエコノミックガーデニングという仕組みを日本で紹介したのが拓殖大学の山本尚史教授だ。

ビジネス支援図書館推進協議会のイベントで山本教授と知り合うことができ，山武市が山本教授とエコノミックガーデニングをスタートさせることを知った。ご著書『地域経済を救うエコノミックガーデニング』[3] のなかでも，ビジネス図書館の有用性が書かれている。そこで主担当課のわがまち活性課に突撃したが，第一声は「図書館がなにしに来るの？」というものだった。だがそこでめげることなく，会議の隅っこにいさせてもらえればいいから，というところからのスタート。参加者は地元企業の経営者たち。名刺をお渡しし，もらってもらえるものの，先方の名刺をいただけることはほとんどなかった。

だが，少しずつ会議に参加しているうちに，図書館が役に立てることが多くなり，最終的には閉館後の図書館を会議の場にしてしまおうという実践までこぎつけることができた。会議の内容によっては，すぐにその場で調べたいことなども生じるが，図書館だったら資料もネット情報も提供できる利点を最大限活かすことができたのだ。

彼らが図書館で一番最初にしたことは，図書館利用カードを作成することだった。仕事に活用できる本がある，ということが意外だったようだ。図書館としても新たな利用者層へのはたらきかけとなった。

③医療健康情報サービスからツナガル。（保健福祉部，さんむ医療センター）

成東図書館の徒歩圏に地方独立行政法人さんむ医療センターがある。いままでは，人間ドックの待ち時間用に本を貸し出していた実績はあったものの，連携することはまったくなかった。しかし，「いまあるもの」を洗い出したときに，「こんな資源はなかなかない！」と思い立ち，医療センターでお話をさせていただいたところ，講座を図書館で実施することができるようになった。まだまだこれからの事業だが，地元の資源を図書館で活用し，図書館利用者がさんむ医療センターや医師を知るき

っかけづくりをすることができた。

④展示スペースからツナガル。（企画課，健康支援課）

企画課の男女共同参画担当者がポスター掲示の依頼に来館した。男女共同参画をテーマにした落語会を開くとのこと。ちょうど図書館入口の小さな展示スペースが空いていたので，企画展示をすることにした。男女共同参画に関する市の計画や関連資料，落語のものまで展示した。企画課が持ち込んだのはポスター1 枚だったのだが，感激してくださり，会議で報告されたことがきっかけで，エリア全体で図書館との連携が話題になったそうだ。

また，課のなかで調べたいことがあったときのために，課名義の図書館利用カードを作成している。作成者は異動先でも利用してくれることが多い。これでレファレンスや資料の準備もスムーズに行えるようになる。

都市整備課が実施した景観事業「さんむの魅力フォトコンテスト」の作品が眠っているという情報を聞きつけ，そのままお借りして図書館で展示も実施した。図書館で一から企画しようとすると「募集+審査+表彰+展示」と大掛かりになってしまうが，すでに終わった事業の作品展示の場として図書館を活用してもらうことで，図書館は展示の工夫だけで事業が実施できたことになる。

そのほか，土木課や健康支援課で購入している住宅地図にフィルムコートをしてほしい，自分の課のイベントチラシを図書館で配布してほしい，など，多くの依頼が入ってくるようになった。

2.2　人を知る

地域の課題を把握したら，図書館でその課題を解決できる方法がないか考えてみよう。実現ができるかどうかはさておき，「夢は大きく」である。そして，まずは第一歩を踏み出してみることだ。

とはいえ，すぐに好転するわけではない。なにか新しいことを始めようとすると，前例がない，規則があるから等，やらない方向へ引き戻されてしまう流れを強く感じることも多いだろう。そんなときは，どうしたらその問題を解決できるのかを考えてもらえるようにするとよい。結局人を動かすのはアツい気持ちではないかと思ってしまう。

おはなし会以外のイベントがなかった当館は，「人」に助けられたといってもいい。そんなイベントを紹介しよう。

（1）夜の図書館たんけん（読み聞かせボランティア，ボランティア有志と）

図書館閉館後の時間を使って，夏の思い出を家族でつくってもらおうと計画したイベント。当時私の勤務していた山武市さんぶの森図書館は，広い自然たっぷりの公園のなかに建っている図書館だ。閉館後，懐中電灯をもって図書館から公園へ抜け，ミッションをクリアして戻ってきてもらうというイベントだった。

当初，図書館スタッフから賛同がまったく得られず，一時は開催を断念せざるを得ない状況だった。それを逆転させてくれたのは地元読み聞かせボランティアグループだった。私の企画を一緒におもしろがってくれ，「地元の子どもたちのために協力する！」といってくださり，事業をともにつくり上げてくれた。読み聞かせグループだけでは暗い公園の安全が確保できるか心配していた私に，ボランティアセンターの紹介をしてくれたり，ボランティア目線での課題を提案してくれたり，ほかのボランティアさんのフォローもさりげなく行ってくれたりと，大活躍してくださったのだ。おかげでこの企画は大好評。応募するために朝 5 時から並んでくださる参加者も出てきたほどだ。

（2）ライぶらりカフェ（地元の個人経営者と）

近年，図書館にカフェが併設されることが多くなった。しかし，さんぶの森図書館が建設された平成 10 年はまだそんな風潮はなく，「飲食物持ち込み禁止」が当たり前だった。そんなときに，山武市に移住し，キッチンカーで自家焙煎したコーヒーを提供する方と知り合った。

ぶらりと図書館に来て，コーヒーを飲みながら本を楽しんでほしい，そんな思いでチームをつくり，実現したのがこの企画だ。地元の人が参入するのはもちろん，図書館での企画（来館時にスタンプが押せるバッグ，図書館キャラクター）を立ち上げた。試行錯誤しながら，こちらも閉館後の時間を使って，館内でコーヒーを楽しめる時間と企画の提供という形で落ち着いた。現在は，私の異動先である

成東図書館で不定期開催されている。

（3）ART & LIBRARY（地元のアーティストと）

山武市で行われていた「山のおんぶ」というアート祭。この企画のために，地元のアーティストたちが絵画，版画，陶芸，木工など多彩な作品をつくり上げていた。そのアーティストの一人から，せっかくつくった作品がこの祭りの期間しかみてもらえないのはもったいないので，図書館で企画展ができないか，と持ち込んでいただいたのがこのイベントだ。最初は思い思いの作品を展示していたが，舞台が図書館ということもあり，2 年目からは図書館や本からイメージを膨らませて作品を制作してくださるようになった。山武市には美術館がないのだが，このイベント期間中はまるで図書館が美術館になったように感じられた。

（4）ドキドキ脱出ゲーム（地元高校生と）

「リアル脱出ゲーム」を大学図書館で行ったという記事を拝見し，思いついたイベント。図書館員有志で「東京ミステリーサーカス」（新宿）に行き，脱出ゲームについて学び，クイズを作成するために図書館資料などから一連の謎解きを行えるように計画した。

冬に開催したドキドキバージョンではホラー要素を多くするため，閉館後，真っ暗ななかを懐中電灯の明かりを使って謎解きするほか，地元高校の演劇部にご協力いただき，ものすごい迫力のモンスター役を演じていただいた。また，学校教育課長の美声にほれ込み，館内アナウンスをお願いしたところ，快諾していただいた。通常図書館には女性しかいないが，男性の声でのアナウンスだったので，迫力が増していたと思われる。

（5）おしごとリブラボ（ボランティア有志と）

図書館員がプライベートでいった旅行先で体験したイベントを軸に計画した体験型お仕事イベント。いろいろな作業ごとに図書館通貨「リブ」を稼ぐことができ，そのリブを使って，雑貨を購入したり，ゲームに参加したり，折り紙などの材料を購入できる。材料を使って手作り品をリブで売ることができるお店屋さんも体験できる。お金を稼ぐこと，そのお金をどう使うか子どもたちに考えてもらうことが目的のイベントだが，図書館の既存のスタッフだけでは目が行き届かないため，地元のボランティアさんをお願いした。

参加者はもちろん，ボランティアをしてくださった方もやりがいを感じていただけたようで，次回の開催が期待されているイベントだ。

3. 大切にしていること

事例をいろいろご紹介してきた。ここからは図書館員として大切にしていることをご提案したい。

3.1　変わることは大切

一度決めたやり方を変えるのはとても大変だ。継続していればしているほど変えにくい。ましてや，やめるなんてそびえたった壁を叩き壊すようなものだ。

だが，世の中はものすごいスピードで変化している。その変化に合わせて，図書館も変わってゆかなくてはいけないのではないか，と考えるようになった。変わることはやはり痛みを伴う。私のなかでの「当たり前」は，一緒に働くスタッフにとって「異端」と受け止められる場合もある。考え方，価値観の違いから臨時職員（当時）が辞めてしまうという失敗もあった。しかし，「変えたほうがいいんじゃない？」ということをそのままにせず，一度アウトプットしてみることは重要だと思っている。なによりも重要なのは，利用者にとって，いま取りうる最高の選択をしている，または選択をしようとしている図書館であるかどうかであろう。そのためには，いままでの常識やルール，当たり前をときにやさしく，ときに力技で打ち破る必要がある。図書館スタッフ間の真剣な意見交換は，図書館を大きく成長させてくれることはいうまでもない。

3.2　こだわりをもつことは大切

私のこだわりのひとつは「ネーミング」だ。同じ事業をやるにしても，ネーミングによって受け止められ方はまるで違うからだ。私が定期的にチェックしてしまうのが「銚子電気鉄道株式会社」。「ぬれ煎」からスタートし，全国的にも名前が売れている銚子電鉄だが，常に経営難に置かれている。その銚子電鉄が繰り出す物販やサービスがなかな

かおもしろい。売っているものは「ありそう」なモノなのに，ネーミングとコメントが秀逸なのだ。ぜひホームページをチェックしていただきたい。最近では，とうとう「電車を止めるな！～のろいの 6.4km～」という自主映画まで作成してしまった。経営難を自分でお笑いにしてしまいながら，インパクトを与えることができているのは，見習いたいところである。

当館で生まれたイベントのネーミングは以下のようなものである。

・ライぶらりカフェ
・としょかん春の本まつり
・メカクシ本
・なるトフェス！
・教えて！ドクター
・大人の楽校
・カミヒコーキとばそ！
・アオゾラヨガ
・つぎよもブック
・おしごとリブラボ

などがある。どんなイベントなのか，なんとなく想像ができるようにしつつ，オリジナリティを出せるように工夫している。

3.3　学び「続ける」ことは大切

前述しているが，私にとっての転機は総務省が実施している「全国地域づくり人財塾」に参加させていただいたことだった。これは 2 泊 3 日の泊まりがけでみっちりと「地域」についてなにができるのか，課題を考える研修なのだ。お声がけいただいたときは，「どうして私が？」という気持ちで，正直なところ「面倒くさいな」とも思ってしまった。

現地に行ってみるとその思いはさらに高まる。周りに知っている人は一人もいない（図書館員どころか教育委員会から来ている人すらほとんどいない）。基本的には若手。アウェイ感が半端ない。だが，いま，全国にいる心強い仲間たちと出会えたきっかけがこの塾だったのだ。修了後も学び続ける気持ちが生まれたのも，この塾の仲間たちのおかげだともいえる。

研修やセミナーなど，自主的に学ぶ場が増えてきているが，これは一時的なカンフル剤だと思っている。すばらしい事例や，専門的な知識を得ることでとても満足するのだが，3 日もするとルーチンワークに追われているうちに，元通りになってしまう。私は，学ぶことよりも続けることを重要だと考えている。仲間と一緒に学び続けることで日々成長し，変化しながら，目標に向かっていけるようになるのだ。

4.「101%の法則」とワークショップ

帝京大学で「森ゼミ」を主宰する森吉弘氏と研修会で知り合った。お話を伺うと，お人柄と刺激的なお話で一気にファンになってしまった。森氏は元 NHK のアナウンサーであり，キャリア教育改革を目指しているとのこと。研修で「101%の法則」のエピソードを伺った。今日の仕事を 100%と考えたときに，明日の仕事を今日よりも 1%でいいから頑張ってみる。

すると 1 年後の自分の仕事は目覚ましい変化を遂げていることだろう。

今回はワークショップでシートを用意し，改めて自分を見直し，言葉にする作業を実施した。参加者をグループに分け，グループのなかで語ってもらう。大切なのは，

①目的，目指すものは何かを明らかにすること
②目的を実施するための目標（道すじ）を決めること
③そのための手段を考えること

だ。ワークシートの記入によっていままで無意識だったことに気づいたり，自分でも気づかないことをメンバーがみつけてくれたり，対話が生まれていた。ちょっとの努力と気づきによって，自分らしく楽しく仕事ができたら「サイコー！」である。

5. おわりに～「ツナガル。」図書館のしかけ

私の知る図書館員の皆さんはとても優秀だ。資料に関する知識はもちろん，出版情報，図書館システム，SNS な

ど，図書館に必要な知識や情報源をたくさん知っていて，活用している。また，地域の偉人や歴史などに造詣が深い方も多い。

図書館総合展や，多くのフォーラム，研修会などで，とても素敵な図書館員さんと出会うたびに，「ああ，この方の働く図書館はステキだろうな」と妄想することも多い。今後の図書館の在り方，目指すべき姿を語り合い，刺激をたくさんいただいている。

また，全国の素敵な行政職員の取り組みも SNS や雑誌，ご著書などで拝見し，アイディアをいただいている。地域の違い，仕事の違いはあれど，アツい思いをもって日々の業務にあたられている皆さんには頭が下がる。

さらに，研修でお話を聞いた魅力的な講師陣にもヒントをたくさんいただいた。豊重哲郎氏は私が尊敬する講師のお一人だ。鹿児島の柳谷地区の公民館長となってから，補助金に頼らず地区の課題を住民の皆さんと解決していく姿は，「地方創生」の先駆け的な事例としてとりあげられることも多い。豊重氏は「地域に補欠はいない」という。みんなが地域の宝なのだという思いを改めて実感している。

図書館は市民にも近く，行政にも近い存在だ。市民と，行政，図書館がタッグを組むとそれぞれの強み，弱みを補い合い，三方よしの関係が築ける。忘れてはならないのは，大切なのは「人」だということだ。利害関係だけではなく，人を大切にすることで，「ツナガル。」図書館が完成する。それは自分にとっても「おもしろい！楽しい！」と思えるかどうかにつながってくると思っている。まずは，身近な人と対話してみる，そんな 1%の努力からスタートしてみるのはどうだろうか。

【注・参考文献】

1) 地域経済分析システム（RESAS：リーサス）．https://resas.go.jp/#/13/13101，（参照 2021-02-10）

2) 株式会社 日本統計センター．MieNa 市場情報評価ナビ．https://www.nihon-toukei.co.jp/solution/miena/，（参照 2021-02-10）

3) 山本尚史．地域経済を救うエコノミックガーデニング：地域主体のビジネス環境整備手法．新建新聞社，2010，230p．978-4879470706.

Author Abstract

This paper proposes some practical ways to achieve the goal of a small public library, focusing on collaborattion with public institutions and other social players. The author starts with the question, "What are librarians aiming for?"

A large libraries can cater their services as a place of lifelong learning, a base of local knowledge and so on. How about small libraries? It seems almost impossible to run proper projects due to the limited budget and staff who spend all their time in counter service. But the author views that it is not particularily difficult for even librarians in small libraries to implement their imagination by collaborating with adequate agents.

The important thing is to think about what the librarian can do. The author presents some examples that open up new possibilities.

編集後記

調査・研究レポート第 4 号をご覧いただき，ありがとうございました。今号は，当研究所主催シンポジウム記録（第 4 回「図書館とランドスケープ」および第 5 回「図書館とレジリエンス」）と，第 4 回ワークショップ「図書館員の未来準備」で講師をご担当いただきました豊山希巳江氏の講演レポートを掲載し，当研究所の主催イベントの内容が中心となりました。これまで 1 年遅れで掲載しているシンポジウム記録を，ここに今年度の分も加えて 2 本掲載しました。今年度はオンライン開催になったため，手話通訳の代わりに，音声認識による文字表示サービスを用い，それを人が修正して画面にのせるという手順をとりました。その結果，迅速にテキスト化できたのです。また，豊山様のワークショップでの語り口や熱量をそのままお伝えできればと考え，「講演レポート」という体裁としました。いかがでしたでしょうか。ワークショップの様子が窺い知れるのではないかと思います。

第 4 回ワークショップの領域「図書館の役割 1（図書館とコミュニティ）」では，豊山様と都城市立図書館館長の井上様に講師をご担当いただきました。お二人のお話のなかで共通していたのは，「できない理由を探すのではなく，できる方法を考える」という言葉でした。これは，新型コロナ禍のなかでも，例年の事業を一つも中止にすることなく継続しようと取り組んできた私どもにとっても，共感できるものでした。また，この言葉は今号に掲載した二つのシンポジウムの登壇者の方々のお話にも共通するところだと感じます。今号は，挑戦し続ける皆さまの言葉にあふれた，大変前向きな 1 冊になったと思います。（木村 瞳）

■ 活動実績 2020

未来の図書館 研究所（The libraries of the future research, Inc.）は 2016 年 4 月に設立し，図書館のあり方について，本来の役割を大切にしながら，社会の変化をとらえた新しい価値も視野に入れ，各研究員がテーマをもち，調査・研究をしています。活動の成果を活かし，自治体や教育機関の皆さま，図書館に関わる皆さまとともに，図書館づくり・運営についての課題のソリューションをみつけてゆきたいと思います。ここでは，2020 年度の主な活動をご紹介いたします。

1　図書館に関わる調査研究及び成果の発信

（1）寄稿・発表・講演等

・LIBRARIANS’ FORUM 2020「COVID-19 パンデミックが私たちに問いかけるもの」（後編）
日時：5 月 30 日（土）13:30～15:30
発表「ポスト真実の名残のなかのインフォデミック：Covid-19 下の公共図書館の対応」（永田　治樹）

・石川県公共図書館協議会主催講演会
日程：10 月 2 日（金）　於　石川県立図書館
講演「図書館の効果をどうとらえるか」（永田　治樹）

・第 68 回大阪公共図書館大会（書面開催）
寄稿「ポスト真実・コロナパンデミックと図書館」（永田　治樹）

・記事掲載
NEC ネクサソリューションズ（株）「ビズサプリ 自治体ポータル」内コラム「図書館つれづれ」（第 76 回，第 77 回，第 78 回）掲載

（2）主催イベント

・ウェビナー「図書館の未来を拓くスキル～ヒト・モノ・コトをむすぶ場づくり」
日程：6 月 22 日（月），6 月 29 日（月），7 月 6 日（月）
講師：太田　剛氏（図書館と地域をむすぶ協議会）

・第 4 回ワークショップ「図書館員の未来準備」
※日程：講師
10 月 5 日（月）：宇陀　則彦氏（筑波大学教授）
井上　康志氏（都城市立図書館館長）
10 月 12 日（月）：豊山希巳江氏（山武市成東図書館）
庭井　史絵氏（青山学院大学准教授）
10 月 16 日（金）：渡辺ゆうか氏（ファブラボ鎌倉代表）
10 月 19 日（月）：川嶋　斉　氏（野田市立興風図書館）

・第 5 回シンポジウム「図書館とレジリエンス」
日　時：11 月 27 日（金）13:30～16:30
登壇者：柴崎　悦子氏（名取市図書館館長），
三田　祐子氏（鳥取県立図書館）

2　図書館に関わるコンサルティング

（1）受託事業

・令和 2 年度都立図書館の在り方検討に係る調査検討等業務委託（2020 年 6 月～2021 年 3 月）
都立図書館在り方検討委員会の運営支援，会議資料の作成に係る調査の実施，報告書の作成等

（2）その他

建築設計事務所に対する新図書館整備・設計業務への協力や，図書館運営会社に対する研修支援や運営に関する助言等を実施

図書館を”ゆめ”いっぱいに

IIIF に対応したデジタルアーカイブのシステムを構築し、地域資源の利活用に貢献しています。

中野区教育委員会「中野区の仏教美術」

株式会社ヴィアックス　〒113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 真成館ビル 2 階　TEL. 03-3815-3788　FAX. 03-3815-3135
図書館事業本部　URL.http://www.viax.co.jp

Contents

■ **Introduction** ―――― **1**

■ **4th Symposium of The libraries of the future research, Inc.** : ―― **3**

Library and Landscape /

Mari ITO, Mitsuyoshi MORIYAMA, Haruki NAGATA

■ **5th Symposium of The libraries of the future research, Inc.** : ―― **33**

Library and Resilience /

Etsuko SHIBAZAKI, Yuko MITA, Haruki NAGATA

■ **Workshop on Librarian's Preparation for the Future : Lecture Report**

Possibility of the Library Born From "TSUNAGARU." ―――― **63**

Kimie TOYOYAMA

未来の図書館 研究所 調査・研究レポート 2020 第 4 号

2021 年 3 月 30 日発行

定価 2,000 円（税込）

編集・発行 株式会社 未来の図書館 研究所

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2 階

※2021 年 4 月 1 日より移転いたします

Tel.03-6673-7287 Fax.03-6772-4395

URL http://www.miraitosyokan.jp

印　　刷 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は，それぞれの筆者の個人的見解であることをお断りいたします。

本誌 PDF 版を当研究所ホームページ（http://www.miraitosyokan.jp）でご覧いただけます。